
アマガミという現実を楽しもう！

caltech

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミという現実を楽しもう！

【Nコード】

N6950U

【作者名】

caltech

【あらすじ】

目を醒ましたらアマガミの世界へ！？社会人としての人生から、第二の人生をスタートした主人公・遠野拓は、水泳を趣味としていたことから、同い年の塚原響や川田知子、そして後輩の七咲逢など原作の登場人物と次第に交流するようになる。彼の登場により、原作からどのような変化が発生するのであるか？そして、彼の運命は？

オリジナル設定と主人公を採用していますので、ご一読の際はご注意ください

第一話：目を醒ませばアマガミ

仕事を終えて電車で帰宅する際に居眠り。

いきなり目が覚めてみたら、眩しい光に小さな手にでっかい女性の顔。

ふと映った鏡を見てみたら、あら可愛い赤ん坊。つてこれ俺か？何で？

え？何これ？俺、赤ん坊なの？

そんなトンデモ現象、誰が信じられるか！

と声を出してみても、「あうあう」とひぐらしが鳴くどこかの村の神様みたいな声しか出ない。

最初は何かの事故か急病で死んでしまって、結果的に生まれ変わったのか、と思ったが

どうやらそうではないらしい。

カレンダーを見てみると、どうやら今年は1980年。

そしてそれを裏付けるかのように、古い型のブラウン管テレビに、女性の髪形や服装の様子。

新聞には、昔（といっても平成であるため今から10年以上先であるが）お袋がファンだと言ってた

あのアイドルの引退宣言の記事が一面にあった。

ということとは、過去に転生したのか、それとも平行世界へと転生したのか……。

昔読んだタイムスリップ系の小説の設定を思い起こして、

様々なパターンを現状に当てはめてみようとするが、合致するものは見つからなかった。
いずれにしても、この際、俺は別の人間に転生したと考えたほうがいいだろう。

不思議なことは未だある。

そもそも言語能力はおろか、思考能力も無い赤ん坊の身なのにこうやって物事を考えられるのは何故だろうか。

鏡を見たが脳が異常発達しているような状況ではなかった。

身体機能も、兄貴の息子と比較するにおそらく乳幼児としての標準であろう。

てことは、自分の精神とこの乳幼児がリンクしていると考えていいのだろうか……。

まあ、きつと夢を見ているんだ！

時間がたてば、きつと元に戻るんだ！

そうだ、そうに決まっている！

それなら、醒めるまでこの生活を楽しんでしまったほうが得って
んだ！

・・・戻れませんでしたorz

「戻る、戻る」と言っているうちに、小学生になってしまい、元号が変わってしまった。

しかも時間感覚は現実（既に前世となりかけている）と同じで。

ちなみに、俺の現在の名前は「遠野拓」。あだ名は「タク」や「たつくん」である。

在籍する小学校は、タコの滑り台が印象的な「輝日南小学校」。

前世（現実へは戻れないと悟り、それは過去のものと諦めた、以下「前世」に統一）

の記憶の影響からか、

同年代の友人は残念ながら多く出来なかった。け、決してぼっちだったわけじゃないぞ！？

だ、だって、一度社会人生活まで体験したわけだぞ！？

一度社会人になって、足し算引き算をやり直すことを喜んでやれる人間はいるか？

感情を発散して会話をする子ども相手に社会人が同等に接することが出来るか？

・・・つまり、小学生にそぐわない奇行が目立ったわけだよ。

「気に入らない先生の見解に対して、理詰めで反論を行い閉口させる」

「読書感想文に選ぶ本にあの100年の難題を提案した位相幾何学の数学者の本「科学と方法」を選び、レポート形式で提出して、先生を啞然とさせる」

など、正直きりが無い。

まあ、所謂ドン引きされた訳だ。

小学校低学年の時が、ドン引き最高潮だったな。一人寂しく図書室さ！

それでも、クラスの塚原響って子は仲良くなってくれたな。

塚原響と俺は、小学2年の頃にクラスメイトになり、1年間共に図

書委員を務めていた。

俺は、図書室の本が少しでも読める機会が得られると思って志望し、塚原響も同様に本が好きだったようだ。

最初は会話もしてくれなかったがな。流石にあんな素行じゃ話しかける気にならなかつただろう。

だが流石に1年間、無言で作業をする環境はなるべく避けたい。

うなれ！俺の社会人スキル！新人研修や営業、度重なる宴会での培った技術を見るがいい！

え〜っと、ソウルオリンピック（1988・9・17-10・2）が終わったけど見ていたかな？

そうだ、鈴木 地が100m背泳ぎで金を取ったつけ、あとは女子選手ではジャ ット・エ ンスが

金を総なめにしていたな。前世では小さすぎて見れなかつたから貴重だつたなあ。

そこ、ボキャブラリー少ないとか言うな！ リーグはまだ発足してもないんだぞ！

さて・・・、競泳の話だけど伝わるか？

それでも、この子なら水泳の話が伝わりそうだ。何故だろう、証拠も無いのに確信している俺がいる。

「なあ、そういえばソウル五輪の背泳ぎ見た？鈴木 地の泳ぎ、凄かつたよな！」

「うん、凄かつた！」

反射的だったのであろう。塚原響は、俺の問いに対して即答した。

俺は、黙々と作業していた隣の女の子が身を乗り出してきたのに驚

いたが、
俺は反応してくれたことに喜び、会話を進めていった。

俺も、前世では学生時代に水泳を生きがいにし、社会人でもマスタ
ーズ選手として活動するほど、
好きだった。泳法やトレーニングの本を読み込み、メニューに応用
することも多々あった。
そついった経験から、俺は彼女と話を弾ませていった。

ソウル五輪の話で水泳のことを思い出し、とたんに俺は
現世でもやりたいと思ひ、親に行きたいという意思を伝えた結果、
響と同じスイミングスクールや水泳クラブに所属することになった。
もちろん、専門種目は前世と同じ自由形！
やっぱり、あの有名漫画家が描いて映画化されたマンガには影響さ
れるよね！？

・・・流石にブーメランパンツは昔過ぎて、なかなかなじめなかつ
たが。
股に食い込むぜ・・・、超食い込むぜえ・・・！

そこで、同学年の川田知子と仲良くなったな。

響の顔を見ても感じたのだが、彼女の顔を見た際、違和感を感じた。どこかで彼女たちを見たことがあるんだが・・・はて、どこだったか。

「拓君、どうかしたの？」

「たつくん、帰り遅くなっちゃうよ？ダツシユダツシユ！」

「はいはい、今行くよ」。知子、走ると転ぶぞ。」

とまあ、こんな感じで二人に引つ張られながら過ごしていたなあ。

精神的にはこちらのほうが二周り以上年上のはずが、主体権が完璧に取られている。

オマセさんなのか、いずれにしても女の子は強いなあ・・・。

あ、知子が転んだ。いきなり走り出して石に足を取られたようだ。

俺の世話を焼くくらい人の動向をよく見てたり、占い好きな真面目な子なのに、

どこか抜けているんだよね。

響が、知子の近くに寄る。

アカデミーのバツクから消毒薬と絆創膏を取り出し、知子の擦り剥いたヒザに適切な処置を行う。

あいつはいい医者になりそうだなあ。

実際あいつは医者になるし、・・・ん？なんでそう思ったんだ？

このデジャブの正体は、4年生に上がって迎えた夏、スイミングスクールに顔を出したある女の子の登場によって判明した。

「今日から一緒に泳ぐ七咲達ちゃんです。皆さん、仲良くしてあげてください。」

「な、ななさきあいです。よろしくおねがいします。」

先生の紹介の後に、緊張しながら紹介する少女。

・・・ああ、ようやくこのデジャブの正体があった。

この世界は、「キミキス」「アマガミ」の世界なのだ、ということが。

第一話：目を醒ませばアマガミ（後書き）

この作品は、アマガミ・キミキスの二次創作で主人公「遠野拓」がこの世界に転生した設定となっております。

オリジナルの設定としては、

- ・アマガミの塚原響とキミキスの川田知子が同学年で同じスイミングスクールである
- ・塚原と七咲が同じスイミングスクールに所属している
- ・主人公が少なからず過去の塚原・川田・七咲らに参与している

を採用しています。

主人公が水泳をやっていたり、数学好きなのは、著者の趣味の反映です。

どついう流れになるか、生暖かく見ていただけると幸いです。

改筆：2011/7/8 後書きをフォームに入れて編集

誤字・誤表現を修正：2011/7/8

誤字や意味不明な表現が多すぎる。皆様、ごめんなさいorz

?あのアイドルの引退宣言が一面にあった

あのアイドルの引退宣言の記事が一面にあった

?この場合は転生・・・と考えたほうが良いだろう

いずれにしても、この際、俺は別の人間に転生したと考えたほうが良いだろう。

？（現実とは過去のものと諦めた、以下「現実」）

（現実へは戻れないと悟り、それは過去のものと諦めた、以下「前世」に統一）

？気に入らない先生の意見に対して、論理武装して手玉に取る

気に入らない先生の意見に対して、理詰めで反論を行い閉口させる

？読書感想文にあの100年の難題を提案した位相幾何学の数学者の本「科学と方法」を対象に書いて

読書感想文に選ぶ本にあの100年の難題を提案した位相幾何学の数学者の本「科学と方法」を選び、レポート形式で提出して、

？クラスメイトの塚原響しか仲良くなってくれなかったな。

それでも、クラスの塚原響って子は仲良くなってくれたな

追記：2011/7/8

塚原先輩と主人公の交流について加筆。

第二話：アマガミは人生

夏の午後4時。

スイミングスクールに初めてやってきた女の子、七咲逢と俺は出会った。

「今日から一緒に泳ぐ七咲逢ちゃんです。皆さん、仲良くしてあげてください。」

「な、ななさきあいです。よろしくおねがいします。」

ジグソーパズルを完成させようにも、ピースが足りなくて悩んでいたところに、
ピースが振ってきたようだ。
全ての違和感やデジャブに対する疑問がこの瞬間払拭された。

塚原響に川田知子。そして七咲逢。

彼女らは、前世でプレイしたゲーム「アマガミ」「キミキス」の世界の登場人物に間違いない。

そうなる新たな疑問が俺の頭に浮かぶ。

・・・つまり、俺はゲームの世界に転生してしまったのか？
しかも、何故「アマガミ」や「キミクス」なんだ？

確かに前世では、休日にゲームのプレイして面白いと思っただし、
印象に残ったゲームではあるよ。

最近はこの人生を楽しむべく、「アマガミ」「キミクス」に関する記憶は

脳の奥底に眠ってはいたが。

そうなる、この現世が俺が見ている夢の可能性が再浮上してくるぞ。

そのうち、進学して学校法人で主に構成された都市で変な超能力を
手に入れたり、

2000年くらいになってセカンドなんたらが起こったりすれば、
確実に俺の夢だな、うん。

うつ・・・、そうなる、「今の人生が実は全て夢でした、テヘツ」
説が有効になってくる。

過去の人生に戻ることを諦めて、この人生を楽しもうとする俺の意
思が揺らいでくる。

元に戻るかもしれないんだぞ？こんなところでブラブラしてても
いいのよ。

もうすぐ昇進して家族に国内旅行をプレゼントするつもりだったん
だろ？

一生懸命に努力して掴んだ学歴や社会地位、そして当時のことが俺
に声を掛けてくる。

急に前世の俺の親父とお袋、友人達や先輩や後輩の顔が浮かんでく

る。

やべっ、何か胸の奥がうずく感じた。目じりに何か溜まってくるの
が分かる。

頭の中ぐちゃぐちゃで、のどがカラカラだ。

自問自問のループに気を取られ、自分の感情がコントロール出来な
い。

俺は、どうしたらいいんだ。俺は……。

……なんだよ、肩を掴むなよ。こっちは今大切な考え事している
んだ。

言いたいことがあるなら、後にしてくれよ。

肩を叩かれた方に顔を向けてみる。響だ、俺の目（多分赤みがかか
っている）をじっと見ている。

その眼は俺をしつかり映すほど大きく……って、うお！顔近い！
俺は思わず仰け反り、響もそんな俺にびっくりしたのだろうか、後
ろに背を反らした。

「拓君、大丈夫？先生の話をちゃんと聞いてた？あなたと私でこの
子の担当をするそうよ。」

「ふえ？あ、ああ……」

何だ、響か。びっくりさせるな。

情けない声が出ちまったよ、はあくびっくりした。

瞼を押さえながら息を大きく吐く俺に、響は声を掛ける。

その声は、心配で溜まらないという想いが伝わってくるようであっ

た。

「・・・泣いてたの？」

「な、泣いてなんかいないさ。」

目尻に溜まった涙を腕でこすって、響の顔をチラッと窺う。

響の顔は眉毛がハの字になって、困った表情を浮かべている。

私はどうしたらいいの、という心の声が聞こえてくる。

やれやれ、バレバレか。

こいつも知子同様、人のことを良く見てお節介を焼きたくなる人間なんだよな。

それなのに、自分の予想と反した事が起こると慌ててしまう慌てん坊さんだし。

響を困らせるわけにはいかないな。

「心配するな、ちょっと目にゴミが入っただけだ。」

俺は苦笑してそう言い、響の頭をポンツと手を置いた（年相応の少年のような笑顔を出すことは出来ない）。

響は目を閉じて、ホッと息を吐き出した。うん、これでコイツも落

ち着いたかな。

俺も落ち着いたし、そこで不安そうにこちらを見ているあどけない女の子を

そろそろ安心させてあげないとね。

・・・そこのお前、精神年齢は四十路前のオッサンが何を・・・、と変な眼をするんじゃない。

決して俺はロリコンじゃないぞ。いいか、小さくて可愛いものに対しては保護欲が

発生することは父性と呼ばれるごく自然な現象であり、

俺のこの感情もそれに類するもので・・・

アーアーキコエナイキコエナイ)。。。。(？こら、無視するな！

「七咲逢さん、でしょうか？」

「は、はい。ななさきあいです。」

俺の事務的な様子に対して、たどたどしくもしっかりした声で返す七咲。

いかんいかん、社会人時代の癖がまだ抜けていないようだ。反省しなければ。

その表情は新しい環境に対する緊張の色が現れているが、眼は俺と響の姿を映し、逸らすことはなかった。

七咲逢は後輩なのに主人公よりもすっかりした面倒見のいい後輩、という印象をプレイの際は受けていたけど、

この頃から七咲逢はすっかりしていたのか。
これはゲームに無い新しい発見だな。おっと、すっかりお兄さんを
しないと。

「僕は遠野拓。こっちのお姉さんが塚原響。

プールのことですぐに困った時に君を助けるお助けマンだと思ってくれて
かまわないよ。

困ったことがあったら、何でも言ってね。」

「は、はい！とおのお兄さん、つかはらお姉さん、よろしくおねが
いします！」

七咲の不安な顔が、邪気の無いあどけない笑顔に変わる。

子猫が気持ちよさそうにしている顔が下から目線で俺に襲い掛かる！
うっ、可愛い。こっちもついつい笑顔になってしまう。

俺のATフィールドが簡単に中和、あるいは融解！助けてよ、三
トさん！

こら！ロリコン乙、とか言うな！

これは父性から生じた感情だったの！

しかし、七咲のあどけない笑顔を見て、こっちは思ったな。

この世界が例え夢でも、俺の目の前にいるゲームのキャラクターか
もしれない

女の子のこの行動がパターン化されたプログラムの産物だとしても、
人間として感情を表し、動く七咲をそんなプログラムとしては扱え
ない。

そうなんだ、俺に動いている世界や人間をただの作成物だと判断する能力や

知識は何処にも無い。思い込みでこの世界にいては、この子のみならず、

今の俺の両親や知子、響にだって迷惑を掛け、傷つけてしまう。

そうだ、ここがいつか去る世界だとしても、俺はここを去るまでにこの世界を第二の人生だと思って生き抜こう。

最後はプログラムのバグとして消去されたり、前世の自分が覚醒するかもしれないが、それまでは頑張ってみよう。

「こちらこそ、よろしく。七咲さん。」

俺はそう言い、まだ水に濡れていない七咲の頭を撫でた。

年少者の純粹なあどけなさに対する父性、を持って。

そんな俺を横の響と少し離れて練習に向かっている知子が見ている。

・・・おい、知子。何で少し膨れっ面なんだよ、お前は。

掴んでいるビート板を齧るな、何年生になったんだよ。

「別にい〜」

世話焼きな俺の同級生は、俺達に背中を向けて、手に持っていたキャップを頭に被ってゴーグルを着用し、スタート台からプールに飛び込んだ。

最近学んでいる競泳のスタートの飛び込みを真似た姿勢で、である。知子の身体は、水面と平行に保ちながら放物線を描いた重力運動を行い、

水面へと落下した。パァン、という渴いた音と水しぶきを飛ばして「腹打ち」した知子は、お腹を擦りながら「いてて」と言っ、こつちを向いた。

やれやれ、慣れない事をするから。俺は、軽く息を吐いた。

「七咲さん、プールや学校では落ち着いて行動しよう。」

「そうね。」

さて、こうして俺と響は七咲逢の担当になった訳であるが、担当とは何ぞや、という疑問に対して答えていこう。

このスイミングスクールでは、プールでの泳ぎに関してはコーチ（選手を育てる大人）や先生（泳げるようにする大人）が担当することになっているが、それ以外のメンタル面や一般生活などは、同年代の子どもがサポートするようになっている。

これは、年上の人が年少者に対してお兄さんやお姉さんを責任を持つてできるように教育するシステムである。

水泳は、突き詰めれば自分の現在の記録と勝負することが本質の競

技である。

そのため、自分の泳ぎ方、精神状態、肉体の様子などが勝負の要であり、これを改善するには人の意見を聞くことや、他の人を見て振り返ることが大切であるらしい。

そこで、普段からお兄さん、お姉さんが出来ていれば、人の動態を把握することに慣れ、故に同年代の間で意見交換や自分自身への気づき、がやりやすくなる、

ということが、俺が分析して得た私見である。

要は、「人の振り見て我が振り直せ」という事かな。

いずれにしても、七咲逢との出会いは俺に大きな影響を与えた。

一つは、俺が今こうして泳いでいる環境は実は第二の人生などでは無く、

ただの俺の幻想である可能性を感じ絶望を覚えたこと。

もう一つは、この世界を虚偽のものとしてではなく、紛れも無く現

実であると認識し、
前向きに生きることを決心させたこと。

そんな出会いを迎えつつ、俺達の年月は次第に過ぎていった。

(次回へ続く)

第二話：アマガミは人生（後書き）

研究室の合間の時間より、第二話を投稿。

文章としてはブラッシュアップできていない状態なので、
改筆する可能性もありかも。

誤字修正：2011/7/13

×世話焼きな俺の同級生は、俺達に瀬を向けて、手に持っていた

世話焼きな俺の同級生は、俺達に背中を向けて、手に持っていた

自分の存在している世界が夢であると知った時、

自分だったらどう考えるんだろう。ということを考えてみました。

やはり転生するのであれば、ここは避けては通れないはずであって、
自分なりに感じたことを書いて見ました。

川田センセは、キミキスの大人のキャラクターが頭にあるため、
幼少期や学生時代を反映することが難しいなあ。

プロトタイプですが、お楽しみいただけると幸いです。

第三話：6年目のデアイ（前書き）

注：性的表現はありませんが、男のお宝に掛ける思い（少々エロ話題）をライトに記述した内容があるため、そういう内容や表現がお嫌いなことは戻ることを推奨します。

第三話：6年目のデアイ

七咲逢（以下、逢。スイミングスクールでは名前呼びとノー敬語なんだぜ。）の担当をし、先生をからかいながら、知子や響の勉強を見てやって（知子は国語は俺よりも出来るのには驚いたな、響は何でも高得点なのにやたらと俺に聞いてくるんだが。）、本屋においてあるマンガや上映されている映画を懐かしい懐かしいという生活が2年続き、俺は小学校6年生になった。

いやはや、小学校生活短いね。授業は寝てるか、机に本を隠してそっちの勉強したりとか高校生活で良くやった内職術のスキルを磨くことに精を出しすぎて全然覚えてねえや。先生、マジスミマセンデシタ（棒）。

2年間で変わったことなあ。数年後にこの学区を対象に入れた小学校として、新しく輝日東小学校という建物が出来るらしい。

そうそう、逢が背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ、クロールの4泳法を泳げるようになったんだよ。いや、バタフライの時はなかなか試験に合格して次の級に進級できず、泣き出しそうになっていたから心配していたんだけど良かったよ。うんうん。

そして、ほとんどの子はそこで辞めていく中（俺らの台も俺、響、知子の三人だけ、中学以上は一人。）、逢だけは遠野お兄さんや響お姉さん、知子お姉さんみたいになりたい、と言って選手育成のコースに転向してくれたな。あの時は、なんか娘の成長を見守る親父の気持ちが分かるような気がしたよ。

そして俺の環境も変わった！

「ウソだろ、ぼっちだったんだろ？」「6年間、通年ぼっちだったんですね、分かります？」だと？

分かってねえ、お前ら全く分かってねえ！

俺も同学年の連中と男の友情を結んだんだよ。

しかも、その友情は口約束なんてものじゃねえ、共通の魂を持ったソウルメイトたちなんだよ……。

一つの大きな集団となっているんだよ……。

そう、「有害図書委員会」という集団でな！

同じで少し前のことについて話しておく。

二度目の小学生も、もう1年で終わってしまうという時期に気がついたんだよ。

来年は中学生だし、そろそろ男友達を作っておいたほうがいいかなと思ったんだよ。

中二病を発症したりして難しい時期のやつらを一人で相手するのは精神的にきつそうだし。

中学生を超えてしまえば、高校生。

高校生なら、それなりに一般的な常識と価値観くらいそれなりに備わるはずだから、

俺との精神年齢が一致するはずだし。それまでは、頑張って会話のレベルを合わせて見せるぞ。

流石に5年以上この環境に置かれて大体のこの世代の子の考え方くらい読めるさ。

空気は読めるんだぜ、俺！

水泳クラブで友人できなかったのか、って？

水泳クラブの活動期間は夏だけ。しかも他のクラブと掛け持ちでやらないと駄目だったから、

結局俺や響、といたつもの面子や

最近基礎的な泳法を覚えて選手コースに変更した逢（もちろん、七咲のことだぞ）くらいしかいなかったぞ。

他はスクールでも見たこと無いような奴ばかりでな、

やる気があるのかないのか分からなくて距離を置いていたんだよ。

話が逸れちまったな。

そんな感じで、友人欲しい！というわけで何か行動しないと、と思っただけさ。

ある日、プールの定期メンテナンスで練習が無いから、放課後に校舎裏の飼育小屋をぶらついていたんだ。

何で飼育小屋なんだ、って？ウサギを見に来たんだよ。

だって、ウサギ可愛いじゃんか。

俺も昔（前世の小学生のころ）、ウサギ買っててキャベツを食べる

姿に癒されたりしてたわ。

てか、何で小学校の飼育小屋ってウサギが定評なんだろうね。

飼育小屋の近くまで来た時に、何か複数の話し声がしたんだよ。

小屋の近くの植木の陰でひそひそと。

何かと思って見たわけさ。

いじめだったから見逃すわけにはいかんし、悪いことだったら暴力を行使しても

止めてやる。

ガキの頃の喧嘩なんか、どうせ大学生の頃に笑い話のタネになるだけだし、

悪いことなら拳で分からせるってのも、この時期の子どもならありだしな。

俺も前世では先生に廊下に立たされたし。

さて、植木の陰で何をしてるんだね！

とおそろおそろ植木の陰を覗き見る。

そこ、ビビってるじゃねえか、とか言うな！

ここで俺が見た植木の陰の光景をお伝えします。

植木に最も近い左手に見えるほうから、

男性週刊誌から切り取ったグラビア記事の切れ端を握ったままこちらをみて硬直中の男子児童一名

兄貴か親父の棚から拝借したと思われるエロ週刊誌をガン見してこちらに気がつかない男子児童一名

右手に見える方には少年漫画のエッチな1ページを捲っている最中に俺に気がついた男子児童一名。

計3名がいらっしやいました。

どう見ても紳士の会議です、ありがとございました。

うん、分かるよ。

俺も1年前に、ほとんどのオトコノコが経験するあの出来事を経たよ。二回目だな。

今回は既に予想できていたから、下着を慌てて洗濯機の中にぶち込

むなんて

衛生上良くないことはしなかったぞ。

前世のお父さん、お母さん。あの時は、洗濯機にあんなものをぶち込んですみませんでした。

精神的には成人だったから、エロイことは転生の時点から興味があったけど、

身体が幼稚園児とか身体的に未発達なときは、精神的な欲求を支える肉体の成長が

追いつかなくてな。結局不健全な生活を送っていたよ。

もちろん、世間に顔向けできないようなことはしてないぞ！

知子に背中からよく抱きつかれて、

微妙な胸のやわさにドギマギしたくらいだぞ！

だから、ロリコン氏ねとかいうな、っつーの！お前らも当時、体験したことあるだろうが！

てか、あいつ、俺と響が逢の担当になったあたりくらいから

理由無くベタベタ俺にくっついてくるんだよ！

今では、男性機能も整いつつあるし、今は男としての義務をしっかりと果たしているぜ！

おいでませ、紳士達の夜の活動！久しぶり、日課！

まあ、彼らもオトコノコとしてお年頃になったわけだ。
うんうん、初々しいね。

「な・・・なんだよ、何か俺たちに用でもあるのかよ！」
「何も悪いことしてねえし、何か文句でもあんのかよ！」

左手に見えていた奴と右手の奴が、立ち上がって答えてきた。
強がってるな！。

顔真っ赤だし、ニヤケたままじゃないか。耳もそれ以上に真っ赤だし。

いや、別に用も無いし、悪いとも思っていないし、文句もねえよ。

「お宝の鑑賞会か？」

「う・・・うるせえぞ、コラ！殴るぞ！」

顔を真っ赤にしたまま、三人が立ち上がる。

股間のオットセイが「びんびんなう」って主張したままの光景は正直、

俺の腹筋が崩壊させるのに十分であった。

「・・・ま、まあ、落ち着け。別に悪くもねえし、恥ずかしいことでもねえさ。俺だって家で同じようなことをやっているだろ

うし、先生みたいな大人は俺達よりもすげえ本を持っているだろうさ。」

こみ上げてくる笑いに堪えつつ、俺は彼らにゆっくり話した。

正直、小学生のそれなんて社会人のそれに比べたら可愛いものだし

な。

三人は互いを見やり、要点の掴めないような戸惑った顔をした。真ん中の奴が少し苛立った、動揺を隠そうとしているような漢字でもあるが、俺に話しかける。

「じゃあ何だよ、俺達に何が言いたいんだよ。」

「そんなちっぽけなものじゃなく、遥かなる高みに興味は無いか？」

「遥かなる高み？」

「そうだ。俺が、お前達を新世界に導いてやる。」

某週少年雑誌に掲載された某主人公さんみたいなことを言って、俺は彼らに手を伸ばす。

そっだ、俺達は武力ではなく、新世界で完全に理解りあうことができる。

俺がガン ムだ、と叫んだ彼も武力ではなく、対話で相互理解したんじゃないか！

少年達は俺を呆然と見た。

俺の影が伸び、少年達を包んだ。太陽が俺の背後に隠れたな。もしかしたら少年達から見た俺の姿は後光が差し、まさしく新世界の神様みたいに思われたのかもしれない。

彼らは、恐る恐る手を伸ばし、俺の手を握る。

この日、「有害図書委員会」が発足した。

そして現在に戻る。
どうだ、素晴らしい友情の結び方だろう！

「悪の成人小学生が、子どもを悪の道に染めようとしている」？
「こいつには児童指導室ではなく、営倉が必要だ」？
「魂じゃなくて、欲望で繋がっているじゃねえか」？

てめえら・・・

あゝ、まあ戻るぞ。

彼らは、俺とクラスメイトではないが同学年であることが判明し、
今でも「有害図書委員会」の初期メンバーとして動いている。

有害図書といっても、別に青少年保護に違反するような書籍や将来
褒められない性癖を誘発する恐れのある書籍は一切入れて無いぞ。
社会でマイナーな性癖に目覚めて、変ゼミナールみたいなところ

でしか褒められないようになるのは、一般人を装うにも気力があるしな。

そういうわけで、この話は全年齢対象の至って健全な作品だ！！そこんとこよろしくう！

俺の存在が18禁指定？褒め言葉として受け取っておこう。

今日も練習が始まる前までの、放課後の委員会活動だ。

活動に向かう前に、知子と響を捲く必要があつたな。知子からは、「たつくん、何処行くのよ！練習あるのよ！」と腕掴まれて引き止められそうにし、響からも「何か悪いことでも企んでいるんでしょ？ほどほどにしておきなさいよ。」とまるで俺のお袋のように俺を諭してきた。

いつものように、「わりいな、ちょっとあいつらと用事があるから、また後でな！」と行って逃げたけどね。後ろを振り向くと、腕を振り上げて「コラー！逃げるなー！」と大声を上げる知子に、無言で眉は困ったような形をしているが、それでいて目元や口元は笑っている響が見えた。すまん、男の友情は魂で結ばれるくらい堅い物なのさ！

奴らや新規加入した奴ら（勿論全員同学年）計8名が、体育館裏の体育用具予備置き場前に集合した。

俺達のお宝本（入荷ルートは主に廃品回収で放置された古本雑誌がメイン）は、

この中の古びて使われなり放置された跳び箱の隙間に隠してある。神社も探してみただけど家から遠いし、先客がいたしな。残念。

今回の議題は、徹（初期メンバーの一人、グラビア記事を握っていた奴）が廃品として放置された本「89、ローアングル探偵団ベストセクション」の品評会だ。議論としてのレベルは小学生ゆえに物足りなさはあったが、全員（端からすれば無駄なこと）に全力を注いで話し合ってたな。きっと学者や研究員になったら、その探究心と議論で素晴らしい成果を挙げられると思った。

しかし、ここで招く予定の無い人物が現れた。

ガサガサという茂みに何かが入り込んだ音と背後から音、そして足音がした。

俺は全員を見やる、全員何が起こった？とお互いを見やって戸惑っている様子だ。

ぼけっとしている場合じゃない！お前ら、解散！解散だ！逃げ！！

「先生に見られたらやっかいだ！！片付けて逃げるぞ！」

と徹がヒソヒソ声で委員に話しかけて逃走準備に入り、あらかじめ決められていたルートを使って逃げ出した。

他の委員も徹の用いた同様のルートを経由して逃走した。戦争とい

うのは、勝つことも大事だが、もしもの際にはうまく逃げて損害を出さずにうまく負けることを考えよう。いやあ、宇宙の魔術師元帥ってすごいよなあ。そのおかげで、今まで先生にも見つからず、こっぴどく人生楽しめているんだから。

俺も逃げに掛かったが、一冊のローアングル探偵団が片付けきれなかったことに気がつき、逃げる準備が遅れた。くっ、失敗した！こんな初歩的なミスで・・・！
足音がとまる。背後に気配。既に、その足音の主はかなり近い位置にいるようだ。

俺は観念して、後ろを振り返ることにした。

「そんなところでなにやってるの？」

「よう、あつたのか？」

声変わりが始まりかけた二人の男の子の声と共に顔を見た。

押しは弱いけど温かみのある優しいような顔をしたサラサラ髪の優しい声を持った少年、

そしてスポーツ狩りのねじり鉢巻をつけたら寿司職人のような快活な声を持った少年。

幼き日々の変態紳士、橘純一と梅原正吉であった。

(次回へ)

第三話：6年目のデアイ（後書き）

はい、話の中に変態紳士たちと絡めていきたいと思い、そのイントロダクションとしての第三話です。

この話は、構想では5行にして、いきなり第四話を第三話にしようと思ったのですが、橘さんと梅原さんを語る上でエロは欠かせないだろ、という訳で蛇足になるかもしれないが書いておきたいと思っただため、急ごしらえしました。

ちなみにスイミングスクールでは、名前呼びに敬語なしが常識のように物語では扱ってますが、あくまで筆者の体験談です。中学、大学では先輩に対して、敬語にさん付けで話してましたし、一般的には無いと思います。

ふう・・・

第四話：紳士達の華麗なる談義

おさらい！

紳士達の放課後を楽しんでいたら、本物の紳士達がやってきました！以上！

・・・

「そんなところでなにやってるの？」

「よう、何かあったのか？」

うん、間違いないだろう。少し顔つきが幼いが、こいつらは将来の輝日東高校の変態紳士達、橋純一と梅原正吉だ。まさか、こんなデアイイベントが発生するとは思わなかったぜ。それなら先にイベント選択画面を出しておいてくれよ、あっはっは。いや、エンターブレインさん。ここにシステムエラー出ますよ、エビコレ版ではデバックしておいてくださいね。

おっと、現実逃避しているところじゃない。落ち着け。この場をなんとか取り繕って、こいつらが俺達の崇高な活動を先生に報告して委員会が解散させられたら溜まったものではない。俺は入学当初から先生に目をつけられていて怒られることが当然だと思ってスルーできるけど、俺のソウルメイト達が怒られて評判が悪くなるのは避けたい。それに俺と遊んではいけない令が保護者に蔓延して、ぼっちライフ再開ということも考えられるしな。

そうだな、しゃがんでいてこいつらからは俺の靴と本は見えないし、あいつらが逃げる音を聞いていたかもしれん。ここは子どもの遊びの定番、「鬼ごっこをしていた！」って事で話をこまかすか。

「いや、ちょっと鬼ごっこしていて靴ひもがとれちゃったーあー！おい橋、これえっちい本だぜ！」

「うわー、梅原。僕、初めてこっぴつ本見るよー。」

・・・目論見が初っ端で頓挫しました。こいつら、俺にさつとに近づいて、このお宝本「ローアングル探偵団」を見つけやがった。子どもの好奇心とその行動力って半端無いよな。就活の時の適性検査をやったとき、「考える前にまず行動する」、って選択肢があったけど、そのタイプは正に今ここにいるような奴らのことを指すな。

俺の足元に隠しておいたお宝本は、梅原によって拾われ、その中身を開かれた。橋も、梅原の肩越しに本の中身を見ていた。ページをゆっくりめくっては、二人で目を細めてページの一部を凝視したり

(何を凝視しているのやら)、「おおー！」と手に力を入れて叫んだり忙しくしていた。叫ぶのはいいけど手に力を入れるな、雑誌にシワが入る。大学生以上とは違って、お金を稼ぐことが出来ないからそういった当たりのお宝を手に入れるのは本当に難しいんだぞ！

「う、梅原。スカートの短い人が階段上っていたらこんな風になっちゃうんだね・・・。」

「お、おお。少々短すぎるから、こんな風になっちゃうんだろっけど。」

と話す彼らをよそに、俺もここからの挽回のシナリオを必死に考えていた。この際は時間はどんな宝石よりも価値があるものでな。

という訳で俺の脳内会議スタート！

さて、今回は「お宝本を持ち込んだ俺を知った小学生2人が先生や周囲に広めないようにする」ということだ。この会議では、その課題達成のための戦術的な枠組みを作りあげる事が主目的である。諸

君らの活気ある議論を期待する。

「例えば、こいつらの意識を物理的に絶って「僕たちが見たのは夢で遠野先輩という人とは出会いませんでした。」とする案はどうだろうか。」

「・・・マンガじゃあるまいし、一対二じゃ失敗する確率が高いと思うがの。」

「ゲームの棚町薫くらいの腕力とスキルが無ければ無理だぞ。」

「急所を狙う技量に問題があるため失敗の確率が高いし、物理的手段を用いるということでも暴力的であるという風評が生まれる。俺にとってリスクな選択肢だ、却下だな。」

「夢想。」

「では、より強い刺激のあるものを与えて俺に対する印象を薄くする方針はどうだろうか。これならば、物理的な衝撃を与えることも無く、そっちに対する意識で俺のお宝本のことなんて周囲に広げようとする気が起こらなくなるかもしれない。」

「小学生を対象として、エロより印象の強いものがこの学校内にあると思うかね。」

「偶然を装って、より上級者向けのエロを故意に与えるのか？正直、こいつら変態紳士の性癖が一般人のベクトルと大きく方向を変えるきっかけとなりそうで青少年を害することになりそうだ。道徳的にも教育的にも非難されそうだ。」

「実行しようにも時間不足や人的資材の不足で達成は無理だ。」

「外道。」

「・・・じゃあ、こいつらをいつそ仲間に組み込んでしまえばいいじゃん。」

「『『それだ』』」

「了承。」

以上、トオノ・ミューティレーションの様子でした。

方針が決まり、現在は方針の枠組みと課題について話し合っています。

す。

仲間に引き入れるという方針で決まったが、問題は引き込むタイミングだ。原作の高校生でのこいつらの性格ならば、簡単に引き込めそうだけど今のこいつらに当てはまるか否か。どこで会話の主導権を握って、人心掌握を行うか。さて・・・

「なあ、エロの大将！あんた、こういう本を学校で読んでいるのか。」

「ああ、隠し場所があつてそこで読んでいるんだ。尤も、最近の俺はそんなお宝のレベルじゃ物足りないがな。お前らはこういう本についてはどうなんだ？」

梅原にそう聞かれて、俺は軽く様子見のジャブを打つてみる。
乗ってくるか来ないか、次の話がどう出てくるか、表情はどうか、それをシミュレートしながら俺は考える。

前世で、仕事のやり方を教えてくださった小野田課長！仕事の指導やスキルアップの方法について厳しく指導していただき、おかげでこういう場面でロジカルに考えることが出来ました！見ては欲しくないですけど、見ていてください！

「こつこつという本どうなんだって聞かれてもよ、こちらら小学5年だぜ

「確かに興味はあるけどよ、俺らにやまだ早いんじゃないのか？」
「う、うん。僕もそう思う。興味はあるけど、本屋さんに入るの
恥ずかしいし。それに買おうにも、梨穂・・・桜井や美也がぺたぺ
たくつついてくるから、家に持ち込んだり出来ないな。」

梅原も橋も、紳士的な面を言葉の端から感じさせるものの、大人の
意見や周囲の目から消極的であることを主張した。しかし、俺はそ
んな意見は予測していたさ。お前らが、成長してから他を圧倒する
紳士になっていったことから推察してたさ。

「でも興味はあるんだろ？」

「まあ、俺達も男だしな。」
「うん、興味はあるよ。」

なんだか道徳的に駄目な人間を演じている気がするがそんなものは
スルーしないとやっていけないぜ。

ジャブからワンツーに繋げて、試合の主導権をこっちに引き込むぞ。

「早いとはいえ、俺達は数年後どのみち読むのさ。早過ぎれば俺た
ちに変な価値観を植えつけてしまって、性癖、考え方、感じ方が他
の人と違うようになってしまって悪い方向に進んでしまうかもしれ
ない。だが、逆に俺は18歳までそういった本を経験をせずに過ご
したクソ真面目な奴の方が問題だ。大学での飲み会でのそういう話

題についていけず、彼女を作った際でも学校で教わらないからどう
いうことをしたら良いか分からず短期で別れ、夫婦生活も学校の教
本がないから性生活が巧くいかず墮落。そっちの方が生物学的な生
き物、社会的な生き物として問題だよ。周囲の目が心配なら、そう
いう周囲の目の無い環境を見つければいい。」

なんだか、小学生のくせに先生みたいなことを言ってるな俺。諭す
ような声を作り、橘と梅原に語りかける。俺こそは愛の伝道師だ！
決して、悪の道に墮落を導く精神的詐欺師では無いぞ！！

「でもよ、やっぱり親や先生の目は恐くねえか？」「うん。やっぱり
先生に怒られそう・・・」

「愚か者！！！！」

カウンターの右ストレート。畳み掛けるならここだな！
先生の目や親の目を気にする人間は大きくならねえぞ！！

「先生や親の言うことを聞いて人生を幸せに過ごせる、だと？お前から本気でそういつてるのか！？いいか、男はいずれ自分の足を頼って動き、自分自身の頭で考えて動かなくちゃならないんだぞ！？就職したらもう親は助けてくれないんだぞ！先生は学校を去ったら、もう教育対象外にカテゴライズされるんだぞ！？それを自覚しろ！俺達の性は俺達だけのもので他に介入させちゃいけないんだ！戦わなくては、ここで！大人にコントロールされ過ぎないことをここで学ぶんだ！今！ここで！いつか自分達が社会で自分を持って戦う日に備えて！自分の思いを守るんだ！大人に勝つんだ、勝て！勝て！！」

「ファツキユー・・・ぶち殺すぞ」という焼き土下座を成し遂げた利川さんみたいなことを言ってるな、俺。まあ、一回人生で社会人として独り立ちした時まで体験しているから感じたことかな。

橘も梅原も、口をあんぐり開けたまま俺を見ている。
ボクシングで言うと足にキテる、最後の一撃だ。

「お前達を勝たせてやる。どうだ、俺たちと一緒に新世界へ来ないか？」

静寂。俺のシミュレートのルートが失敗していたか？

表情や空気の読み間違いをしていたのか？正直、ここで失敗すると俺の中学生生活は最悪なものとなる。

失敗したら、他県の私立か国立中学の過去問をやって、他県に高飛びするかな……。

二人の様子を見る。梅原と橘の肩や足が震えている。どうなんだ、恐がらせて結果県外逃亡か、はたまた残留か！

梅原の口が開く。その時、俺・遠野拓に戦慄が走るツ……!!!

「た・・・大将、いや！御師匠様！俺、梅原正吉、どこまでも御師匠様に着いて行きます！」

「ぼ・・・僕も着いていきます！感動しました！」

テクニカルノックアウト。俺の勝ちだった。

何はともあれ、残留できそうだ。良かった。響や知子、そして七咲や徹ら有害図書委員会の奴らのいる今の生活はそれなりに気に入ってるし、良かった良かった。

「そうか、おめでとう。君達もこれで俺・遠野拓12歳が率いる「有害図書委員会」の立派な一員だ。」

「ありがとうございます、お師匠様！」

「遠野先輩！よろしくお願いします！」

そうかそうか、はっはっはっは！！！！安心したからか、何かハイテンションになっちまったぜ！頑張って「くれたまえ諸君！銀河を掛

ける「有害図書委員会」の面々には、ホワイトホール！白い明日が待ってるぜ！！なんてな！まだ放送されてないけどな！はっはっはっは！！！！！！」

「有害図書委員会・・・？たつくん・・・何をしていたのかな？」

ん？決まってるじゃねえか！たくさんのお室に触れることで、一歩大人の階段を上る組織のことだよ！！はっはっはっは！！・・・ん？どうした？ソウルメイト・梅原にソウルメイト・橘。そんなキョドった行動をして。」

「へえ、お室・・・ねえ。たつくん、最近付き合いが悪くなったのはそういうエッチなことをしていたからなんだ。ふーん。」

え・・・この、この、え、は、俺は後ろを振り向く。

鬼の形相をした知子が、他を圧倒するオーラを持って立っていたのである。

あゝ、これは逃げられないな、テへ

「友達やお兄さんを探しているっていう子を探してたときに、たっくんの姿を見つけたと思ったら、なに年下の子達を悪の道に引き込もうとしてるのよ!!!」

瞬間、知子の右腕が消える。

いてえ、腹筋がいてえ!!!左の腹部に右のボディーブロー（勿論物理的な意味で）、意識が持つてかれる!!!

しかも、ボディーブローした手にに持つてる水晶は何だよ!!!

知子に説教&物理的な教育的指導を受けていながら、知子の後ろを見ると、茶色がかった髪の毛を持つ柔らかい雰囲気を持った女の子、

ところどころ髪が跳ねたネコっぽい女の子と手を繋いでいる響がため息を吐いていた。やれやれ、といった感じた。さらに後ろに誰か隠れているような気がしたけど気のせいかな？女の子たちが俺に指をさしているのが見える、響は「大丈夫。いつものことだから。」といってる気がするぞ。これが・・・いつも

の痛みなのか・・・？

ぐふ・・・、意識が跳びそうだ・・・。

お・・・？響と手、を繋いでいた女、の子たちが手を離、してこっちに向か、グフ！、ってくるぞ・・・？

「にいに、梅ちゃん！ど言ってたのお？みゃーとりほちゃん、すつごく心配してたんだから！」

「純〜、梅原くん。大丈夫〜？」

ああ、やっぱり美也と梨穂子だったのか。

グフツ！・・・合流、出来たの、なら、早めに逃がしてや、らねば！！

「ソウルメイト・橘純一、梅原正吉！その子たちを連れて逃げるんだ！！」

「しかし、殴られてる遠野先輩を置いていくわけには……！」

「御師匠様！俺達はここに残ります！」

「馬鹿野郎……お前は俺の、ソウルメイトであり後輩だ。だから、俺が守、つてやんよ！さあ、俺がこの怪力水晶女を、相手している、うちに逃げるんだ……！」

「し、師匠……！」「先輩！」と咽びながら二人が話す。お？俺、ガフツ！今かつこよぐ、ねえか？二人は敬礼（軍隊での最高礼）を行い、俺は左手で返礼する。

「いくぞ美也！梨穂子！」「あ、待ってよにいに！」「ししよおおおお……！」「じ、純一、待ってよ……！」

俺はそのまま意識を失った。後で響に聞いた話だと、目がグルグル巻きの上にカエルみたいに伸びていたらしい。写メールがこの時代にあつたら、もう生きていけないな。携帯電話のない時代で本当に良かった。

……

・
・
・

目を醒ますと、小学校の校舎のベンチの上。時刻は夕方6時・・・、
練習さぼっちまったなあ。はあ。
すぐ傍には響があり、少しはなれたところに知子が遠巻きに俺に対
して視線を投げかけていた。

「はめを外すのは良いけど、ほどほどにしようね。拓君。それから、

今日はスクールにはお母さんにお休みを入れておいたからね。あと知子が、やりすぎたってしよげてたから後で謝っておきなさい。」

「はい……。」

響が俺の頭を撫でて、その場を離れた。あいつは本当に俺のお袋さんだよな……、本当に小学生かよ。

逢には悪いことしたな、後日お小遣いでジュースをおごってご機嫌を取るかな。

響が知子の傍を通り抜ける際に目配せをしていた。入れ替えて、知子がやってくる。苦虫を噛んだ様な複雑な顔をしているな！。

「たつくん、ごめんなさい。ちょっと、やりすぎたわ。痛かったでしょ……?」

「いや、俺の方が妙なことをしていたから当然の報いさ。悪いな、わざわざ殴らせたりして。」

気にすんな、という感じで俺は知子の茶色がかったロングの頭に右手を置いて、くしゃくしゃする。知子は少し顔が赤くなって俯き、自身のTシャツのすその部分をギュッと掴む。目線だけこっちを見ている感じだ。うーん、まだ落ち込んでいるのか？なんか小声で、ボソツと言ったけどなんだろ？聞こえなかったな。

どうやら俺が失神した後、徹たちが、戻ってきて俺達の活動内容について説明したそう。それで響や知子は、先生には言わないことを約束して（流石に活動をするには自重しろとの意見はあったそうだが）、万事円満に収まったらしい。

やれやれ、今日は橘や梅原、それに美也に梨穂子と原作キャラと多く関わる日だったな。関わること自体、原作の雰囲気をつぶ壊してしまう可能性があるけどいいことなのかな？この人生を楽しく過ごす、って2年前のあの時に決めて色々行動して楽しんでるんだけどな。やっぱり原作は原作のままがいいって思いもある。高校生活までには色々決断しておかなくてはな。

その前にもっと身近にやるべきことはあるけどな。

「 夏季室内選手権」

俺達にとっては今年初の公式戦、逢にとって初の公式戦である。

ちなみに結構先の話であるが、「有害図書委員会」は俺達の卒業と同時に解体。

そこで得た友情は以降も持ち越されることとなる。

一部の噂では、橘、梅原という児童が翌年秘密裏に活動していると噂を徹から聞いたが、事実がどうかは確認していない。

(次回へ続く)

第四話：紳士達の華麗なる談義（後書き）

ご一読ありがとうございました。

書き貯めは以上となります！

第五話：泳ぎの中にドラマがある

今日は少々雲が掛かった天気！うん、いいレース日和だ！そう、今日はスクールの選手コースに在籍している子どもがほぼ全員参加する水泳大会！長水（超水路：50mプールのこと。ちなみに短水とは25mプールのこと）の公式プールで泳げるし、公式のタッチ板でタイムが測れる連盟の公式試合だ！

腕を回してみる。腕も良く回るし、肩の稼動についても問題は無い。テーパーも掛けたからか、身体もすごぶる軽いし堅さも感じない。こりゃベストが出るな。

そんな風に考えながら鼻歌混じりに最寄の駅までの道を歩く俺。ちなみにその鼻歌は、ミスルのSign。今から干支が一回りしてから販売される曲である。

ふと共に歩いている右側の女の子を見る。七咲逢という表情も動きもオイルの切れたロボットが歩いていた。ギギギ・・・という擬音が聞こえてきそうだ。おまけに左手と左足が同時に出ている、こりゃ試合までになんとかせにゃあな。

「逢、あまり硬くなるなよ。」

「ダ、ダイジヨウブデスヨ。」

あのく、どこの国の生まれですか？と聞きたくなるほどの片言の日本語。しかも敬語になってるし。参ったな、何かいいアイデアはないのか？助けを求めるかのように、左手の同学年のお姉さま方たちを見る。響は、私に聞かれても巧く対応できないわよ、という想いを表すかのように、俺に困ったような眉と「へ」の字の口元を見せる。まあ、こいつは原作にもあるように予期していなかったこと

や子どもの相手が得意ではなかったからな。さて、もう一人は・・・、目が合って即座に視線を逸らすなよ。結局俺が何とかせにやならんのか、メンタルコンディションが崩れてしまいそうだ。

そんなことを考えながら駅に着く。SUICAとかICカードで払えれば楽なのに、と思いつながら行き先の駅とそこまでの運賃を確認して往復分の切符を買う（ちなみにICカードはこの時期では試行段階）。知子、響、逢も切手を買ったことを確認して、改札機に通し、駅構内の乗り場で電車を待つ。輝日南高校の水泳部のジャージや他の団体のジャージを羽織った選手も同じように電車待ちをしているのが見える。ラジカセをポケットに入れて音楽を聴いているようだ。身体がリズムに合わせて揺れていて、足でリズムを取っている。

『まもなく、二番線に各駅停車・・・行きの電車が八両で参ります。』

電車到着のアナウンスが入り、電車が左から来るのが見える。電車がゆるゆると速度を下げ、その動きを止める。プシューという音と共に扉が開き、俺達は電車に乗り近くの座席に四人並んで仲良く座る。休日の朝早くなのにも関わらず、それなりに人の姿がまばらに目に付いた。とは、いいつも半分以上はジャージ姿か、俺達と同じだな。おつ、なんだスクールの卒業生の方々もいるじゃないか。俺は、右に逢（しっかりと左手で俺のジャージを握っている）、左に知子にびっしり挟まれて座っていた。ロリコン乙、って声が外野から聞こえているような気がするな。もう慣れたぜ、ロリコンで結構だ、今の俺は小学6年生だし、この世界の社会で見て問題は無いぜ！

「輝日東のプールってどんな感じなんですか？」
「それなりに泳ぎやすかった気がするよ。」

俺達の向かい側に座っている他チームの男子と女子が話している。そう、今回の大会は輝日南ではなく、輝日東の地域で行われるのだ。いままで、この地区から離れた大会に出場したことはあったが、輝日東で行われる大会に出場するのは初めてだった。アマガミの原作となる舞台であり、そのため俺は時間と金が許せば行きたいと思っていたのだ。もしかしたら原作キャラの昔を見られるかも、と期待していたりしていなかったり。

それにしても、すみません知子さん。なんか俺の方に詰め過ぎじやありませんか？確かに、目的の駅に至るまでに車両内の人の数も増えて立っている人も出てきたから仕方ないとは思うけど。あと・・・、正直あなたの身体が触れていると、その柔らかさに意識せざるをえないんですよ。ほら、この車両内の老若男女の視線が集まっているのが分かるし、外部から、「やっぱり小学生が好きなんですね」とか「作者の妄想の酷さがあり」と分かる」とか言ってるじゃないか。なんか最近、知子さん様子が少しおかしいよ。おかしいですよ、カテ ナさん！

「あの・・・知子さん？」
「・・・なによ。」
「・・・なんでもないです。」

うん、雰囲気ですべて倒されました。今は何も聞かなくていいや。そして逢さん、ジャージ掴まれてるとラジカセをポケットから出せな

いんですけど・・・駄目だ、緊張のし過ぎで声も聞こえないくらい固まってやがる。響さんもどうしたら良いか、対応に困った感じの顔をしている。対応に困ってるのは俺もそうだって・・・あと、たまに視線が俺と知子の間に行くのはなんでだ？はあ、みんなしっかりしてくれよ。試合なんだぜ？そんなことに頭を悩ませながら、俺達を乗せる電車は確実に輝日東への道のりを進んでいた。途方にくれた俺は視線を窓の外に向けた。周囲の住宅街には似つかわしくない、大きな豪邸があり、普通の邸宅とお城みたいな豪邸の混在するアンバランスな町並みに俺は苦笑してしまった。

会場に着いちやいました。「ん？七咲はどうなったのか？」って？俺のジャージを相変わらず掴んでますよ、凄い力で。会場のコーチにも助けを求めたが、結局緊張をほぐす方法に失敗していた。やれやれ、2年間面倒を見て懐いているのは分かっていたが懐かれすぎるところというふうな事も起こるのか。

その状態のまま会場入り。毛布の敷いてある俺達の場所に腰を下ろして、コーチに渡されたプログラムを見る。達の10歳区分の50m自由形が初めて、次いで俺の50m自由形。その後、知子の50mバタフライに響の50m背泳ぎ。時間を置いて、響の100m個人メドレー、知子の100mバタフライ。そして七咲の100m自由形に俺の100m自由形・・・最初にレースでこれじゃあ、スクール内の記録会で測ったタイムとは大分かけ離れた酷いものに

なるだろうな……。しかもこれじゃウォーミングアップにいけないし……

こうなったらヤケだ！前世でプレイしたゲームの中で学習した妹キャラに有効であろう手法を実行してやる！

「逢。少し目を瞑ってる。」

「ハ、ハイ。トオルオニーチャン。」

片言語を喋って逢は目を瞑る。俺は右手で逢の額に掛かっている髪を書き上げ、そのおでこに……

デコチューした。

そう、俺は「キミキス」という紳士育成ゲームの中の相原光一という主人公が妹に取った方法を、俺は逢に適用したのである。他に方法は無かったのかこの変態、だと？通常の方法は考え付く限りやってみたさ、前世における経験則からコーチングスキルの実践まで全てな。結果あれだったから、もう非常識で攻めるしかないだろ？だから変態紳士という非常識を採用したのさ。前世でやってたら間違いない、頭髪が禿げ散らしになるまで牢獄に突っ込まれたであろう。

逢は顔を真っ赤にして、俺の方を見ていた。言葉を出そうとしているが何て言えばいいのか、という表情を浮かべている。数秒がたつと、視線が泳ぎっぱなしだ。そんなに慌てなさんな。俺もいつ警察や周囲の大人に捕まえられないか、とマジでパニクル5秒前なんだよ。たとえ今の俺が小学生であって、社会人として道徳的にやばかったことくらい認識しているさ。

「逢、落ち着け。」

と俺はアワアワしている逢に対して穏やかな声を掛けた。カチコチになったり慌しくなったり忙しいやつぢやな。でもカチコチで話しかけても生返事ばかりのフリーズ状態よりかは、反応してくれるだけ前進したな。逢の視線が俺の顔を見つめる、視線の揺らぎは無くなったようだ。

「よし、固さは取れたな。いいか、これは俺流のおまじないだ。逢が最高の泳ぎが出来るための、な。いいか、あとは落ち着くだけだ。ゆっくり、息を吸って吐くんだ。・・・よし。頭に意識が行くかもしれないがそれでいい。ああ、意識しすぎて赤くならなくてもいい。その位置を水面に合わせてように思って泳げ。それが、お前のベストの泳ぎに繋がるはずだ。」

「う、うん。」
「分かったら着替えてアップに行ってこい。ブイをここに忘れていくなよ。」

「うん！」

「か八かだったか巧くいったのかな？逢は頬が赤いのを別とすれば、いつもの笑顔ができるようになった。よし、知子に響、更衣室に連れ・・・、お前らが顔が赤くなって硬直してどうする・・・。」

「た・・・たたた、たつくん、い・・・いま、逢ちゃんにせ・・・せせせ接吻を・・・！」

知子、お前接吻なんて難しい単語良く知ってたな。何かの歴史小

説を読んで覚えたのか？響よ、言葉にならないって感じたな、パク
パクと口が動いているぞ。

「お前ら！しっかり逢を頼むぞ！」

と、俺は二人の肩をそこそこ強く叩いて自分のウォーミングアップ
に向かう。それなりにその場を離れて、俺は後ろを見た。二人はほ
ーっとこつちを見ていたが、俺が逢を指差すと気づいたように逢を
連れて更衣室に向かった。やれやれ、世話のやける子達だ。

アップ開始！200mほど泳いで身体をほぐし、キック、プル、
コンビネーション、ドリルを行う。うん、身体はいい感じ。飛び込
みは・・・、反応はいい感じ。タイム・・・、よしそれなりだ。あ
とは100m泳いで身体の中の乳酸を流そう。

プールサイドが上がってスタンド席を見渡す。お、あれが輝日東
高校の水泳部か。あそこが、響や逢の未来の居場所になるんだな。
未来・・・か、俺の未来に居場所はあるんだろうか。プールで色ん
な表情や意図を持って泳いでいる選手達は未来があると思っ
て疑わ
ないだろうな。実際、俺も前世ではそうだったと思う。未来がある
と思う・・・、俺にそれが出来ているのか・・・。

窓に映った自分の顔を見る。いかにも、シヨボーン（ノ・・・
という顔をしている。いかな、俺はこの人生を、今を生きると決
めたはずだ。だから俺はこの今、大会に一生懸命になるべきだ。よ
し、モチベーションが上がってきたぞ。もう大丈夫だな。

逢達が泳ぐ組の50m自由形の召集が始まったようだ。緊張した

顔をしているが、落ち着きがないというものや何も手につかないという類のものではないようだ。言わば程よい緊張感というものだろうか。たまにおでこに手を当てている。・・・我ながらこっぴड़かしいことをしたな。お？次が逢のレースか。逢たちが各自のレーンまで役員達に誘導される。俺は、響や知子と共に誘導される逢を通り道の傍で「落ち着いていけよ」と声を掛ける。

逢は、そんな俺達に気がついたようだ。目で大丈夫というサインを送っているのだろう、顔には意思が固まったような顔をしていた。逢の名前が、電光掲示板に表示される。

「3 七咲 逢 スイム輝日南

と。おお、原作ではこんな表現無かったからな。なんか、得した気分だ。

『続きまして、女子50m自由形第7組のレースを行います。』

と役員がアナウンスを行う。周りの選手、そりや自分より高学年や中学生だから大きいな。大きい選手ばかりで萎縮していなか？・・・大丈夫そうだな。ホイッスルが鳴る、選手たちが各々スタート台に上がる、静寂が周囲を包む。

『用意・・・』

ピッ！

レースが始まった！スタートは・・・順調！次は浮き上がりだが、これもクリアだ。泳ぎもいつものダッシュ練習と同じ、前半から飛ばせている。他の選手に身体半分先んじている。そろそろ折り返し、残り25mだ。周囲の選手が追い上げてくる、周囲は後半型か。しかし、逢もまだまだ粘っている。さすがの負けず嫌いだ！残り10

m！泳者たちはほぼ横一線になりつつある！残り5m、4、3、2、
…どうだ！

俺達は電光掲示板を見る。

「3 七咲 逢 スイム輝日南 2 3 4 . 3

」

・・・あれ？最後は4コースの選手に負けたけど、早くね？短水のベストよりも早いぞ？うん、凄いいじゃないか。よおし、今度は俺の番かな？頑張ってくるか！逢がプールから上がって知子や響に眩いばかりの笑顔を振りまいているのを横目に俺も自分の招集を待った。

俺の半フリ（50m自由形の略）は大きなベストの更新ではなかったが、満足できる結果であった。中学、死ぬ気で頑張れば全国大会も出場できるかもしれないぞ！ふいー、これで当分レースも無いから応援に精を出すか。お？知子、次半バタ（50mバタフライの

略称) だろ? どうした、難しい顔をして。頬も赤みがかっているし。

「た、たつくん、あのね。」

「おう」

何かお願いでもあるのか? いいぜ、今ベストが出て凄く機嫌なんだ。さあ、この愛玩動物・遠野拓に何なりと申し付けるが良い!! ジュースか? 食い物か? マッサージか?

「あ、あああ、あたしにも、えと、あの、その、・・・」

「おいおい、落ち着けよ。」

アワアワし出す知子を落ち着かせようと俺も穏やかな声を掛ける。レース前に慌ててどうするよ。なんだ、トイレか? んなわけ、ないわな。

「どうした? 俺に出来ることなら何でもするぞ?」

「ほ・・・ほんと?」

「俺は自分の発言には責任を持つぞ?」

「よ・・・よし、じゃあ、あたしにもおでこにチューして!」

おう、まかせろ!・・・って、ええええええええええええええええ!!

何言ってるやがるんですか、この子は!

「だ、駄目なの？」

「い、いや、でも、なんで？」

「な、なんだっていいじゃない！逢ちゃんの大ベストが出たんだから、その、そう！ゲンかつぎ！ゲンかつぎよ！」

明らかに今考えた理由つばいが、・・・してほしい、っていうことは目を見りやあ分かるわな。はあ、コイツはやらないと、頬を膨らませて機嫌悪くなるし・・・。今回りに誰もいないし、問題は外部の声くらいだな。ロリコンやら社会の敵とか、もう12年も言われていれば慣れたわ。

「分かったよ、やるよ。」

「ッ、ほんと？」

「本当だよ、ほら目エ睨れよ」

やれやれ、いつもは仕切りたがりのお姉ちゃんなのに、何か良く分からないところがあるんだよね。でも、こういう駄々っ子という子どもっぽい面もあるんだよね。やれやれ、そういうところは可愛いんだけどな。

先ほどの逢と同様の行動を適用する。俺の唇が知子の綺麗なおでこに触れる。触れた瞬間、知子の身体が一瞬震えた気がした。数秒の後、俺は知子のおでこから唇を離す。知子の顔を見る。頬の赤みが先程よりも濃くなった印象がある、視線が俺を捉えられなくなっているようだ。・・・おいお前、次・・・レースだよ・・・な？

「知子？」

「っ！こ、これでベスト間違いないよ！？じゃあ行ってくるわよ、ベストじゃなかったら酷いんだからね？」

ベストじゃなかったら俺のせいになるのかよっ！と心のなかで叫ぶ。知子は、そのままレース用の水着とゴーグルを持って召集場所へ向かった。表情は読めなかったが、足取りは軽やかで機嫌はよさそうな気がした。結果、知子の泳ぎは男子顔負けの泳ぎで大きく記録を伸ばした。まあ、俺はいい事したのかな。

知子のレースが終わった後、俺は荷物の置いてある場所に戻った。カセットテープ別の変えるか、そうだなド カムにしよう。前世でも良く聞いたし、「何度 も」はレースのたびに聞いていたし。目的のカセットテープをナップサックから取り出した。突如、頭上から声を掛けられる。

「拓君」

「おお！？」

ビックリして、カセットテープが手から発射され、垂直方向に撃ちあがる。打ち上げカセットテープは、一人の女の子の手にすっぽり収まった。

「どっしたのかしら、そんなに慌てて。」

「頭上から声を掛けられたらびっくりもするわ。」

響である。いつものように微笑を顔に浮かべて、無事着陸できた
ド カム入りカセットテープを差し出した。俺はそれを礼を言っ
て受け取り、カセットテープの中身を入れ替えを行う。

「ねえ、拓君。」

「ん？」

響の問いかけに、俺は反応する。

「……私にもおでこにキスをしてくれないかしら。」

「……流行っているのか？俺のデコチュー。しかも、響が、だぜ？」

75

「……一応聞く。何でだ？」

「レースで良い結果を出したいの。私一人だけじゃ何か足りない気が
するの。そのために拓君の……その、力が助けになるかもしれない。
そう、何となく思ったのよ。」

「……つまり、メンタル的な部分で俺という支えが欲しい、と？」

「でもなあ、お……」

「知子にはしたのに私には出来ないのかしら？」

見てたのかよ！もう少し周囲の視線やら何かに敏感になっていればよかった。・・・そう言われると、断る理由が、人格的な面で相対的に考えて駄目という如何にも人としての面を否定しなくてはならないなあ。それはいけないことだ・・・仕方あるまい。

「はいはい。お前さんには勝てないな。」

「あら？拓君は私に勝とうと思っていたのかしら。」

勝てないな、と俺は思いながら、本日3度目の紳士的行動を行うことをした。

俺の1フリ（100m自由形の通称）も満足できる泳ぎでベストを出し、全レースを締めくくることが出来た。今回は、逢を筆頭に知子、響のベストの更新が著しかったな。全国大会出場権取っちま

ったぞ、あいつら。クールダウンを終えた俺は、荷物置き場に戻ることにした。そのとき、大きな声援が聞こえた。あそこは、輝日東高校だったな。応援の代表がかすれつつも大きな声を上げて応援している。それに呼応して男子部員、女子部員が声を一生懸命出してレースで粘るチームメイトを応援している。

懐かしいな。俺も前世の学生時代、あんな感じだった。腹筋が3日間使い物にならなかったな。あんな体験は、今後出来ないと思っ
たし、まさしくそうだった。輝日東高校・・・か。

俺はこのとき、自分の進学先の一つとして輝日東高校を考え始めるようになった。

レース終了後、会場から最寄りの駅までの帰り道。

俺たちは川を右手に、往路でも通った河原を歩いていた。往路で

もなんか見たことがあるな、と思ったが、今更アマガミで絢辻さんのお姉さんが犬と行き過ぎたお戯れをしていたりしていた、あの河原じゃないか。そう思うと、今この道を歩いている経験がかけがえのないものだ、と、感じてくるな。いやはや、人間認識一つですぐ印象変わるなあ、現金な生き物だ。

そんな現金な俺はいま、機嫌の良くてくつついてくる知子やニコニコが隠せない響、興奮と喜びで一杯の逢に囲まれるという傍から見ればハーレムの状態であった。野郎の視線や、女子選手のキャピキャピした声が俺に振るかかる。お前ら、少しは落ち着け。これじゃ、おれが女の子をはべらせる小学生女キラーにしか見えないだろ。つたく。

そんな時、川の近くに赤いランドセルを背負ったさらさらなロングの黒髪の小学生が佇んでいたのに気がついた。その少女に最も接近した時に、その手には印刷された文字、鉛筆で書かれたペンで書かれた赤い丸で一杯のA3サイズ用の紙を数枚手に握っているのが見えた。そんな用紙に彼女は、忌々しげな視線を浴びせていたようだった。身体が、震えていた。言葉は聞こえないが、何か呟いているような気がする。そして彼女は、俺達が歩いている方向とは逆方向に走り去っていった。彼女が後ろ向いたその一瞬、彼女の赤いランドセルに付いていた名札が見えた。

「あやつじつかさ
絢辻詞」と。

(次回へ続く)

第五話：泳ぎの中にドラマがある（後書き）

ご一読、本当にありがとうございます。

次第にオリジナルの設定が増えることに不安の気持ちはありますが、自分の解釈を大事に物語を完結までゆっくと走り続けたいと想います。

誤字修正：2011/7/13

×俺は七咲に適用したのである。

俺は逢に適用したのである。

最後の表現をより簡単にしました。

第六話：小学生卒業

時は流れ、再び春。俺は、輝日南小学校を卒業し中学へと進学した。

輝日南小の卒業の時は、小学校生活もこれでおしまいか、と学校のタコの滑り台に昇って学校を見つめて感慨にふけていたな。学校で塚原響に出会い、スクールで川田知子と七咲逢と出会った。「有害図書委員会」の同志達と橘、梅原の2人にも出会った。もう一度、水泳を楽しむことができた。前世では真面目すぎて出来なかったバカなことと思う存分楽しめた。

そうそう、こんな風に感慨にふけていたら授業を抜け出してきた橘と梅原が俺の傍に走ってきたな。梅原は「ししよ〜！」って叫びながら、橘も「せんぱーい！」って声を掠れさせながら。まさか原作のキャラとこんなに仲良くなれるなんて、数年前の俺が見たらびっくりするだろうな。タコの滑り台に着いた二人は、少し時間を置いて乱れた息を整えていた。整えた後、二人は滑り台上の俺を見上げた。

「師匠！本当にこの学校から卒業しちまうんですか！？」

「遠野先輩がいなくなると、僕たち寂しいです！」

うれしいこと言ってくれるじゃないの！俺だってお前らみたいな面白い奴らと別れたくないさ。校内の隠し場所を探しに一緒に行っ

たり、この水着はどのアイドルが一番似合うのか論争を延々とやって授業をサボったり、一緒に市民プールに行って夏の風物詩・水着のお姉さんを眺めたりとか・・・どれもいい思い出だよ。

「たった一年間だけじゃないか。もう一年すれば同じ学校で会えるじゃないか。何も今生の別れというわけじゃないぞ？」

「ただど・・・」

二人は俺から目を離し、そのまま地面を見つめている。やれやれ、困ったものだな。俺みたいなチート存在にそんなにこだわってどうするよ。全く、お前ら、は。

俺は滑り台から降り、二人の前に立つ。二人はまだ俯いていた。出会った時よりも背が高くなったかな？来年中学に上がってきた時、どれだけ背が伸びているんだろうか。俺は項垂れた二人の肩をぼんと手を置く。二人の顔が上がり、俺の方に向かう。

「梅原、橘。お前らは俺にとって弟のような存在だ。だから俺はお前たちが心配でたまらんし、隠してあるお宝本の存在が公になるのはごめんだ。だから、たまに会いに来てやる。それでいいじゃないか。」

「・・・」

無言。校庭に植えてある桜の花びらが一枚通り抜ける。さらに一枚、二枚と次々と俺達の間を過ぎ去っていく。

「わっかかりやした。師匠、絶対、ぜえったい俺達に会いに来て下さいよ！」

「そうですね！遠野先輩、待ってますからね！」

梅原と橋が俺に軍隊式の完璧な敬礼を行う。同志達と共に、何度も何度もミリタリー映画の敬礼の仕方を見て勉強したからな。特にドイツ軍潜水艦の艦長と連合軍駆逐艦の艦長同士が敬礼しあうシーンは何度も見た。俺も彼らに対して返礼する。「有害図書委員会」の中で決まった合図みたいなものであった。

スクールも残念ながら卒業と同時に辞めることになった。理由は数年前のバブル崩壊による経済の悪化の余波がとうとう俺の家族にも押し寄せたために、スクールの代金を捻出できなくなったからである。スクールは続けさせてくれ、と親に何度も何度も懇願した。授業も真面目に出るようにするし、家の手伝いもアルバイトもするから、と。親父もお袋も決して折れなかった。いや、折れることができなかったのだ。親が留守の間、こっそりと家計簿を見たとき、最近の状況でも相当苦しかったようだ。俺のスクール代や試合へのエントリー代、水着代金などの捻出も親父が残業をすることで何とか出していたようだ。そんな状況を知ったら俺が折れるしかないだろう。ただし、中学・高校では水泳部に所属するからその活動費だけ何とか捻出してくれ、との条件を出し、親父達はそれで納得してくれた。・・・父さん、母さん、ありがとう。

俺はスクールの先生・コーチに辞める旨を伝えた。先生方も残念

そうであつたが、俺が将来「ジュニア・オリンピック」やインハイ（インターハイの略）での活躍していることを楽しみにしていると激励の言葉をくれた。饒別にスクールのビート版とプルブイを貰った。

その日の練習前のプールサイドにて、先生方はスクール生に対して俺が辞めることを伝えられた。スクール生も俺を見て、びつくりし、残念そうな顔を向けられた。面倒見のいいお兄ちゃん、つて言われていたし、それなりに慕われていたと思つていたからな。

知子や響も驚きようは凄かつたな。知子なんか伝えられた瞬間、「え、え、どうということ？」という感じで先生の横にいた俺にズカズカと詰め寄つてきたしな。壁に押し込められて「たつくんいなくなつたら、男子の後輩の練習指導は誰がするのよ!」「春一番の試合も出ないつていうの!?!」「帰り道、一緒にスクールへいけないじゃない!」「あたしとスクールで会えなくても寂しくないのモイいの!?!」とか語気を荒げつつ、俺の腕を掴んで男顔負けの力で俺の身体を揺すつてきたな。壁に頭ガンガンぶつかつて痛かつたぞ、あれ。それに質問の内容。前二つのような状況に関する問いは理解できるが、後二つのような質問は意図が分からんから答えられんかつたぞ。寂しいか、一緒に行けなくなつてもいいのか、と問われたらそりゃあ凄く寂しいし、お前とバカ話しながら行けなくなるのは凄く寂しいさ。ここでお前と俺は出会つたし、スクールの中で一番長く一緒にいたかもしれないからな。それでも最終的には俯いて、俺から手を離してスクール生の集まるころへズカズカ歩いて戻つていった。響も困惑した様子であつたが、俺の家計の事情を伝えたら「そう、拓君が辞めるのは残念だけど、家のことなら仕方ないわね。お疲れ様。」と俺に笑顔を向けてくれた。俺も「分かってくれてありがとう。響もスクールでの成果を期待してるぞ。」と言葉を返した。響は目を瞑つて、「ありがとう。でも、おそらく時間はかかるわね。だつて、おまじないをしてくれる人がいないんだから。」と後ろに手を組みながらつぶやいた。最後の方はもう声が小さくて聞こえなかつた。何だつて?、と聞き返しても、何でもないわ、と

笑顔を見せて俺に背を向けてプールの中に入った。その笑顔はいつもの微笑とは違った。いつもの微笑には、目尻が何かに光を映すようなものが見えたりしないのだから。

一番驚いて困惑していたのは逢だったな。取り乱して、「拓お兄ちゃんがいなかったら、わたし何もできないよっ!」と駄々っ子のようない草で俺の身体に抱きついてきたな。あのとき、腹筋周りにふにつ、という二つの微小な柔らかい感触を感じたな・・・、つて違う違う、俺はロリコンじゃない。外部が、「もうあきらめろよ、お前がロリコンなのは周知のことだぜ?」「著者が先日友人にこの小説読まれてロリコン乙、って言われてたぜ?w」とか言ってるような気がするが全然気にしない。何を言っても逢は「やだやだ、辞めちゃイヤ!」と首を大きく横に振るだけだった。逢の少し長くなった、原作の七咲逢に近い髪が首を振るたびに当たり、くすぐったさを俺にもたらした。

「逢。」

「やだやだ、私許さない!辞めたら、わたしお兄ちゃんのこと嫌いになる!」

これ何てエロゲ?という変な考えが浮かんだけど、直ぐに思考を元に戻す。嫌われるのはイヤだなあ、とか思いながら次の言葉を紡ぐことにした。

「いいから、聞きなさい。」

「ヤダ!」

「逢!」

「っ!」

俺は聞き分けのない子どもに対して叱るように、語気を強めて逢に言った。俺は基本怒らない人間で、このように語気を強めた俺の顔はスクールでは始めて見せた顔だったかもしれない。逢は語気を強くした俺を見て、びくつと身体が跳ねた。それから徐々に大人しくなる。それでも抱きつくために使った腕を戻そうとはしなかった。

「逢、郁夫君も生まれて君はもうお姉ちゃんだろ？だったら、そろそろ俺を卒業して立派なお姉ちゃんができるようにしないといけないよ。いつまでも俺に頼ったり甘えてばかりしていたら、郁夫君が大きくなった時にお姉ちゃん甘えてばかり、って言われるようになってっちゃうよ？それに、来年から逢も新しく入ってくる子を助けてあげなくちゃいけない。今の逢を見ていると、俺はちゃんとお姉ちゃんを出来るかどうか、どうしても心配なんだよ。頼むよ、分かってくれ、逢。」

「……うん、分かった。」

しぶしぶ、と言った感じであったが、逢は俺から腕を離した。俺は、分かってくれたことにほっとした。

「……ごめんなさい。わたしのこと、嫌いになったでしょ？」

「全然。応援には行くつもりだから、一生懸命な逢の姿を見せてくれよな。」

「うん！……じゃあ、わたし頑張るから、しっかりお姉さんできるように頑張るから……その、頑張れるように、おまじないをして欲しいの。」

・・・おまじない、って昨年の夏の、アレか？・・・なんかあのレ
ースの後の記録会とかでも「してちょうだい」とねだられる様にな
ったんだが・・・。今は人の目があるしなあ・・・。逢は、・・・
駄目だなあ、そんな頬を赤らめて上目遣いされたら断れないじゃな
いか。お前は将来、世の男性を虜にする才能があるよ。

「分かった。おでこ出して。」

「うん！」

逢の白いおでこに俺はそつと口を触れた。周囲からの好奇の視線と
後輩の女の子達の黄色い声、野郎共のひゅーひゅーと囁す声が痛い。
しかし、これがスクールで出来る最後のことなら構わないかな？と
俺はそんな視線を無視して、できる限り長くデコチューを続けた。

中学の入学式が済んで一週間経過した今、俺は学生服に身を纏って学生鞆を持って自宅を出た。外には、セーラー服を着た響と知子が自転車を止めて待っていた。入学式の後でも思うが、セーラー服を着た女の子って雰囲気変わるよな。二人とも大分大人になったようだぞ。

中学が上がってから、俺の家に彼女らはチャイムをならしにやってくるようになった。今日も同様である。いつものように親父達は青春だよなあ、両手に花よね、と我が子の様子をニヤニヤしながら抜かしやがる。何を返しても、若い若い、と笑いながら更に返されてしまうので最近「それがどうした！」と一言発して家を出るようになった。外に出てから、二人とも何で朝こうやってチャイムを鳴らしにくるんだ、と聞き返した。知子は「朝寝坊が得意のたつくんをあたしが面倒見なくてどうするのよ」という自分の細い腰に手を当ててドヤッと返し、響はいつものように微笑を浮かべて「あら、私達とは一緒に登校したくないのかしら」と仰る。一緒に行くこと自体に文句も何も無いので、「はいはい、感謝してますよ〜」と右手をひらひらさせて、俺は自分の自転車を取りに行く。後ろで、「ちよつと！もっと感謝しなさいよぉ〜！」という知子の声が聞こえるがスルーだスルー。

自転車に乗り、三人仲良く中学まで登校だ。小学校までは徒歩でいける距離であったが、中学だとそうも行かず自転車を使うようになった。しかし自転車での登校は、それぞれ距離が離れていた三人の

家の移動を楽にしてくれるようになったので、こういう両手に花での登校が実現するようになったのである。

入学してから一週間、今日は入部届けを提出するときだ。既に三人とも水泳部に出すことで一致していたので特に問題も無かった。俺なんか、入学式当日に練習用具を持ってプールに行っただけで練習させてくれ、って言うって練習に混ぜてもらったくらいだし。スクール辞めたい泳ぎたくて仕方がなかったんだよ！いやあ、やっぱり水の中はいいよなあ……。先輩方もいい人ばかりだったし、中学もまた面白くなりそうだ！

「いや、あたしらもさっきの自転車の三人組みたいにあんな青春送りたいね、なあ愛歌」

「右に同じ」

(次回へ続く)

第六話：小学生卒業（後書き）

ご一読ありがとうございました。

おかげさまで、実生活のピークを越えることが出来ました。一生懸命、書いていこうと思っっています。

よろしく願います。

第七話：女難な新生活

道の桜が散り始めて、葉桜になりかけていく。

既に新入生を迎える桜の花びらはその役目を終え、次の季節に向けてその枝に葉を生やそうとしていた。桜の木の下には、まだ背丈に合わない大き目の学生服を着た男子生徒たちやあどけなさの残った女子生徒たちを歩いていった。

俺も乗ってきた自転車を置き場に止めて、置き場に近い桜の木を眺める。桜、枯れちまったなあ、もの悲しいな。そんなことを思いながらポケットに手を入れてポーっとしていると、前、本当に直ぐ前から声がした。

「たつくん、何ポーっとしてるの？」

「うおっ！」

知子である。上目遣いで不思議そうな顔をして俺の顔を覗いている。てか、顔が近い。そんなに近づいて身体を傾けたら、その・・・やんごとなき二つの双丘と谷が見えてしまうわけでだな。いかんいかん、俺は紳士なんだ。

「知子、拓君、二人ともそろそろチャイムがなるわよ。早く行きましよう。」

「え、ああ、そうだな。」

「ええ」

先にいた響が俺達に声を掛ける。腕に着けた時計の針は、8時30分を指す。早めに歩いていけば、朝のホームルームには間に合うだろう。時間ギリギリに学校に行つて、デスレースを楽しむのも面白いんだけどな。さてさて、教室に行きましようか。

俺は二人とは別のクラスになった。クラス発表の時、それは分かった。一緒に行こうと誘ってきた知子は何かを確認するかのよう、何度も何度も下駄箱近くの掲示板に張られたクラス表を見ていた。知子と一緒にいた響も「残念ね。」とぼつりと一言。クラス分けつて、なかなか思い通りにうまくはいかないんだよな。一緒になりた友人とは一緒になれないし、めんどくさいやつと一緒にされることもあるし、人間の一年を一喜一憂させる良い材料だよな、これ。

そのときに気がついたんだよな。俺と同じクラスに、夕月瑠璃子に飛羽愛歌という名前があったこと。これって、アマガミの方の茶道部2人・・・だよな？キミキスにも同姓同名で顔を瓜二つの親戚がいるとかいないとかで有名な・・・。二人とも同じ中学だったのか、と思つたよ。いやはや、本当にクラス分けは本当にいるんな意味で期待を裏切ってくれるよ。

知子と響とは廊下で別れ、俺は教室に入る。何人か、俺に気づき挨拶をし、俺も軽く挨拶を返す。自分の机に荷物を置いて、伸びをしておく。周囲を見渡すと、まだ新しい環境でお互いのことを探り探り会話しているような状態だった。趣味は？テレビ見た？とかお見合いかって突っ込みたくなつたな。みんな声のテンションが高く、中学に入ったという興奮が冷めていないようであった。授業が始まってからも、教室はしんとなり、授業が終わるとテンションが上がる。先生や授業、まるで新しい体験をしているんだ、というか未知を楽しんでいるんだな、という感じを受けた。

先日、俺はある水泳部の部室に言つて入部届けを書いて提出した。これで来週から水泳部として公式に練習に行けるし試合に出ることが出来る。そう思うとワクワクが止まらないな、俺も未知を楽しんでいる口か。あの先輩達と楽しくこの3年間を過ごしてやるぜ！心の中で決心を固めた俺は、教室に掛けてある時計の針を読む。8時44分、おつとそろそろ先生がくるな。

始業のベルがなり、教室の中が慌しくなり、各々が席に着く。壮年に入ったくらいの俺達のクラスの担任が教室に入り、点呼を取る。

そのあと朝のホームルームが始まり、業務連絡のようなことが行われた。

……

今日の授業も終わった。3限目の数学では、マイナスの掛け算や足し算について先生が教えていたが、マイナスとマイナスを掛けると何故プラスになるのか分からない人間が続出した。何故マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるんですか、という質問は当然出たが、先生はそういうものです、と濁して答えた。そんな先生に代わって俺が先生の代わりに、「 $1 \times 1 = 1$ です。 $2 - 1$ も1です。つまり $(2 - 1) \times (2 - 1)$ は 1×1 と同じ式になりますから答えは1です。そこで、分配法則とこの本に書いてある因数分解を用いて、 $2 \times 2 + (-1) \times 2 + 2 \times (-1) \times (-1) = 1$ となります。そこで、 $2 \times (-1) = -2$ になるから……」と説明していくと、先生は口をポカーンと空け、生徒達からはおおっ、と歓声を得ることになった。先生に目をつけられたかな、なんか凄い剣幕で俺を見てきたし。立場潰しちゃったのは拙かった……。

帰りのホームルームが終わったあと、いつものように響や知子が来るのを待つため、教室で本でも読もうと机の中の本を取り出そうとした。その時、前にセーラー服を着た二人の女生徒の気配に気が

ついた。知子と響か？と、そう思つて見上げたら全く違う二人がそこにいた。赤みを帯びた髪と丸いメガネをしており、美人の部類には入るが目元がキツイ印象を受ける生徒と、ロングの黒髪に、こちらにも美人ではあるがどこかミステリアスな雰囲気醸し出して近づきにくい生徒。名札には、「夕月瑠璃子」「飛羽愛歌」と書いてあり、「ああ……るっこ先輩にまなか先輩か」、と端的に感想をぼそつと漏らし、再び本を読もうとしていた。

「おいおい、ちょいと待ちなよ。私達、アンタに話があるんだよ！」

「ご指名入りまーす」

「……なんだ？用なら手短に頼むよ」

俺は、机の上に置いて放置された本「ガロア理論」を開いて読み始めた。証明もしないといけないから集中させてくれよ。飛羽と夕月の二人は、俺のそんな様子を見て顔を合わせていた。が、原作通りの強引さを持って、証明を綴っていた俺の手を掴んで止める。

「まあまあまあ、待ちなつて。悪いようにはしないからさ！」

「アフターサービス、同伴も可」

同伴つて言葉をどこで覚えたんだよ！それと、女の子はまだそんな言葉を簡単に言っちゃいけません！、とは突っ込みたくなった。しかし間髪入れず、夕月はさらなる強引さを持って俺の腕を凄力で掴んだ。俺はぎょつとして夕月の顔を見た。丸メガネが光で反射し、目元は確認できないが、口元は不敵な笑みを浮かべていた。夕月の顔は、まるで捕まえた獲物を逃がしてたまるか、と語っている

かのようなだった。横の飛羽も悪の女魔法使いのように見えた。りんごが手元にあつたら魔法が注射で毒リングでも作っていそいだ。

「さつて、ちょっとここじゃ何だし、ちょっとくら屋上まで行くよ！」
「見晴らしも、最高」

飛羽と夕月は俺の両脇を掴み、俺は抵抗することも出来ず、連行される宇宙人見たく引つ張られて教室を出ることとなった。そのまま二人に腕を掴まれながら、俺は屋上に連行された。途中廊下で知子のような女生徒が俺の姿を見て鞆を落とす姿を目撃した。そのまま、階段へ連れていかれ、鞆を落とした呆然とした女生徒の姿は見えなくなった。

「さて、単刀直入に言おう。遠野、茶道部に入れ」
「我が茶道部はお前を歓迎するだろう」

校舎の屋上には俺達以外誰もいなかった。少し日が傾き始めて、落下防止用のフェンス越しに上級生のサッカー部や野球部の部員達が一斉懸命声を出している。視線を俺の前にいる二人の女生徒に戻す。

あれ？こいつらって、この時期から茶道部だったのか？あと何で俺を茶道部に勧誘しているんだ？お前らも一年だし、それになんて俺なんだ？訳が分からないよ。

突っ込みどころと疑問が多すぎて口が開けない俺を尻目に、夕月が胸の前で腕を組みながら説明を行う。腕を組んだ際にそのやんごとなき二つのまんまにくまんが浮き上がるのが分かった。・・・ほほう夕月め、結構いいものを持っているな。年齢だからかまだまだ小さいけど、形がいいじゃないか。お主もやるのう。

もうロリコンでもいいや、と外野の声に対して全面降伏をしたくなる心境だった。そんな俺の顔なのかしぐさなのか心なのか分からないが、飛羽が俺と夕月の間に割り込む。

「えっちなことは駄目。別料金」

「あ、アンタは私の身体を見て何を考えてたんだい？お金なんて払ってもそれは許さないよ！」

顔を赤らめて、胸の前で組んだ腕をぱつと離す。あああ……せ
つかく形のいい双丘があ……。

恐らく残念そうな顔をしてる俺の顔を、間に入った飛羽はじつと
見る。何だ、何をしているんだ？俺も、真意を掴むべく目を見つめ
返す。見つめる、見つめ返す。見つめる、見つめ返す。以下略……
。なんだ？こいつは俺の何を把握しようとしているんだ？俺は、あ
らゆる可能性を考え始める。いろいろな可能性を考えながら飛羽の
目を見る。するとこいつは頬が赤くなって……（いるのか？）

「私に惚れたな」

「お前は一体何を言っているんだ」

「私への熱い眼差しが何よりの証拠」

「お前という疑惑の種に対する、な」

「私を捨てるのね」

「捨った覚えはないぞ」

「……」「……」「……」「……」

微笑を浮かべたままの飛羽のボケた発言に、俺はツッコミを入れ
る。コイツの場合は、真面目に答えるよりも適当にツッコミと毒を
入れて返した方が良さそうだ。

「あつはつはつは！いいねいいね、アンタ。思ったとおりの面白い
奴だよ！」

「私達の目に、狂いはなかった」

隣で俺と飛羽のやりとりを見ていた夕月が、途端に笑い出して俺

の肩をバンバン力強く叩いてきた。結構な力が入っているせいか、叩かれた部分はそこそこ痛い。飛羽も何か自分の中で納得しているかのように、うんうんと首を動かしていた。

「で、夕月さんと飛羽さんは俺に何のようなの？」

「おおっと、話が逸れてしまったね。じゃあ、本題に入るよ」

「ここ、重要」

夕月はコホン、と咳払いをして真面目な顔になった。

「あたし達は茶道部に来年から入学予定なんだけど、先輩方から聞くにどうも男子の入部希望者がいないらしいんだ。部内は女子部員ばかりで、力仕事は大変。そこで、あんたみたいに運動でも実績を挙げた面白い奴が入ってくれば今年は一人でも十分だろ？だからアンタをこうして勧誘してきたわけ。」

「一人で数人お得」

つまりは、俺を今年の男子の新人部員として力仕事全般をやらせる魂胆か。女子生徒の花園という背景は興味深いものがあるが、やはり俺は水泳部に入りたいし試合にも参加していきたい。

「悪いが、お断りする。俺は今までやってきた水泳が好きだし、これから先の人生も水泳をやっていききたい。だから水泳部に入るため、茶道部に入部することは出来ない」

と、俺は正直に自分の考えを二人に伝える。しかし、二人はそんな答えは読んでいたさとはかりに自信満々であった。

「別に水泳部に入るな、とは言つてないさ。掛け持ち、という選択があるじゃないか！」

「へ？部活の掛け持ち？そんな制度あるのか？」

「校内の規則の部活動の重複を認める記述はないよ。確かにアンタは水泳をやっている方が向いてそうだし、こっちの茶道部を優先して頑張るなんてことは認めないはずだとは思つたよ。だからさ、時々でいいからさ、うちの部を盛り上げたり手伝ってくれたりしてくれよ」

「かよわい女の子に、救いの手を」

掛け持ち、か。でも掛け持ちということは集中することが二つになつて、気の入れ方が中途半端を意味することになるし、それは両方の部活に悪いと思うんだ。だからこの場できつちりと断ろう。

「それでも、茶道も「ちなみに水泳部と掛け持ちしている先輩もいるからな。あつちがメインで、こっちは冬と春先だけ手伝ってくれているそうだ」……」

「水泳部のプール、冬は使えない」

……確かにこの学校は屋外プールで温水を作り出す装置なんて無かつたな。温水を作り出したり、維持するのは相当の金が必要だし公立中学じゃあ無理があるな、と感じたよ。練習でプールにいった

のは、それなりに離れた場所のプールを時間を決めて貸し切りにしてもらって泳げた訳だし。そこを見落としていた。何だろ、一気に形勢が畳み掛けられていく気がする。逃げる手は、中途半端は嫌だ、との一点張りで通すしか……

「悪いが、中途半p」水泳部は冬場は朝練しかなくなるから時間的には余裕もある。もしアンタがそれで中途半端になるのであれば、気持ちを切り替えられない証拠だよ。」

夕月がまた一步俺に近づき、俺は一步後退する。ガシャン、俺の後ろに緑のフェンス。横から逃げようにも飛羽の奴が先回りして逃走ルートを塞がれる。弁論としても置かれている状況としても、分がさらに悪くなる。夕月め、原作でも強引さや引つ張る力があるな、とプレイ時に思ったが、それ以上に弁論術の心得があるぞ。気を抜いたら、首を縦に振らされそうだ。おまけに飛羽も、まるで読心術でも使えるのではないのかと思わせるような動きで俺を抑えにきている。

「なあ遠野、本当に頼むよ。この入部届けにサインするだけでいいからさ」

夕月が更に接近してくる。俺と夕月の間は5cmあるかないか、端から見ればイケナイ逢引をしているみたいだ。おい、もう少しで身体が触れ……おい、身体が触れてるぞ。やんごとなきその二つのモノを押し付けなくてくれ、俺のマイサンが元気になっちまうじゃねえか。これは、色仕掛けて奴だよな。駄目だ、俺はこういうの

には弱いんだ。前世と今世を振り返ってもう分かったわ。顔が血が上って、頭の中がぐちゃぐちゃになったようだ。いかん、何も考えられない…

「ほれほれ、男は度胸だよ！スパツと決めちまいな！」

「ええじゃないか、ええじゃないか」

飛羽と夕月の押しのある声に身体の温かさと柔らかさ。俺の頭は次第に考えるのを止めはじめ、渡されたボールペンを受け取ってその用紙に学年、クラス、それに名前を……

「たっくん、駄目!!」

凄い勢いで室内とこの屋上を隔てる扉が開けられる音がした。俺と夕月・飛羽ペアは、音のした方向を見る。そこには、必死の形相で肩で息をしている知子がいた。さらに後ろに、同じく呼吸を抑えるのに必死な響がいた。日光が当たって二人の汗が凄いことを知る。どうやら俺が連れて行かれたってことで必死に探し回ったらしい。

知子は俺達に向かって走り出し、俺から二人を引き離して自分の下に引き寄せる。まるで、幼児が買ってきてもらった大型のクマのぬいぐるみを取られまい、とせずと抱きしめている感じだった。

俺はお前の物じゃないぞ知子、と言いたくなつたが、状況が状況だけに口を塞ぐことにした。後ろを見ると、響もゆつくりと俺に近づいてくるのが見えた。ただし、いつもの微笑は無く、少し怒っているみたいだった。その怒りの対象物が俺なのか、はたまたこのペアなのかは分からないが。そう考えているうちに、知子が口を開く。

「たつくんは渡さないわよ！」

「…なるほどね。んふふ、なんだい遠野、アンタ彼女がいたのかい。いつも教室でボケーツとしてる割になかなかやるじゃないか」

「リア充おつー」

夕月、飛羽の好奇の視線が俺に注がれる。それと飛羽よ、さつきから何処でその言葉を拾ってくるんだ？お前の頭にはどこぞの世界の自分とインターネットで繋がっているのか？確かキミキスにもこいつら出てたし、…俺と同じ転生者？いやあ、それにしても振り舞い方が年相応だし、勉強で抜きん出たことをしているのを見たことないし。

考える俺を他所に、ポフッと直ぐ横で音が聞こえたような気がする。知子から聞こえてきたような…、心なしか湯気が頭から見える。

「あ、あたしはたつくんのか、か、かの、彼女なんかじゃ……」

「へえ、そうかい。じゃあ、後ろのあのクールビューティがあんたの彼女ってことか。うらやましい限りですなあ」

「両手に花。爆発しろ」

知子の身体がピクツと少し動いた。そして知子の俺を抱きしめる力がより一層強くなったような気がした。小学生の時よりも女らしさを備えた身体が、俺の思考を変な方向に向かわせる。知子もそういえば女の子になっていつてるんだよなあ、何か月日というものを感ずるよ、と。いかんいかん、そうじゃないそうじゃない。俺は落ち着きを払うために後ろにいた響を見た。響は先ほどの少し怒った顔ではなく、少し呆けていた。そして俺の視線に気がついて、いつもの顔に（少なくとも俺にはそう見えた）

「残念だけど、私も拓君と付き合っている訳じゃないわ」

「ふ〜ん、『残念』……ね？ま、結論として遠野がますます面白い奴だと分かったよ。という訳で、この入部届けは提出しておくからな」

「三年間お付き合いよろしく」

夕月は俺に書かせた（どうやらあの時最後まで書いてしまったようだ）入部届けをヒラヒラさせてその場を離れ、飛羽も右手の親指をグツと立ててその場を離れた。目的を達成した今、邪魔が入らないうちに入部を確定的にせんと思ったのだろう。凄い行動力である、あれで一月前まで小学生だったのだから末恐ろしい。本当に転生者だったのかも……。

ふと知子の方を見る。知子がまだ頬が赤い状態のまま、ジト目で俺を見る。

「たつくん、入部届けって何？三年間お付き合い、ってどういうこと？水泳部は？あの二人との関係は？どちらかと付き合ってるの？」

「拓君、正直に答えて。お願い」

今度はフェンスをバックに、知子と響のペアに迫られることとなった。恐い、めっちゃめっちゃ恐い。知子さん、その抱きしめ方はもう格闘技のレベルです、腕の骨が折れそうです、通勤ラッシュユヤ帰宅ラッシュユの電車の山手線と同じくらいキツイです。それに響さん、顔は微笑んでますけどそのバックのオーラを何とかして頂けませんか？直視できません。

こうなると転生したとか、俺は精神的に大人だとか、社会経験をしているなどのバックグラウンドが全然通用しない。俺という男は女の子に弱かったのだ、ということを知り知る。

「たつくん！！」

「拓君」

「い、ごめん。知子さん、響さん、許して下さいー！」

「駄目」と一言、地獄の追究が始まった。結局、この日俺に起きた出来事は、水泳部をメインに、メインの合間に時間があれば有茶道部の準部員をやるということが確定したこと、夕月・飛羽のペアには勝てないこと、知子・響ペアを怒らせると恐いということをもつて知ったことである。後日、このことが響の伝でスクールの逢に伝わったため、偶然道であった際に「拓お兄ちゃんの変態！」と罵られました。

この後、水泳部にも顔を出し、茶道部の準レギュラーになったことを顧問と主将に伝えた。主将が言うには、「春夏のシーズン以外でスイム練が無ければ、他の奴もどこかの部に行ってトレーニングとかいろいろな活動をしたり手伝ったりしている。逆に、こっちの人手が足りなかったら向こうの部員に手伝いに来てもらったり、トライアスロン部やマラソン部などと練習を一緒にやったりしている。だから気にするな。」、とのことである。顧問もいい顔はしなかったが、人生経験の一貫として一生懸命励んで自分の満足する成果を出せるよう努めればいい、ということでした。

金曜日が終わり、来週から水泳部員として正式に活動できるようになる。茶道部との兼ね合いなど不明瞭な点があるが、練習は絶対毎日出よう。頑張れ、俺。

あと、いま横で俺をジト目で見ている知子と響を絶対怒らせないように心がけよう。

夕月・飛羽のペアにも気をつけないとな。

やれやれだ。

(次回へ続く)

第七話：女難な新生活（後書き）

ご一読ありがとうございます。

今後、いろんな方向に話を広めていくための話です。水泳をメインにやる、という話だけでも作れるのですが、せっかくだし原作キャラと色々なデアイイイベントを広げていこうと思いい、書いてみました。

勿論水泳を中心にやるというコンセプトを崩す気はありません。

どうなるか分からない中学生活、どうぞ末永くお付き合いください。
では！

2011/7/17 さつそくの誤字修正。何回読み直してもスル
ーしちゃうな・・・

本当に読みにくい文章でごめんなさい。

×俺のノートに証明を綴っていたペンの動きを止める
証明を綴っていた俺の手を掴んで止める

×・・・ ∴三点リーダを使用

第八話：オリエンテーションキャンプ（1）

「おお、あれが富士山か。私、あれ初めて見るんだよね」

「フジヤマゲイシャ、絶景かな絶景かな」

「おい遠野、アンタも目を瞑ってないで外の風景を眺めてみるって
！」

「頼むから少し寝かせてくれ……」

バスに揺られて車に酔っている俺は、小さく弱った不満の声を
出す。ちょうど俺の後ろの席に乗っていた夕月や飛羽が興奮した様子
で俺にちゃちゃを入れてくる。肩を揺らされて、俺の調子は更に悪
くなっていく。胸や喉が詰まっているようで、頭がグチャグチャに
なって気力や思考力を奪っていく。

（富士山は社員旅行の静岡旅行で見たし昇ったし珍しくもない。そ
んなことより気分が最悪だよ）

と、俺は弱った思考力で考えながら身体を揺すられていた。俺は横

を見ると、隣に座っている男子生徒が俺に気の毒そうな顔をしているのが見えた。気の毒に思っなら変わってやるつか、と言いたくなる。

「いやあ、旅行って楽しいね！」

「心が洗われる」

楽しくない！心は逆にすさんでいくじゃないか！、と俺は心の中で叫んだ。次のサーブスエリアで休憩を取ることをバスガイドが連絡する。俺はサーブスエリアまでの次第に酷くなる吐き気との熾烈なデスレースを繰り返すこととなった。

中学生生活が始まり、水泳部に入部して練習が始まり、茶道部にたまに顔を出すようになった。練習は軽いと思いきや、経験者の俺や知子、響はレギュラーの先輩方と同じものに参加することになり、思っていた以上に強度の高かった。決められたタイムやサイクルを回るのが着いていくのがやっとである。特に陸上トレーニングはなかなか強度が高かった。一日目でまさかの筋肉痛を起こしてしまっただくらいである。それでも、中学生の若さは凄まじいものがあり、すんなり適応できてしまった。若い、って良いよな……。

短い髪に筋肉質、少々恐い印象を与える鋭い目つきが特徴的な男子主将は、「練習時間や場所は限られている。ならば集中して密度

の濃い内容を行わないといけなからな。」と俺達に諭すような口調で言い、手を腰に当ててカッカカと豪快に笑った。この主将はとても面倒見が良く、若いのに自分の哲学がしっかりしていた。俺はその姿を見て、中学生でこのしっかりした様子に本当に感心した。いまは自分の方が若いくせに、という突っ込みはしないように。

茶道部へは、半ば強制的ではあるが入部を決めたのは自分だから、ということでも無理しない範囲でなるべく顔を出すようにしていた。例えば昼食を済ませた後や、水泳部の練習の無い日は軽く陸上トレニングを自主的にやった後などである。男子主将や他の部員達からも、女に囲まれてうらやましいぞこの野郎！、誰か好きな奴がいたからなんでしょ？、などからかわれ揉みくちやにされている。ところどころ、2つの方向から刺すような視線が飛び込んでくる気はよくするがな。

茶道部には、女子部員ばかりでどきまぎした。時間を見つけて茶道部の部室に足を運ぶと3年生のセミロングな髪をした女子生徒が座布団の上に正座していたのが見えた。「失礼します、1年生の遠野拓と申します。夕月さんと飛羽さんから話は伝わっているかもしれませんがこの度茶道部への入部を希望しましたので挨拶に参りました」と、入り口で伝えると、その3年生は腰を上げて部屋に上がるように言った。彼女は、3年生の山口亜弓先輩と名乗り、この茶道部の部長であることを述べた。山口先輩の顔と名前、それに年齢から、原作の梨穂子や夕月・飛羽ペアら輝日東高校の茶道部OGであることがその場で分かった。そして、彼女が夕月・飛羽の二人に面白い男子生徒のクラスメイトを連れて来いと指示を出したことを教えてくれた。その指示の出し方は、穏やかな顔には似つかわしくない「おしとやかではなかった方法」を取ったことを、右手を口に当てて恥ずかしそうに話してくれた。……原作の知識から、彼女は夕月・飛羽にとって全く頭の上がない先輩だったはずだ、きつとこの人も何かあるんだろうな、と警戒しながら俺は山口先輩に注がれたお茶を頂いた。そのお茶は渋みも暖かさも俺にとってベストで、

気がつかない間に美味しいと感想を漏らした。俺は、先輩を見た。先輩は、俺を見てニコニコしていた。

それらのことがあって、今は5月のゴールデンウィークを過ぎた時期。初めての学校行事として、1年生全体のオリエンテーション合宿が企画されていた。そのため、皆で遠くに三泊四日することになり、いまこうしてバスに乗って宿泊施設まで移動している訳である。前世の俺は車に酔うという経験とは無縁であったが、遠野拓としての俺はあまり乗り物に強くなかった。それでこの体たらくであり、揺れるバスには金輪際乗りたくない、と思った。サービスエリアに着き、お手洗い付近のベンチに座り込む。別のバスに乗っていた知子や響が座り込んだ俺に近寄ってくる。

「たつくん、顔色が悪いけど大丈夫？」

「自動販売機で何か飲み物買ってこようか？」

「……大丈夫ではないかな。なるべく味が濃くない飲み物を頼むよ……」

響は近くの自動販売機を見つけて俺の要望に見合った飲み物を探し始めた。知子は俺の横に腰を下ろして心配した顔をして俺を見ている。お手洗いを済ませた同窓生や同級生らは俺達の関係について酒の肴にしているのが見えたが、正直なところ、どうでもいいと思っていたので無視することにした。響が俺がよく買うスポーツドリンクを片手に少し早足で戻ってくる。俺は、響からタブの開けられたドリンクをゆっくり飲んだ。ドリンクの冷たさとのどごしで気分

が少し良くなった。

「助かったよ、ありがとな。知子、響。」

と俺は例を述べ、椅子から腰を上げた。そんな俺を見て、二人はほっとした様子をしていた。知子は、「たつくんは乗り物に弱いんだから酔い止めをしつかり持っていないと」と左の手を腰に、右の人差し指を俺の鼻先に置いて説教をしていた。響は、「飲み物はしつかり買っておくのよ」とお母さんみたいなことを言う。時計を見て出発時刻が近くなると、俺達はそれぞれ自分のクラスに割り当てられたバスに乗車した。

「おゝ遠野、やっと戻ってきたか！いま大富豪やっていたんだけど、お前もやらないか？」

「途中参加も歓迎」

体調不良を理由に俺は再び席に座って、再び来るであろう吐き気との戦いに心を集中していた。先生が全員いるかどうかを確認し、バスが発車する。その後、トランプやウノで勝っただけの負けただのという、どんちゃん騒ぎでやかましい後ろの席の声を頭の後ろで聞きながら俺は吐き気との戦いを再開することになった。

戦いは終わった、俺の勝利である。昼過ぎにコンクリート製の施設に到着し、俺は押し寄せる吐き気を抑えきつたのだ。バスから降りて集合と先生の長々とした注意事項の説明、施設の管理者の挨拶を聞くという体力消耗地獄が待っていた。会話の内容は一切覚えていない。地獄を終えると俺はフラフラした足取りで施設に入り、長廊下を歩いて自分が割り当てられた部屋に入る。入り口のすぐそばのベッドを見つけてさっさとメイキングして泥のように眠ることになった。押し寄せた吐き気に耐え切るために要した体力が半端なものではなかったのだ、身体が休ませてくれとコールを出した結果である。同じ部屋のクラスメイトは俺を起こそうとしたものの一切起きなかったそうだ。彼らの置き土産である顔の落書きが俺の深い睡眠を物語っていた。水性だったから良かったが落とすのが面倒くさいぞ。

顔を洗っても意識はぼんやりしたままの俺は部屋の外に出る。渡り廊下にどうやら誰もいないようであった。少し廊下を歩くと、掃除していた施設の職員が見えたので他の生徒は何をしているか、と尋ねた。どうやら、少し遅めの食事を取っているそうである。

(……そういえば気分は良くなったし、良く寝たから身体も調子が良くなったけどお腹すいたよなあ……でもみんながご飯食べている時に入るのは気が引けるし、もう一眠りするか)

ボサボサの頭を掻いてそのまま回れ右、そのまま元来た道に戻るため歩を進める。

「たつくん、やっと起きたの？」

「その様子だと良く眠れたみたいね」

三歩くらい足を動かすと何年も一緒にいて聞きなれた声が聞こえた。ぼーっとした顔をしたまま、よく聞く二つの声の方向へ振り向く。言わずもがな、知子と響である。二人とも女子用の少々濃い赤色のジャージを着ていた。寝ぼけ眼で二人の問いに対して縦に首を倒す。

「まだ寝足りないの？髪もボサボサだし、目元もシャキッとしてないし、まったくもう」

「顔だけでも洗いにいきましょう」

そのまま、知子に右の腕を絡められて施設内にある水飲み場まで連行される。更に女性らしくなった身体と柔らかさに気がつくものの反応するほど意識が覚醒した訳ではなかった。響も所々で躓いて扱けそうになる俺を支えるように俺の腰に左手を回し連行する。水飲み場に着き、俺は蛇口から出てくる水を手の中に集め顔に浴びせた。冷たいが気持ちいい、眠気が飛んでいくのがわかるわ。俺は蛇口のバルブを閉めて周りを見渡すと、響がハンカチを差し出した。俺はありがとうと礼をいい、顔についた水気をハンカチで拭き取る。顔を吹いた後、洗って返すよと言ったものの別に気にしてないわ、と返されハンカチをそのまま返した。響は俺が返したハンカチを一瞬じっと見ていたような気がした。俺の顔：水性ペンかまさか垢とかで汚れていたのかな……。知子の方を見ると、ジャージの右のポケットに手を入れて止まっていた状態だったが、俺の視線に気がつく。と頬を赤くして慌ててポケットから手を出した。

知子や響と分かれた後、意を決して俺は食堂に入り、自分の担任の姿を見つけて「寝ていて遅れました、すみません」と謝罪の言葉を伝えた。担任も少しだけ説教をしたが俺の乗り物酔いのことをクラスの誰かから聞かされていたため、追及や叱責はすることなく無理をするな、とだけ言ってあっさり解放された。誰か知らんがクラスメイトよ、ありがとう、と心に想いクラスメイトの方を見回す。数人、親指を立てて合図をする。同じ部屋に割り当てられた奴らだ。すまん、ありがとう。しかし水性ペンでの落書きは別だ。いつか返り討ちにしてやる。

俺は空いている席に座って、自分の食事を取り始めた。周囲の奴らと世間話やら次の行事はおもしろいのか、女子の部屋に侵入するか否かという話題でそれなりに盛り上がった。食事の後は近くの山に入ってハイキングコースでポイント集めをしようということだ。俺は夕月・飛羽のペアにまた振り回されるのかという考えを振り払うべく、茶碗に盛られた白米を一気にかっ込んだ。

(次回へ続く)

第八話：オリエンテーションキャンプ（1）（後書き）

ご一読ありがとうございました。

友人と電話で相談しながら構想を考えたところ、色々アイデアが出たので、話を数話に分割します。少々オリエンテーションの話が続きますがご了承よろしくお願いします。

では！

第九話：オリエンテーションキャンプ（2）

「ん、楽チンだねえ」
「……」

俺の背中で上機嫌に笑って地図を見渡す女王様がそう仰る。そんな俺は女王を背負って目的地までお連れする従者。そして辺りは、青々とした木々に囲まれた平坦な山道に俺達4名。

「チエックポイントまであと少しだからね！そこまで頑張れよ！」
「分かった。けどお前、少しおm……」
「重いとか行ったら首締め上げるよ！」

夕月のメガネが光って表情が読めなくなる。その光と口元に浮かぶ不敵な笑みが俺の精神を圧倒し、俺は言わなかったことにするため、閉口する。

（これが梨穂子にあって夕月がない「おしとやかさ」って奴か、なるほど男が逃げていく訳だ。高校生までにはその性格におしとやかとか、いじらしさという機能を実装しておけよ。納期を過ぎると、高校生活でも男に逃げられるぞ）

「いま、物凄い失礼なことを考えてた」

「遠野、今考えていたことを一字一句私に言っごらん？」

「ハイ、私八従順ナ瑠璃子様ノ僕ニ御座イマス！ハイ、瑠璃子様！
イエス、マイロード」

飛羽に心を読まれ、夕月に内容の説明を求められた俺はマンガやアニメで知っている知識の中で絶対的な忠誠を表す言葉をひたすら繰り返した。飛羽や夕月の疑念は薄れたのか、再び先ほどの状態に戻る。

横を見ると申し訳なさそうな顔をした同じ班の男子（中島くん）が歩いていた。

（申し訳ないと思っっているなら変わってやろうか？感触は確かに役得かもしれないが、重さと足腰に半端無く負担がかかるぞ）

何でこんなことになったんだ…。

発端は、夕月の提案だった。

チエツクポイントも後わずかで全て回ってしまつてこの先つまらないから、暇潰しにゲームをしようじゃないか、と。

通り道の階段でジャンケンをして、グコ、チヨコレイト、パイナッブルで進むあのゲームをやつて、誰が一番先に階段を登ることができかを競うことにした。勝者一名は敗者一名に次のチエツクポイントまで罰ゲームを行うという条件がついてな。めんどくさいし、何かあると疑いパスと俺は言ったんだが、多数派により少数派の俺の意見は民主的に却下された。班のもう一人の男子（中島君）は、押しに対して弱い子で夕月と飛羽の圧迫に勝てなかつたとようだ。勝負を行った結果、前述の状況のとおり、俺が負け、夕月が勝つた。

「たつくん…何を、しているの」

最後のチェックポイント付近で、別の組の班と遭遇した。知子に響、他男子二名が先客としてスタンプを押している最中であった。知子が夕月を背負った俺に気がつき、ジト目に「へ」の字の口をしている。徐々に近づいてくる気がする。

「いや、これはだな」

「お、川田か。悪いけどダンナを少し借りてるわ。」

背中の方を向くと、夕月がにかつと笑って手をひらひらさせていた。完全に知子をからかうポイントを抑えてきてやがる。

124

「だ、だから、た、たつくんはあたしのダンナじゃないってば!」

「じゃあ塚原か?すまないね、ダンナ借りててさ。」

「あら、貸した覚えはないわ。ま、貸すのは良いけど、きちんと返すのよ」

知子は慌てて、響は微笑を保ったまま、夕月に答える。俺の意思を全く無視した上での賃借の契約がいつの間にか成立していた。俺という物権を対象として、な。俺の上での夕月と響がやりとりをしている間、知子は俺をじつとみていた。

(くりっとした可愛い目してんな…)じゃなくて、何でこいつ俺を

見ているんだ？おいおい、この辺根つことか危ないんだから足元気をつけないと)

知子は、何か考え事をしていて足元に気が回っていないようだ。何度が、足を根っこに引っ掛けて転びそうになっている。

「おい知子、この辺危ないから足元を見る」

「たっくんに言われなくても分かって……きゃあ!」

俺の方に顔だけ向けたとき、地面から露出していた木の根っこに右足のつま先を引っ掛けた。知子はバランスを崩して転び、右ヒザを強く打つ。

「あたたたた……」

「まったたく…、すまん夕月、悪いが降りてくれないか？」

俺は背中に乗っていた夕月を下ろし、転んだ知子の傍に歩いていく。夕月・飛羽ペアも俺の後ろに着いて来る。中島君も他の男子二人も駆け寄ってくる。

「知子、大丈夫？」

「これくらい、平気よ」

知子の傍に近づいてくる響を安心させようとヒザを上げて立とう

とするが、右足が踏ん張ることが出来ないようである。へんな転び方をして転んだ時に足を捻ってしまったようだ。

「全く、すっかり前を向いていないから」

「むっ…」

知子は横目で俺を見て、再び地面に視線を落とす。

(このままじゃあ、知子が動けないし…仕方ないな、俺が運ぶか)

「ほれ」

俺はかがんで腰を下ろし、背中を知子に向ける。

「へ？な、何？」

「何って、おんぶして先生のところまで運ぶから早く乗れよ」

「お、おんぶって…もう小学生じゃないんだし恥ずかしいわよ！」

「何言ってるんだよ、それじゃあ運べないじゃないか。」

はあ、と俺は溜息を一回つく。

「じゃあ大人らしくお姫様抱っこの方が良いのか」

「お姫様……、ッ何言ってるのよ！」

知子は、顔を真っ赤にして首を振る。周りを見ると、夕月や飛羽、中島君含む男子生徒が俺と知子を面白そうに見ている。彼らの周囲の視線が気になるようだ。これじゃ埒が明かないな、と俺は思い強行策を取る事にした。

強引に知子の腕を俺の首に回させ、しゃがんで下げた腰を立て持ち上げて知子の身体を持ち上げた。身体を持ち上げた時に、小さく「きゃっ」という声が聞こえる。

軽い、と思った。小学生の時も背負ったことがあるが、その時はもう少し重かった気がするが…、単純に俺の背がでかくなったのか。子どもの身体って成長早いな、と感心してしまう。

「夕月、飛羽、中島君、すまんが先生のところまで知子を運ぶから先にいってくれ」

「ああ、分かったよ。あとは任せな」

「任せなよ」

「あ…ああ」

後ろを振り向いて、響きと目が合う。響は目が合うと、そのまま頷いた。行ってらっしゃい、と言っているようだった。そのまま、知子を背負ってスタート地点へ戻ることにした。

所々で歓声やら笑い道が聞こえる。チエックポイントを見つけたのだろうか、それとも話が弾んでいるのか。

「前を見ないで転ぶなんて、お前らしいよ」

「…つるさいわよ」

女の子を背中に背負うなんてうらやましいシチュエーションではあっても、知子と俺の身体はそんなに接していなかった。俺と一緒にこんな風に行っていると、他の奴に見られるのが恥ずかしいのだろうか。思春期で難しい年頃だしな。

「…そういうば、前にもこんな風に負ぶってもらったことがあったわね」

「ああ、お前が山の奥に入っって行って迷子になった時だろ？」

そう、あの時もこんな風に俺が知子を背負って帰った。帰る道が分からず泣いていた知子を俺が見つけたんだっけな。確か、スクールに入っって一年目、小学三年の頃だった。俺があいつと同じ級に上がった時で色々話しかけてきた頃だった。入っってすぐバタフライまでマスターした俺をライバル視して何かと話しかけてきてたっけ。その分話す機会があっったから次第に仲良くなっただっけ。

ある日、スクールが終わった後に近くの山に行っってみようという知子の提案で俺と響を連れて山に入っただよな。知子が無計画に

山の中に入って、そのうち姿が何処にも見えなくなって。そういや、探し出した直後の俺を見た知子ときたら、ワンワン泣いて抱きついてきたな。俺よりも当時背が高く、俺もまだまだ非力だったから背負うのが大変だったな。今思い出しても、純粹に懐かしく心温まる出来事だったな。

「お前は普段しつかりものなのに、何かにムキになってこういう風にドジったりするところは変わらないよな」

「たつくんも女の子を見る目が、い・や・ら・し・いのは昔からずうっと変わってないわよ！」

右頬を思いつきり抓られ、引つ張られる。ほっぺ、すごく…痛いです……。

俺ってそんなに女の人に対してイヤらしかったか？確かにエロイことには興味心身だけど、そんなに今の歳と同じ代の子どもに対して恋愛対象に見たり性的な対象には見たことはないはずなんだけど…

「でも、変わったことも多くあるぞ」

「何よ」

「知子や響、それに逢も容姿や雰囲気は大人っぽくなった。」

「大人っぽくなったって…、いやらしい目で見てたんだ」

「何言ってるんだか、褒めてるんだよ」

「…」

無言

「… たつくんも背や背中が大きくなったよ」

「そうかい」

「… 大人びたところは変わってないけど、… かつこ… よくなったね」

最後の方は聞こえなかった。いつの間にか肩にそっと置かれた手は肩になく、俺の首にぐるっと回されていた。力もぎゅっと入れられていて少しだけ息苦しいかも。俺は背中に当たるその微妙な膨らみに過敏に反応してしまったマイサンを鎮めさせることに集中することにした。

知子の心臓の音が伝わってきた。ハートレート（心拍数：Heart Rate）を測ったら、それなりに厳しいメニューを消化した後くらいの様子だった。

（… 緊張でもしてんのか？ 誰かに見つからないか、ヒヤヒヤしているのがこの脈につながっているのか？）

俺のマイサンも未だにテントを作っているからヒヤヒヤしてるわ。多分、同じくらいのハートレートだろう。こんなジャージのピラミッドを他の奴に見られるわけにはいかん。同窓生を背負って男としての部分が出てしまいました、なんて評判広げられたくないしな。

「たつくん… あたし、… っと… た… くと… いっしょに…」

かすれて言葉が聞き取れない。寝言か？俺の後頭部に知子の頭に
当たると。

「ねえ、たつくん」

「なんだ、起きていたのか」

「たつくんは…恋したことある？」

「なんだよ、唐突に」

「たつくんはやっぱり、その、響ちゃんが好き…なの？」

何を聞いているんだこいつは。エロゲーなら、これはフラグだっ
てことは分かるんだけどな。前世では、同じようなことがあって勘
違いして、そして失恋したからな。それで教室では気まずくなるわ
…落ち込むわ…、はあ。

「やっぱり響ちゃんのほうがいいわよね…あたしみたいな男勝りな
んかより」

「何を意図して聞いているか知らないが、お前が女の子として魅力
がないと思っっているならばそれは間違いだぞ。」

はつきり答える。

「お姉さん気質でしつかり者で頑張り屋さん、それなのに意地っ張
りだったり料理が下手だったり…そんなお前だから俺はこうして仲
良くやっていけるんだよ。もし、お前がそうじゃなかったら、こ
うしてずっと一緒にいないさ。そういうお前が、俺は好きだからな。」

勿論、Likeの意味でだぞ？一瞬背中の子でピクツと大きく
反応する。何だ、近場に誰がいるのか？まずいぞ、テントはまだ畳
みきれてない！

そんな俺の様子がおかしかったのか、クスクス後ろで笑い声が聞
こえる。

「何だ、何かおかしいことがあったのか」
「なーにも さっ、たっくん行くわよ」

首にさらに手が回る

ぎゅむっという擬音が聞こえるようだ。密着度が半端無い。下げ始めたレバーが再び立ち上がってくるのが分かる。後ろで鼻歌が聞こえる。

（機嫌が直ったのか。こころ表情が変化するやつだ、困ったものだ。それにしてもレバーが下がらない。もうすぐ着いてしまうぞ。俺のレバーよ、早く鎮まってくれ。）

スタート地点に戻った俺たちは、その場で待機していた先生に事情を説明した。説明した後、俺は知子をそのまま背負って、施設近くの診療所へ行き診察を受けてもらうことにした。診察の結果、軽い捻挫であるとのこと、医師は、弾力のある包帯を右足首に巻いて患部を固定することにした。

「大丈夫そうだな、じゃあ俺はもう行くよ」

「あ…うん、ありがとう、たっくん」

俺は知子の治療が順調に行われていることを見届けてから、診療所を後にして再び先生の待つスタート地点へ戻った。うん、これで大丈夫だ。早く元気になって戻ってこいよ。

まだまだ、オリエンテーションは続くんだからな。

(次回へ続く)

第九話：オリエンテーションキャンプ（2）（後書き）

ご一読ありがとうございました。

少し助長になってしまったかな、と心配しながら書いております。

のんびり、ゆっくり自分の書けることをのんびり書こうと思います。
それでは。

第十話・オリエンテーションキャンプ(3) (前書き)

大分遅れてしまいました。

誰も待っていないと思いますが、第十話です。

第十話：オリエンテーションキャンプ（3）

知子が捻挫した時から1日経った。

起床して、朝飯を食って、知子に足の様子を聞いて、と午前中の時間はゆるゆる進んでいった。事件といえば、俺のクラスの男子生徒が朝目覚めて初めての”あれ”を体験したことだけが事件になっただくらいだ。この時期の子って大変なんだよな。

本日の昼間は、施設から歩いてすぐのところにある、屋外のキャンプ場を使った飯盒炊飯実習であった。先生によれば、班毎に飯盒でご飯を、そしてあらかじめ施設で用意してくれた野菜と豚肉、ルーを使ってカレーを作れとのことだ。

俺はこういうアウトドアキャンプは好きだった。前世でまだ新米社会人だったころ、同期の連中とよく車で山にいたり、ネットサーフィンによる情報収集や詳しい奴に教わってきたため知識は豊富であるし経験もある。火の起こし方や、テントの建て方、美味しい米の炊き方など、いろんなことを学んできたものだ。

先生が各自作業を始めるように指示を出し、俺達も自分達が使う作業場に移り、作業を開始した。まな板、包丁、鍋、食器一式、オタマに飯盒、蛇口から水が出るかを俺は確認して、料理できるなど判断して皆に指示を出し始める。

あらかた野菜を切り終えて火を通せる状況になったあたりから、俺は周囲の様子を見渡す。野菜の皮を包丁で剥くのに苦労していたり、米を洗わないまま水を入れてかまどに持つていこうとする生徒が見える。今晚の彼ら彼女らのお腹が本気で心配である。

一度視線を俺の班に戻すと、遠野の班の魔女二人が、切り終えた材料を鍋に入れ炒めていた。それなりに厚底の鍋を見つめて端やらおたまを混ぜている姿が恐ろしい薬を作っているような魔女を思い浮かべたのは俺だけではないはずだ。何か魔女・飛羽愛歌が呪文をぶつぶつ言っているのが聞こえるのは何だろう…、空耳だと思いたいものだ。

もう一度周囲を見渡すと、知子と響、それに同じ班の男子生徒2人が作業をしているのが見えた。彼女らは野菜を担当し、男子生徒二人はおコメを研ぐ作業を担当しているようだ。

知子は、手元にあるジャガイモの皮むきと格闘していた。難しい顔をしている、どうやったらいいかわからない様子だ。それでも、「えいっ」と気合を入れてジャガイモに切りかかる。勿論、あつという間に皮が無くなった。その代わり食べられる部分の体積が4分の1以下になってしまったが。大雑把過ぎるにも程があるぞ。確か、原作だと里仲なるみに料理を教わっていたんだっけか。小さくなったジャガイモを見たとき、あれえ？と頭の上に「？」が見える気がするくらい、不思議そうな様子をしている。

手先は器用なはずだけど、多分あまり経験がないんだろうな。頭の後ろでクレヨン　ちゃんの主人公なりの汗が流れるような気がした。そういえば、あの作品のアニメはもう始まっているんだっかな。料理は慣れだし、スクール時代の合宿でも洗濯・掃除はしっかり出来るから、料理をしっかりと出来れば結婚生活をその手の理由で壊すことはなさそうだ。

視線を知子の右隣に移す。響は黙々とニンジンの皮むきをこなす。早く慌てず、そして正確にニンジンの皮があつという間に剥かれていく。「ニンジンの」という言葉が無かったら少し卑猥な文章になってしまったため、深く考えないように。それにしても何という手際の良さだ。響って確か料理がうまいって設定だった気がするな。原作だったか覚えていないが、逢に対して「塚原の味じゃない」と夕月・飛羽が言っていたような気がするし。ここで既にその能力が

發揮されていたんだな、そういえば小学校の調理実習でもかなり手際が良かったしなあ。あいつも将来、器量の良い嫁さんになるぞ。

俺は米と水を入れて火にかけた飯盒の様子を見に行く。勿論、米は必要以上に丹念に洗ったぞ。この時期の精米技術がどのくらいかは知らないが前世の水準よりは低いはずだ。本当は炭を入れると美味しいんだけどなあ…。

かまどの近くまで足を運ぶと、中島君が消えた火をもう一度着けようとしていた。直接木の小枝にマッチや発火道具を使うが、どうにもうまくいかないらしい。こういうときは、枯れた葉やら紙やらを使えば火種になって、その後小枝を少しづつ入れればいいんだっけ。そういうわけでそこらに落ちている湿気ていない葉っぱや紙をかまどに入れて火を起こした。着けた種火が風で消えてしまつか、その前に小枝に火がつくか、この一瞬を待っている時にドキドキするのは俺だけか？

枝に火がついて俺達はほっとする。これであとは火の管理をすれば大丈夫だ、と俺は中島君にいい、彼には調理場に戻ってもらったことにした。飛羽や夕月が魔女の何かを作らないかを監視してもらうためだ。

「火守をしているの？」

後ろを振り向くと知子が立っていた。足元はまだまだ恐る恐るという感じで俺の方に寄って来る。

「ああ。足は大丈夫なのか？」
「平気、走ったり急いだりは出来ないけどね」

足を擦りながら、あはは、と笑う。うん、いつもの知子だ。

「あれ？お前、さっきまで野菜と格闘していなかったっけ？」
「火の守から戻ってきた男子から、『頼むから俺達の栄養を捨てないでくれ！』と懇願されてこっちになったのよ！全く失礼しちゃうわね！」

頬をリスのように膨らませる。いやあ知子には悪いが、その男子の言い分も分かるぞ。

「それで、お前はその足で火の守が出来るってのか？しゃがんだりするんだぞ？」
「で、できるもん！」

ムキになってるな。おまけに口調が子どもっぽくなってキミキスの菜々みたくなってるぞ。ここは俺が何とかして助けてやらにやあな。

「ほれ、お前のところの火が消えかけているぞ。ほれ、この小枝を分けてやるから小枝をかまどに突っ込め」

「大丈夫よ、一人で探せるわ！」

「落ち着けよ」

知子の頭にぽんと左手を乗せて優しく撫でる。昔からのコイツのなだめ方である。知子は「ひええ……」と顔を赤くして周囲を見ている。しまった、人の目があるのを忘れていた。

「す、すまん。つい手が。」

「う、ううん、平気よ。ありがとう」

うう……、たまに人の目に配慮せずこういうことをしてしまう癖は改善した方がいいのかもな。そんな風に自分の行動を猛省しながら、俺は手元の枯れた枝を掴んで俺達の班の飯盒の上に先を置く。すこし振動しているようだ、まだまだこれからだ、といった感じだな。

カレーは美味かった。変な薬が入っていないか、内心ビクビクしながら更に盛り付けられたカレーに手を着けたが、そんな懸念も吹き飛んでしまった。夕月と飛羽に「美味しくなる魔法とか秘術とか掛けたのか？」と失礼極まりないことを聞いたら夕月に「美味しいなら、素直に美味しいといいな！」とどつかれたが。うん、これは俺が悪いな。素直に美味かったといえよ。」「萌え萌え、キュン」「だから飛羽よ、お前はどこでその先の時代の知識を習得して来るんだ。

そんな風に波瀾ではあったが上等な食事を終えたら、後は使った場所の掃除や後片付け。それを終えたら既に4時過ぎ。このあと2時間は各自、自由時間であり、その後は命の洗濯である入浴タイムである。俺は他の連中よりもさっさと先に入る派だ。人数の混雑も無いし、ゆっくり身体を洗う時間も得られる。それでもやはり先客はいるもので、他のクラスの連中もそれなりの人数であった。

これには理由があった。女子の入浴時間と現在は重なっているからだ。このうちの何人かは、この機会を狙っている紳士達であろう。女子の会話を聞こうとする奴ら、何かよからぬことを考えて相談している奴らなどがちらほら見える。まったく、紳士の多い空間だ。

『でわー、…で…なのよー!』

女子の声が天井から聞こえる。天井を見上げると、湯気が向こう側から入ってくる。

実はこの男子風呂と女子風呂とは天井で繋がっていたのだ。とはいうものの声が反響したりこちらの声大きいいため、俺の耳に入っ

てくるのは断片的な情報しか入ってこない。銭湯に行ったら男子風呂と女子風呂を隔てる壁がそれほど高くなく、二人くらい肩車すれば覗けてしまうマンガみたいな状況だと思ってもらって構わないだろう。

女子風呂ね、このくらいの歳になってしまおうと一緒に入る訳にはいかないしな。俺はこの身体になってから、女子風呂には入った数は五本の指に納まるくらいだ。赤ん坊の頃は身体が自由に動かないから仕方が無かったんだよ！！歩けるようになってからは、母さんに連れられても入りたくない、男風呂で入れるとマセた主張をしたからな。身体は子どもだけど心は大人だから、ここで社会的な倫理観を崩壊させられたら将来変な趣向を持つかもしれないな。

『そつい……ともちゃん、今日も遠野……付き添っ……ったね』
『ね、昼間も……撫でて……し。やっぱ……さん、遠野君と……てるのかな？』

呼ばれた気がして、俺は天井を見上げた。俺のことでも話しているのか？

『川田さ……今度詰め寄っ……ようかな？遠……もいいけ……』
『……とも……ん……顔に出……分かり……からね』

何だ？何を話しているんだ？知子の話題も出ているようだけど、昨日の足を痛めたやつの話か？駄目だ、反響していたりこっちの声でかき消されて良く聞こえない。

『ん、でも……、遠野……塚原さん……一緒にい……よく見……よ？』
『……原さん、……のこと……きな？』

『ごめ……さい、期待……るようだけど、拓君に聞……ら、きつと
「あいつ……腐れ縁だよ」と……思っわ』

『え、うっそ……』
『遠野君と……に行ったり……んでしょ？』

響も一緒にいるのか、多分この声はそうだとおもうけど。そうすると会話の内容が気になってくるぞ。壁に耳を当てれば分かるかもしれないが、そんな変態的なことは俺には出来ん。校舎にエロ本隠したり、エロ本を品評するくらいのオープンな紳士ではあるが、変質的な行為に手を染めるほど俺は落ちてはいないぜ。橘みたいな変態紳士には流石になれない。

『……、怪しい……あ。でも遠野君……変わって……じゃない？』
『そうね、何か英語の……が入った本読んで……るし、……近寄りがたい気……。顔も言……普通よ……ちよつと良い……だし』

良くは聞こえんが、なんか俺の悪口を言ってくれているのかね？俺は長風呂のしていて少しのぼせかけている。ああ、少しぼんやり

してきた。

『これは違う……拓君は確かに変わ……ところもあるし、話しく
……思つかもしれないわね。でも、後輩の面倒見……いし、好きなこ
と……一生懸命、そ……凄く優しいし……』

『へえ〜！……原さん……遠野君のこと良く知っ……んだね』

『それ……い好き……こと……！』

『だ、だから、それ……っ……！』

(さ、さすがにこれ以上は限界だ……)

会話よりも身体の熱を冷ますべく、風呂から出ることを決めた。
更衣室と浴場を隔てる取っ手に手をかけてから、後ろを振り返ると
天井から女子風呂を覗こうと肩車を決行するよからぬ輩共がいた。
思春期の男児が一度はやってみたいと思う浪漫であろう。保健体育
の教科書だけでは満足できない年頃だし。若者よ、大いにやるが良
い！変態の罵りを受けて、蔑まれる視線を浴びて快感を感じる真性
のMか覚悟のある人間ならな。そしてばれないようにすることが目
標だ。

俺は、この場に留まっていた場合、俺にも先生からいらぬ疑惑を
立てられかねないので、早めに着替えて外に非難することにした。
俺が風呂から出てそれなりの時間が経った時、その俺の懸念が現実
のものになる。

俺はさっさと換えのジャージを着用して、娯楽室のソファの上でだらだらと身体を横にして過ごしていた。響も数分後、上下黄色のパジャマを着て女子の風呂場から出てきた。黄色に合うよな、響。そして左右を見渡して、娯楽室のソファで横になっている俺と目が合う。俺は右手を上げて「よう」と合図をした。響も手を上げようとしたが、後ろに視線を移して何かに気がついたように下ろし、そして俺から目を逸らす。∴俺、何かしたか？ひよっとしたらあの会話で何かあったのか？

響に続いて出てきた二人の女子生徒が響に合流する。そして、響の視線がちらちら向かう先にいる俺を見て、何かニヤニヤしながら響の後ろを脇でつつついている。響は困っているようだ。何かあったのだろうか。しかし、深刻ではなく何かでからかっているみたいだから、俺が気にするレベルのことではないだろう。二人は何かを響を言い残すと、口に手を当ててニヤニヤしながら去っていった。

彼女らが去った後、響はこちらに歩を進めた。俺は普通に「よう、もう上がったのか」と問う。響はそんな俺の方を見て、「ええ」と端的に返される。なんかいつもとはトーンが違う感じがした。動揺している、そんな時の響に似ている気がする。様子も雰囲気もなんだかいつもと違う感じがした。

そのいつもの違う様子に加えて、風呂に入った後なのだろうか、いつも結んでいた髪を解いてしっとり濡れ、頬もほんのり赤い。なんか、艶やか感じがするぞ。18歳未満とはいえ、ドキッとさせ

られるな。

「何か風呂で俺の名前が出ていたけど、俺について話していたのか？」

「聞いていたの？それは感心できないわね」

響はジト目になって俺を見る。風呂の中から女子中学生の会話を盗み聞きする俺の姿でも想像しているのだろうか。うん、そんな姿の俺は紛れも無い変態だな。だから早くそんな想像の俺を払拭させないと。

「上でそつち繋がっているんだから聞こえない方がおかしいだろ」「ふふ、冗談よ。知子や私が拓君と仲良いね、という内容よ。それで、私か知子のどちらかが拓君と付き合っているんじゃないかって」

何だ、そんなことが。いつものように腐れ縁で済ませてしまえば楽に収まるじゃないか。何回もそれは聞かれたことだろ？

「昔からの腐れ縁だし、そう見られてもおかしくないのはいつものことだろ？」

「…やっぱりね。拓君ならそう思うと思った」

目を瞑って、響が小さくぼやく。そして、俺の横に腰を下ろす。やけに近い気がするが、それは俺の気のせいだろう。

このソファアールでは、まばらに浴場から出てくる女子生徒や男子生徒にじろじろ見られるため、俺は響をこの場から少しはなれたベンチに腰掛けないかと誘い、響を連れて移動を始めた。

近場の自動販売機をこっそり使って飲み物を2本買い、そのうち1本を響に渡す。響は最初、規則で決められているからと言って受け取らなかったが、俺が買って渡したんだから俺のせいになればいいさ、と響に蓋の開いた飲み物を少し強引に渡す。バスに酔っていた時に助けてくれたそのお礼さ。
小学校から名を馳せている規則破りの常習犯としての俺は未だに健在だからな。

「くっつ、冷たくて美味いな〜！」

「本当ね。拓君、ありがとう。」

冷えたコーヒー牛乳やフルーツ牛乳が本当は欲しいところだが、自販機に入れられないからな。これで我慢してくれよ。

冷たい飲み物を飲んでほっとしたせいか、風呂でのぼせかけた疲れと眠気が急激に襲ってきた。そんな頭の状況の中で、響のクラスの子が入浴時間って事は、知子も入っていたのではないのかという疑問がぼくくと浮かぶ。

「そっいえば知子は？一緒だったんじゃないのか？」

「もう部屋に戻って寝てると思うわよ。やっぱり足に無理をさせるわけにはいかないそうから」

「そうか。あいつに無理はさせて痛い顔をさせるのは嫌だからそいつは何よりだな」

疑問がなくなったところで、俺の思考も限界が来た。

ん〜、と俺は伸びをして大きくあくびをする。そんな様子を見ながら、響はクスクス笑っている。これは、眠いと思っている時の俺の癖らしい。こいつ、俺をどれだけ観察しているんだよ、暇だったのか？しかし、眠たいな。むう、明日も早い…し、部屋に戻ら…ない…

「拓君、もう寝た方がいいんじゃないかしら？」

「…ん」

眠いのは…確かにそうなんだが、もう少し…まったり…してから
そうする…

「ねえ…拓君は…」

ん……

「知子のこと…やっぱり…き…なの？」

なんか…行ったか？知子…がなんだって…？

「……かもしれないけど、……私は……拓君のこと……男性として……」

……ん？……

「好……」

……

この時、俺は眠っていたのか分からない。身体が仰向けになって、頭に柔らかい何か当たっている気がする。そしてぼそつと何かを聞いた気がする。

『拓君といつまで、こういうことができるのかしら。ねえ、拓君？』
『ごめんなさい、知子。でも、今日くらい多めに見てくれないかしら』

髪が撫でられていたような気がするが実はあまり覚えていない。

『キヤーッ！覗きよーッ！！』

俺が目を醒ましたのは複数の女の子の叫び声だった。俺は横になつていた身体を起こして声が聞こえた方を向いた。

（覗き？あいつら本当に覗きプロジェクトを決行して、結局見つかったのか？身体を起こして様子を見に行：身体を起こす？…つまり横になつていた？まてまて、状況を把握しよう。俺の身体下半分は

未だにベンチの上にある。後ろを向けば驚いた響の顔、俺の身体が起きた事にびつくりしたようである。そして俺の頭が置いてあったところを俺の座高から計算すればちょうど響の太股の位置。…そして目を醒ました時には確か黄色が視界全体に広がっていた、つまり俺は響の身体側に身体を向けていたってことか？)

じつと、響を見る。俺と目が合うと、いつも冷静なあいつの顔が茹蛸みたく赤くなっていき、目線をそらす。俺達の間には、何か胸の中がもどかしいような、くすぐったいような、何か口を開けないような雰囲気満ちていた。

(…つまり、俺は響に膝枕してもらって、それだけではなく、顔を身体側に向けてしまっていた…ってことだよな。まずいな、何を話せばいいんだよ。状況を判断すると、つい寝てしまって、響さんのその二つのフトモモに頭を乗せてしまって、さらにはその美しい身体の方をずっと向いていました、と。最後の部分は何をどう言い訳すればいいのかな、そうこの行為はチヨウチヨが美しい花のm…、やめよう。こいつに変態扱いされるのは俺は嫌だ。)

俺の思考が停止しかけたり稼動しかけたりしている中、聞こえてくるのは、覗き犯を捕まえようとする女子生徒の動きと逃げようとする男子生徒の動きを表現する音のみであった。

廊下では男子浴場から逃げ出そうとする生徒達を見回り中の先生が押さえにかかっているようだ。バタバタ聞こえる複数の足音、女子生徒の男子生徒たちに対する怒号や侮蔑の声、逃げようとしているであろう男子達の悲鳴、先生達の叱責が聞こえる。

「…とりあえず、先生に状況を聞いてから、それからお互い部屋に帰りましょう。」

「へっ、あ…ああ…」

響の提案にボケッとしていた俺は生返事を返した。それから俺達は、先生に何があったかを聞きに行つて状況を理解した。俺の部屋の奴も混じっていたから、俺が巻き込まれないようにアリバイ工作をする意味合いもあつたんだろうな。本当に賢い奴だよ、お前は。

「拓君、さっきの話なんだけど…何か聞いてた？」

「話？どの時点の話だ？」

「そう…うん、ならいいわ。おやすみなさい。明日も頑張りましょう、拓君」

響はそう言うと、自分の部屋へと戻っていった。俺はその後姿が小さくなっていくのをずっと見ていた。何か後ろを追つて傍に行きたくなる、そんな背中を俺は呆然とその場で見ていた。

それからのオリエンテーションキャンプは平々凡々な内容で消化され（夕月や飛羽のせいで大体は俺は毎日が阿鼻叫喚であったが）、特に変わったこともなかった。知子も足の様子が次第に良くなり、いつもの調子でちよっかいやらおせっかいを掛けてくるようになったし、響もお母さん見たく俺達の様子を笑いながら見守っていた。

しかし、何かが変わったのではないかと俺は帰りのバスで相変わらずの吐き気と戦いながら思った。知子は少し「いじらしさ」というものをこのオリエンテーションの前後で感じるようになった。響も、笑顔で俺達を見るが少し寂しそうな顔が見えるような気がした。これは、彼女達の思春期に特有である精神的な変化を表したもののなのか？それとも、俺の心のありようが変わってしまったのか？…

学校に戻ったら日常に戻る。戻ったら何か分かるかもしれないな。そして、帰ったらまた豪快な笑い声と共に、主将のメニューが待っているんだろうな。明日が楽しみだ。

俺はビニール袋を眺め、夕月と飛羽の背中からの攻撃に耐えながら俺は日常に戻る楽しみを思い浮かべていた。

ちなみに中間のサービスエリア手前で、俺は胃の中の物を戻しました。
うん、次からは俺を一番前の席にしてくれ。

(次回へ続く)

第十話：オリエンテーションキャンプ（3）（後書き）

最近忙しかったので家でパソコンを打つ余裕がありませんでした。誰も待つてはいないとは思いますが、第十話を投稿させていただきました。

ひびきちゃんのターンということので。

本当に、ご一読ありがとうございます。

そしてこのような駄文に、感想や大勢の方が登録して頂いてありがとうございます。

ゆっくりですが、確実に原作と同じ時間軸までは頑張って書いていこうと思います。

塚原先輩と川田先生は皆の嫁、異論は認める方向で。

第十一話：夏の残像

夏休みも中盤に差し掛かる八月中旬。世の子ども達が部活動や遊び、そして課題に追われるこの時期。俺は、怒涛のように押し寄せた夏の出来事がウソのように感じられるくらい、いまは静かな学校のプールに一人仰向けになって漂っていた。水の中に身体が漂っている感触と、水が耳元で跳ねる音、水面に反射する光が、身体の五感で感じられることだけであった。

静かだ、まるで俺しかないみたいだ、と俺はゴーグル越しに空を見た。雲ひとつ無い快晴だった。それは、県大会に参加した時の空に良く似ていた。

.....

8月初旬、雲ひとつ無い快晴のなかで、中学生を対象とする県大会が開かれた。俺はこれより前に中学で出場した大会で、予選を突破できた1フリと2フリ（200m自由形）のレギュラーとしてこの県大会に参加した。勿論、全国大会に昨年出場した響に知子もそ

それぞれの専門種目で出場を決定していた。

試合は2日に渡って行われた。一日目に、俺の2フリ、知子の2バタ(200mバタフライ)、響の2コン(200m個人メドレー)があった。俺は男子2フリの予選11位で無念の予選落ち、知子は予選8位のスレスレで決勝出場を決めて7位入賞、響は2コンは予選6位で決勝出場を決めて決勝5位という結果であった。専門ではないとはいえ、俺は予選突破が適わず、チームに貢献することが出来なかった。その事は、非常に悔しかった。

その翌日は、3人とも得意の種目であり、より気合が入っていた。俺も昨日の悔しさを晴らすべく、専門種目で汚名返上を果たすつもりであった。三人とも、この日の種目は予選を無事突破することが出来た。

この2日目には、逢が遠路にも関わらず、両親と小さな郁夫君と一緒に応援に来てくれたな。実際に会うのは数ヶ月ぶりで背も伸びて少し大人びた様子であったけど、中身はあんまり変わらず、拓お兄ちゃん拓兄ちゃん、と引っ付いてくるので先輩達と両親の視線が気になって仕方が無かった。逢のお母さんは、あらあら、と口に手を置いて微笑んでいた。……逢のお父さん、俺は娘さんをどうこうする気はありません。ですから、お願いですから、ウチの娘は未だ嫁にやらんぞ、という顔で俺を見ないで下さい。逢、郁夫君が見ているんだからお姉さんしないで駄目だよ、と諭すと逢は、はいっ、と元気よく挨拶をして郁夫の相手をした。…今思えば、原作の郁夫君の甘えたがりって、もしや逢のご両親に甘えている様子から由来しているんじゃないのか…？それを裏付けるように、逢のお父さんは、やれやれ、という様子で溜息を吐いた。

「じゃあ、そろそろ行ってくる」
「うん、頑張ってきてね。拓君」

決勝のレースを終え、クールダウンを済ませてスタンドに戻ってきた響から声援を受ける。俺は、自分の男子100m自由形決勝の召集に向かうべく、階段を降り男子更衣室を通り抜けプールサイドへ向かう廊下に出る。プールサイドの方へ向かおうとする時に、反対側に輝日南中のジャージを上羽織った女子選手が壁に頭を当てているのを見かけた。

(知子、だよな。スタンドにも戻らず、こんなところで何を…。)
知子の表情はここからは、見えなかった。ただ、壁に手と額を当てたままで震えていた様子から恐らく泣いているのだろつということ
は分かった。

(あの決勝で表彰台にあとコンマ03秒足りなかったことが相当悔しかったんだな、さっきレースが終わったばかりなのにダウンもせず、ずっと悔しくて泣いていたのか)

なんて声を掛けたら良いのか、いや本当は声を掛けない方がいいかもしれないが、と俺は知子を見つめて考えていたのを覚えている。ただ、いま振り返ってみると、ただ声を掛けようとする勇気がなか

っただけなのかもな、と己のヘタレさに呆れてしまう。しかし、知子の姿を見ていて、何か声を掛けないと、という気になり俺は声を掛けることを決心した。

「知子」

声を掛けた時、知子の震えていた肩がピクツと上がった。俺の存在に気がついたのだろう。しかし、直ぐに上がった肩が下がり再び震えだす。

くやしいのは表彰台に上がれなかったこともあるだろう。それにお人よしの知子のことだ、それ以上にチームに貢献できなかった自分に対してふがいないさを感じていたのかもしれない。こいつがこんなに落ち込んだのを見たのは、この時が初めてだった。

後ろから両手を知子の両肩をポンと置いた。俺はその時、何も考えていなかった。今分析すると、おそらく安心させようとしていたのだろう。肩が震えていたことと鍛え抜かれていた肩がそれでも小さかったことは今でも覚えている。

「本当に、…あと少しだったのよ？あたしが、あと指をもう少し伸ばしていたら…、きっと勝てたのに…、ごめんなさい…涙子先輩、裕子先輩…！」

今日のレースで引退する先輩方の名前を次々と呟く。彼女らは知子と同じ1バタの選手で、予選で敗退した。知子はレース前に、先輩方の分まで頑張る、と誓って望んだのだった。きっと涙子先輩も裕子先輩も知子を責めないだろう、でも知子はまだ自分自身を許せ

ないんだろっ。

知子が俺の方を向いた時、目から大粒の涙が溢れていた。涙は赤くなっていた頬を伝い、顎に至り、雫となって胸元に落ちる。

「悔しいよ、……たつくん……！」

ここから先、俺は自分が何故そういう行動を取ったか分からない。抱きしめてしまったのだ、それも思いつきり強く。さらに、廊下を歩く人目も気にせず。あまりに軽率な行動であつたと、今でもこの人生上顔をマクラで覆いたくなる出来事である。

知子の顔は呆然と俺を見ていた。目尻に涙が残っていて、赤い頬で、濁っていない茶色がかった髪で。

「す、すまん。」

「う、ううん。別にあたしは……」

じゃあ俺行くわ、ダウンして早くスタンドに戻れよ、と逃げるように言っただけは招集会場に急ぎ足で向かった。何か凄い罪深いことをしているような、恥ずかしいような気持ちを抱いていたことは間違いない。

「遅いぞっ拓ウ！」

プールサイドの召集会場に着いた時に、先に待機していた主将に

叱られた。とはいももの、声に怒気は籠っておらず、笑顔であった。召集会場付近には、予選2位の主将と予選7位の俺を含めた8人が各々ベンチに座っていた。

「すみません、遅れました！」

「何かあったのか？」

「まあ、少し」

幼馴染を何故か抱きしめていました、なんて言える筈がないのでお茶を濁した表現を使った。主将は、何か聞いたそうな様子ではあったが「そうか」と一言呟いてそれ以上追及しなかった。正直、ありがたかった。

「1コース、輝日南中学、遠野拓くん」と召集担当の役員が俺の名前を呼び上げたので、俺は返事をした。以下、2コース、3コース……と続いていく。全員の招集が確認され、キャップとゴーグルの具合を確認している俺に対して主将が声を掛けた。

「拓、ひよつとしたらお前と一緒に泳げるのもこれが最後かもしれないな。出来るなら全中の標準記録を切って引退を先延ばしにして、お前達をシゴキ上げたいものだ」

「出来ますよ、私だって先輩に負ける気はありませんから」

「言うようになったな、コイツめ」

主将の最後という言葉に、俺はその時少し感傷的になったな。前世で俺も中学・高校・大学と自分が最後のレースに挑んだし敬愛する先輩を何人も見送ってきた、その光景が頭を過ぎった。この精神

的には俺よりも大分年下なのに敬愛した先輩も同じように去っていくことをイメージして離れなくなったのだ。

「拓、そろそろレースだ。行くぞ」

「えっ、あ、はい」

おいおい大丈夫かよ、とカッカカと笑って俺の背中をバンと叩く。痛い、相変わらずの遠慮の無さだなと思った。：俺にとっても、今シーズン最後のレースが始まる。

「拓、一つだけ忠告だ」

「：？何です？」

「優しさは確かに大切だ、でも優しすぎるというのも罪なことなんだぞ」

何のことか分からなかった。だが、先輩は真面目な顔で俺にそう言ったので俺は肯定の意を伝えた。入場の音楽が鳴る、さあレースだ
：

……

主将は決勝を4着でゴールしたが、標準タイムを切る事が出来なかった。俺も自身の壁であった57秒を切り、6着でゴールしたものの最後まで主将に勝つことが出来なかった。レースを終えた主将を思い出し、引退された先輩方の姿を思い出し、俺は胸が痛くなり、誰もいないプールの中に身を沈めた。プールの中の青の光景が目につけば広がる。叫ぶかわりに思いつきり息を吐く、苦しくなるまで吐く。吐き切り、身体が酸素を欲するようになり水面から顔を上げて大きく呼吸する。気は紛れたか、と自分に問いかけた。少なくともすっきりしたのは間違いなく、という自分からの返答が身体を通じて分かった。

「…野オー！遠野オー！！」

校舎の方から俺の名前が呼ばれた気がして、校舎の方を人の影を探す。二人の女子生徒がおり、メガネを掛けた方が手を振りながら俺の名前を呼ぶ。夕月と飛羽、後ろにいるのは山口先輩か？取り合えず手を上げて、ベソを掻いていたのがばれない様に声の調子を整えて返答した。

「何だぁー!?!」

「水泳部は今オフだろー!?!ちよつくら茶道部を手伝ってくれないかって先輩が行っててさー!?!」

そんな気分じゃないんだがな。とは言っても、そんなこと口に出せば後ろの山口先輩が怖いし…。気分転換にもなるし、やりましようか。

「分かったー!?!10分したら茶道室に行くから待つてくれ!?!」

俺の夏は終わった。セミが鳴いていることと外で運動部が声を出していることが、季節としての夏が未だ続いていることを俺に伝えていた。それが俺の夏の残像を未だに見せ続けているのだった。

(次回へ続く)

第十一話：夏の残像（後書き）

ご一読ありがとうございました。

三度の没や外伝行きになるなど、これでいいかと悩んだ第十一話です。

皆様楽しんでいただけたらよろしいのですか。

またこの度、この小説のPVが10万を突破致しました。

この場を借りて、皆様に感謝申し上げます。

本当に、ありがとうございます。

出来ることなら末永いお付き合いができますことを。
では！

第十二話：秋の到来・出会いの秋（前書き）

あまりに長くなったので2話に分割しました。
なので原作キャラは後の話になります。

第十二話：秋の到来・出会いの秋

水着から制服に着替えた俺は、夕月と飛羽に誘われて茶道部の部室へ向かうべく歩を進める。校舎の下駄箱で運動靴から上履きに履き替え、教室前の廊下に出る。休みの学校というのはいつもととは静かなもので、教室前の廊下を歩いても誰もいなくて新鮮さと寂しさを感じる。教室前を越えて、さらに廊下を歩くと茶道部の部室があり、部屋の入り口前には俺から見て右側に右手を腰に当てている夕月と、左側に流し目で俺を見ている飛羽がいた。さっきプールから姿が見えた山口先輩の姿は無い。既に室内に入ったのだろうか。

「山口先輩は？」

「先にも中に入ってる、ってさ」

「お待ちかね」

俺の問いに二人が答える。先輩を待たす訳にも行かないので、俺は二人に続いて茶道部の部室に入る。塩素や少々汗が混じった運動部特有の匂いを持った水泳部とは異なり、畳とお茶、それとほんのり香水の混じった香りが部屋から漂ってきた。塩素の匂いを纏った俺が入ったら異臭騒ぎの元凶になるかも、と俺は上履きを脱ぎながら少々妙な心配をしていた。部室の入り口からは、何度か顔を会わ

せた同学年の女子部員達が見え、彼女らは俺と目が会つと、きゃっきゃと何事か話し始めた。もう塩素の匂いが充満しているのか、とアホなことを考える俺。

「今の俺って、クサさ100%？」

「なんだいそりゃ？」

と後ろの夕月にぼそつと尋ねた。某魔法陣マンガのネタであり、この時期に連載が開始されたばかりだったのでネタ元のマンガを知らない夕月は頭から「？」マークが見えているような気がした。いやなんでもない、すまんかった、と俺は夕月に手を合わせて謝った。夕月は何か腑に落ちなかつたのか眉を少々顰めて考えていたが、まあいいか、と俺から視線を離し、元のように皆の待つ部屋へと進む。

「1年、飛羽愛歌、入ります」

「1年の夕月です、失礼します」

「同じく1年の遠野です、失礼します」

と俺達は入る前に一言断つて、茶道部一同が会する部屋に入る。水泳のシーズンが始まってからここには足を運ぶ機会が減っていたので、全員の顔を見るのは久々だった。

周囲を見渡すと、先ほどの同学年の女子生徒、相変わらず俺の方を見て話をしている。上座から向かって右側には2年生、左側に3年生の先輩方が座っている。2年生の女子の中には、水泳部2年で俺と同じく掛け持ちの先輩も座っていた。おはようございます、と小さく声に出し、その先輩に対し礼をする。2年の先輩方も俺を見

て何やら話している、今度からここに来るときのために香水でも買ってこるか…。

「来たわねっ」

3年生の女子の集団の中にいた山口先輩が、一人立ち上がる。そして立ち上がった足で、部屋の入り口付近に立っていた俺の方にズンズンと近づいてくる。この先輩は、この歳で大人の女性の雰囲気醸す美人さんなのだが、内面は実は男よりも男らしく、人に有無を言わせないオーラを纏っていることを最近俺は思い出した。当初のおっとりとした姿は実は俺を誘うための擬態だったのかもしれない、原作の梨穂子ルートのプレイをもう少し綿密にするべきだった。それからだろうか、先輩が俺の前に近づいてオーラに中てられる度に『来たなプレッシャー！』という自分の心の中でボケを入れて気持ちの切り替えを行っている。俺の前に立った山口先輩は、胸の前で腕を組み不敵な笑みを浮かべる。

「聞いたわよ、遠野。あんた、県大会で決勝まで進んだそうね。さつきまでアンタらの県大会の話でこっちも盛り上がったんだ。とりあえず、おめでとう」

「ありがとうございます」

酒の肴にされるのは好きではないのだが、労いの言葉を頂いているのだ、と俺は素直に感謝の意を述べる。でも、と山口先輩は逆接の接続詞をつけて話を続ける。ですよねー、と俺はこの展開を予想していたので、何らかのお叱りの言葉が来ることを覚悟する。これ

は、前世の部署で係長に呼ばれた時に編み出した俺流の心の予防線の張り方である。

「でも遠野、アンタが水泳部の期待の新人でも茶道部部員として鼻屑はしないよ。水泳部はこれからオフシーズンに入るそうだし、むしろ、これからビッシビシ稽古をつけて、さっさと一人前になってもらうよっ!」

あら、お叱りじゃないの？と俺は心の中で予想外の展開に少し呆然としていた。でもまあ、叱られなければそれに越したことはない。それに茶道部員としても一生懸命やる、と山口先輩には誓ったのでその言葉は実行する上でこの展開はこちらの望むところだ。

「はい、分かりました。私も若輩ながら精一杯努めさせて頂きます。山口先輩、諸先輩方、同学年の皆さん。どうぞご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いします」

と背筋をピンと伸ばし、山口先輩の目を見て答える。周囲は呆然としているようであった。何か拙い事でも口にしたかな、それとも敬語を間違えたかな、と心配が顔に出そうなのを俺は必死に堪えた。そんな俺を見て山口先輩はニカッと笑って、

「うん、いい返事だ！頼んだよ、茶道部の新入り君！」

と先輩は俺の肩をバンバン叩いて、後ろを向いて高笑いをしながら元いた場所に戻る。叩かれた肩を痛みを拡散させようと軽く擦りながら、俺は山口先輩の接し方が、県大会を最後に引退してしまった元・主将の姿と重なり、俺はひとり心の中で寂寥を感じていた。山口先輩から、茶道部員全員に対して今日のスケジュールと今週のスケジュールが報告される。今日は、来たるべきお茶会に向けてこの部屋の掃除をするそうで、重たい荷物の運搬・管理は俺がすることが内定していたようである。これって受難だよなあ…

……
立ち振る舞いの作法で座り方の稽古なう。

「遠野、また座るときに片足を引いてるよ！もう一度！」
「はい！」

…立ち振る舞いの作法で立ち方の稽古なう。

「立ち方が違う、やり直し！」

「はい、もう一度お願いします」

…は、半東のけ、稽古中なう…。

「今日は半東（お茶を点てる人の補佐役）の稽古をするよ！しっかり見てるんだよっ！」

「よろしくお願いします！」

山口先輩のつける稽古は、運動部も顔負けの厳しいものだった。それに俺は、オフシーズンとはいえ水泳部も練習があったのでそちらも気を抜かず打ち込み、昼休みや授業の合間を縫ってこれらの厳しい稽古をこなしていた。この時期の俺は、授業中に意識がほとんど無かった。ほとんどは寝ているか、たまに保健室に行くという名目で茶道部に顔を出していたくらいである。それでもハードスケジュールを除けば、まるで新人研修の時に受けたビジネスマナー研修みたいだ、と俺は前世の入社したばかりの自分を思い出しながら結構楽しんでた。ひたすら稽古の内容を反復し、先輩の注意を受けて適宜修正し、正しい振る舞い方を身につけていく。スキルアップ

のチャンスだと思えば、新人研修の何倍も厳しい稽古も楽しさが更に増した。

茶道部の稽古に水泳部の練習を黙々とこなして気がついたら、夏休みであった8月が終わり、さらに新学期が始まる9月もあつという間に過ぎてしまった。山口先輩の厳しい稽古の甲斐があつてか、俺は他の部員以上に茶道における作法を習得することが出来た。むしろこの作法が日常生活レベルに浸透してしまつたくらいで、水泳部部員からは、お前：何かお上品になつてねえか？、と苦笑いを浮かべて言われる程である。知子や響も、お上品になつた俺に対して何も言わないが苦笑いは隠せなかった。：せめて、レースに出るときまでにある程度修正しよう。

これは後で聞いた話だが、山口先輩は俺だけに厳しい稽古を課していた。他の部員では気が引けるようなものでも、俺なら出来ると踏んだからだそうだ。それに俺が掛け持ち部員つてことで鼻窟を受ける、足手まといになつたら、他の侵入部員に示しがつかないからつてことも視野に入れていたらしい。若年ながらおぞましいリーダーシップ性よ。まあ、そのおかげで俺も今年度初の茶会では恥を掻かずは無事幕を下ろすことが出来たから、これで良かったのだろう。後片付けで、茶入れの種類を分けずに棚に入れてしまつて先輩に怒られたのを除けば、この稽古もいい思い出である。

……

「ああ、今日も終わった」

陸トレ上がりの心地よい疲れを感じる身体を使って自転車のペダルを漕ぐ。本日は知子と響はスクールのスイム練があるため、陸トレは俺だけ参加して今自転車を漕いでいるのは俺一人だ。

俺を乗せる自転車は帰路に一直線ではなく、輝日東と輝日南の間にある公園に進路を取っていた。茶道部の稽古もピークを過ぎ、水泳部の新人戦に向けてテーパー（試合直前に練習強度を落とす、レースの動作の確認をするなど、レース用の身体に仕上げる段階）の段階に入ったので、少し気分転換をしようと思った。それに、今までの忙しさの中で考えることを止めていたあの事について考えておきたくなったのだ。

知子を抱きしめてしまった件である。あの一件以来、どうも知子との会話がぎこちない。俺の顔を見るたびに顔を赤くして離れていくし、響にも、何かあったの？と心配される始末だ。このままでは俺達の関係が崩れかねない。それに俺自身、抱きしめたことに関してどういふ精神状態だったのか分からなかったため、その辺りの整理をしたいと思ったのだ。

（もしかして俺はあいつを…、それは違う。駄目だ、未だあいつは13歳、そういう趣味は俺には無いはず…）

仮定を頭の中から振り払いながら、キィ、とブレーキを使って自転車の動きを止める。自転車から腰を上げて降り、自転車置き場に停めて鍵を掛ける。かごに乗せていた学生鞆を手に、階段を上がる。階段を上がった先には、街と海が一面に広がる景色と海に沈んでいく夕陽が見えた。10年以上後に星乃結美がお気に入りだと相原に語った光景が、今から三年後に橋純一が待ちぼうけを喰らって失意の中で眺めていた風景が広がっていたのである。一度来てみたかった、と俺は思っていた。

とりあえず、座る場所を探すことにした。

二人がけのベンチという座れる場所を見つけたが、そこには先客がいた。制服を着た綺麗な女子生徒が片側に座っていたのだ。制服はアマガミの原作から、輝日東高校の制服だと見て間違いない。太陽が落ちるのも早くなってきたし、こんな時間まで一人で何をしているんだ、という疑問が湧いてくる。まずは一言断ってから座るところにした。

「あの、隣に座ってもいいでしょうか」
「…」

その女子高校生から返事は無かった。何も無いように無表情で虚ろな瞳に夕陽を映していた。そう、彼女はまるで俺が見えていない、いや周りには何も無いような様子であった。それでも断らなければならぬ、と俺は思い彼女に再び声を掛ける。

「あの！」
「あつ…」

と俺の少し大きめの声で彼女に話しかけると、彼女ははっとした表情に蚊が鳴くくらい小さい声を発した。そして、俺の方に顔を向ける彼女。急に彼女の顔面が笑顔に形作られていく。

「も〜、君の声でお姉さんビックリしちゃったよ」

「あ、すみません、びつくりさせてしまつて」
「もう気にしてないよっ。ところで君はお姉さんに何か用なのかな？」

さっきの虚ろな顔からは想像も出来ない、眩しい笑顔に快活な声が俺に投げかけられる。そのギャップにたじろぎながらも、俺は横に座つてもいいですか、と彼女に許可を求める。彼女は、どうぞどうぞ、とベンチに座るよう促す。俺は、失礼します、と彼女と少し距離を取つて座る。

「君は、中学生？お名前は？」

「遠野拓と申します、輝日南中学の1年です」

「遠野くん、こちらも自己紹介しないとね。私は輝日東高校の1年生、絢辻縁です」

(え？絢辻縁つて、あの絢辻詞の姉…だよな？原作の少し電波が入っているけど明るいイメージとは、最初正反対だから全然分らなかったぞ。…どういうことだ?)

原作の絢辻姉とさっきの絢辻姉の様子があまりに離れていたのそのギャップ戸惑う俺であった。

(次回へ続く)

第十二話：秋の到来・出会いの秋（後書き）

ご一読ありがとうございました。

少し知子と響から離れて、原作に近づいていくということと彼女達は話の根幹に参加していません。

書いていて、次第に原作に近づいていくなあ、というものを自分で感じます。

それと皆様の応援、ありがとうございます！

この場を借りて御礼申し上げます！

では！

第十三話：波乱の秋

いま、俺の目の前には若かりし絢辻縁がいる。

でも、原作の絢辻姉とさっきの絢辻姉の様子があまりに離れていたのでそのギャップに戸惑いを隠せない。ともあれ、まずは当たり前障りの無い話をしてみないと。

「どうして、こんな時間まで一人でこの公園に？」

「そうね、テストの結果が悪くて家に帰りたくないから、かな？」

「テスト？」

「そう、日本史の小テスト だから悪いテストの結果を見て落ち込んでる気分を変えるためにここに来たの。この公園で日の入りのきれいな光景を見ていると、心が落ち着くの」

「…家に何か問題でもあるんですか」

「ん、どうなのかしら」

所々明言を避けて、はぐらかす。くすくす笑いながら、彼女は言葉が続ける。

「私の両親がちょくつと難しいの。お父さんは勉強して立派な大学に入りなさいってうるさいし、お母さんは私のテストの得点にケチをつけたりね、まったくつ」

頬を少し膨らませて怒ったような表情を作り、テンション高めに話す。端から聞けば、教育熱心な両親に対して子どもっぽい文句を言っている娘の言うことにしか聞こえないだろう。しかし、絢辻家の内情を知る俺にとって、その話は昼ドラマも尻尾を巻いて逃げるほどの暗い重たい話であるように思えた。

先ほどの虚ろな瞳に無表情な顔と今の会話とを整合させて、俺は1つの可能性を考えた。彼女も実は、妹と同じようにエリート意識の強い父に一つの見方しか出来ない母に苦しんでいたのではないだろうか。そして、何も知らない、という絢辻詞の評価は実は一面的で、知らない振りをするのが彼女の心を守る防衛行動ではなかつ

たのか。

「何かクラブ活動とかしているんですか？」

「中学・高校でテニス部に入ったんだけど、どちらも辞めちゃった。大好きだったんだけど、勉強が大変だったし」

彼女は困ったような笑顔を俺に向ける。つまり両親に退部を強要させられたのか、と俺は同情と彼女とその妹の両親に対して怒りを禁じえなかった。

「子どもに親のエゴを押し付けると、最低の親だな…。子どもをいつまでも自分達の操り人形だとも思っているのか!？」

「…操り人形…、私が操り人形…、最低の親」

と俺は思わず口にしてしまった。彼女は笑顔が崩れ始め、手で自分の顔を覆う。口に出して数秒後、俺ははっとする。

(しまった、俺が立てた可能性が正しいと思っただけで不謹慎な発言をしてしまった…。気を悪くさせてしまった…。馬鹿なことを)

と、後悔したときにはもう遅かった。俺は自分の欠点を呪うが、そんなことで言葉を発してしまった現実は変わらない。彼女は俺の「操り人形」という言葉に対して過剰に反応していた。俺は、その様子から目を話さず、罵声を浴びることを覚悟しながら彼女の言葉を

待つ。

更なる罵倒は来なかった。そのかわり、先ほどの笑顔振りまいていた彼女とは一変して、先ほどと同じ、虚ろな疲れきった無表情な顔を俺に向ける。俺はその変化に戸惑いながらも、さらに一つの仮説を立てた。あの家庭に囲まれているうちに、原作で見せたあの笑顔・快活な絢辻縁は実は妹同様の作られたもので、こちらの顔が誰にも見せていなかった本質の部分ではないか、と。

「操り人形…、私は絢辻の家の操り人形…。…そうね、あなたの言うとおり、私は人形。そしてあの人たちは、最低の親…まったくその通りよ」

さっきの陽気な子どものような姿とは正反対の、無表情で大人びて自嘲気味の声。

「部活でテニスをやっていた時は本当に楽しかった。部の中で自分の居場所を見つけた、そう思った。頑張って大会で良い結果を出した。けど、絢辻の家はあたしのテニスを認めてくれなかった。あの人たちにはそんなもの社会で何の役に立つ、と一蹴されたわ。辞めたくない、と主張したけど親が勝手に退部させてた…。学校にもあの人たちに干渉されるなんてね。あたしの居場所だったのに！ずっと求めていた世界だったのに！！」

口調は次第に口惜しさや忌々しさが込められて行く。表情は鬼の仮面を着けたみたいだった。そして、その内容は原作で絢辻詞が橘に聞かせたものよりもずっと心を鬱屈させるもので、耳を覆いたく

なる。

(しかし、俺の不用意な発言でこういう流れになってしまったんだ。最後まで聞かねばなるまい)

俺は彼女から視線をそらさず、紡がれる言葉を待つ。彼女は、一息ついて興奮した様子を

「中学でも高校でも、あたしは学年一位を保って勉強してきた。あたしが犠牲になれば、あんな家でも家族でいられる、いつかみんな幸せになると思った。確かにあの人は、あたしを認めてくれた。」

『さすが絢辻の娘だ』、とね

「……」

何も言えない。前世であっても、今世であっても幸せな家族に囲まれた俺が口を挟む資格がない気がしたのだ。俺は話を聞き続けることしか出来ない。

「……でも、詞ちゃん、私の妹は今まで以上にあの人たちから叱責されるようになった。「縁は凄いのにお前ときたら」「詞、お姉ちゃんはこうなのに」と、私と比較対象にした言葉を使って。詞ちゃんは前よりも無口になって、あたしを避けるようになった。憎んでいるのね、『絢辻家の娘』を演じるあたしを」

「……」

「あたしは、自分のせいで詞ちゃんが虐められるなんて、そう思うと耐えられない。きつと、あたしが先にどこかで壊れてしまう。そうしたら、きつとあたしは『絢辻の娘』としての役割を担えず、詞ちゃんにあたしの役割を押し付けることになる。それだけが心配なの」

（壊れてしまった結果が、原作のアレか。スポーツドリンクを犬に無理やり飲ませたり、普通なら年齢的に悪いことだと考えてしないことを平気でしていたからな。これではいけない、何か打開策は無いのだろうか…）

陰鬱な雰囲気打破するべく、俺は一つの案を考えてみた。妹を救うことで、姉のこの人を救うという芋づる式の案である。原作知識だけに頼った突発的な案だが、彼女の絶望や悲しみを聞いていたら、それでも提案してみようと思った。

「…そのときは俺が、絢辻先輩の妹さんを救って見せますよ。だから、妹さんを俺が目指す輝日東高校に入学させてください」
「…あなたが、詞ちゃんを救う、というの？」

俺の言葉に、絢辻先輩が訝しげに尋ねる。俺ではなく、主人公の橋がメインアクターとしてその役割を担うだろうが、そこに至るまでのマネージャーとしての根回しは残り4・5年もあれば俺でも出来るはずだ。…原作では出来ているんだ、可能性が無い訳ではない。俺はしっかり絢辻先輩の目を見て答える。

「あなた、自分から苦勞を背負っていく損な性格ね」

「よく、友人から言われます」

「…いいわ、あたしはあなたの言葉に乗って見せましよう。その言葉が真であるかどうか、見届けさせてもらうわ。あなた、ポケベルは持つてる？」

「え？ええ」

俺は学ランの右ポケットに入れていたポケベル端末を取り出す。携帯電話世代の俺にとって、この古い通信手段は使いづらく、親以外との連絡手段としては使っていなかったが、今回初めて家族以外との連絡手段になった。

「何かあったら、私のポケベルに連絡してね。あたしの方も、何かあればそこに連絡するから。…わたしの、妹をよろしくね」

と、いい絢辻先輩はいつもの笑顔（一瞬だけ物凄く綺麗に見えたのは気のせいだったのだろうか）を見せて帰路に着く。4年・5年後が勝負：というわけか。物語に深く関わってしまい、雰囲気ぶち壊しの原作ブレイカーとなってしまうが、それはこの世界にとつていいものなのだろうか。少なくとも表立ってやるわけにはいかないから、秘密裏にプロジェクトを進めていこう。

絢辻先輩の姿が見えなくなった後、はあ、と俺は息をつく。

（考えたかったことを消化できずに更に考え事が増えてしまった。次第に考え事のタスクが処理できなくなっていくぞ。こりゃ、人生

を楽しむというかは、人を救って学生生活が終わるかもしれないな。
)

俺は、ベンチをベッド代わりに横になる。絢辻先輩のこともあるし、何故知子を抱きしめたかについても考えなければならぬし、新人戦に向けてのスケジュールを組まな…

………

………

…

⋮

「わん！」

⋮

「わんわん！」

⋮ わんわんお？

「わん！」

「うおっ！」

腹部に感じる重みにぱつと眼が覚める。眠っていたのか、今何時だ？それよりもいま俺の腹に乗っているものは何だ？乗っている物を触って撫でてみる。もふもふ、もふもふ。寝ぼけ眼がしっかりしていくにつれて、腹の上のものがしっかり見えてくる。

(…犬?)

わん！、とその微妙そうな顔をした犬は俺のほうを見て吠える。クリツとした瞳は俺に愛らしさを感じさせ、頭を撫でる。

「お前、どつから来たんだ？首輪があるならご主人がいるんだろ？」
「わん！」

腹の上からどこうとしない、このわんこを俺は無碍にも出来ず、仕方ないのでその姿勢で遊んでやることにした。

「こゝら、ジョン！見つけたわよ！」

その声に反応し、わんこは声の方向を向く。俺もベンチから頭だけを起こすと、黒のカチューシャをつけた私服の美少女がこちらに近づいてくるのが見える。やっと見つけた、と俺の腹のわんこを抱き上げて頭を撫でる。

(このわんこのご主人か、それにしても可愛らしい子だな。輝日南中にはいないから他校の中学、もしくは高校生かもしれない)

「おりよ？そういえばジョン、この人はだあれ？」
「犬に聞くんかい」

とツツコミを入れる。ジョン君は、少女に抱えられた状態で「わん」と一言吠えた。少女が、「そうか、ワン、くんか。中国の人みたいなお名前だね。」と言うので、「違う」ときっぱり答える。少女は「だよねえ」と言っ、クスクス笑っていたが俺の制服を見て次のように尋ねる。

「ねね！ひよつとして輝日南中の人？」

「ええと、そうですか」

先輩かもしれない、と思っ、敬語に切り替える。

「私、今度輝日南中に転入するの！ねえ、どんな学校か、教えてくれないかな？」

「分かりました、だから少し落ち着いてください」

顔が近い、あとテンションを抑えてくれ、どうしたらいいか分からない、と俺は思う。俺は自分の通う中学について少女に説明する。教えるといつても、一般事項を説明しても面白みが無いので、俺の輝日南中での生活について説明する。茶道のこと、水泳のこと、水泳で県大会まで進んだこと、茶道でお茶会があったこと、オリエンテーションがあったこと、交友関係などを話す。少女は表情を百面相のように変え、「わお！」「オーキードーキー！」と相槌を打つてうなづいていた。

「わお！なにそれ、すつごく楽しそう！」
「まあ、これは私の一例なんですが」

胸元で手をぎゅつと握って、目をきらっきらに輝かせて俺を見る。さつきまで絢辻先輩と重たい話をしていたから、俺はこのテンションの差に戸惑った。それでも、少女の雰囲気は、湿っぽかった俺の気分を少し晴れやかにしてくれた。

「もし学校で会ったら、私とお話してくれる？」
「いいですよ、何かあったら呼んでください」
「ふふ、ありがと あ、ポケベル持つてるの？番号教えてよ！」

俺のポケットから姿を覗かせるポケベル君に少女が気がつく。俺は彼女と番号の交換を行い、ポケベル君は本日2人目の通信手段となることが決定した。

階段の下の方から「はるか、そろそろ行くぞ」「姉ちゃん行くよ？」と声が聞こえる。彼女は、分かったと、と大きな声で返す。

(…はるか?)
「お兄ちゃんと弟が呼んでるから、私もう行くね。じゃあ、学校で会いましょう！」
「え？あ、はい」

ばいばい！、と手を大きく振ってわんこのジョン君を連れて階段を降りていく。そして姿が見えなくなる。俺意外誰もいなくなつた公園から見る光景は、夕陽は既に沈みきつてすっかり暗くなり、秋風の寒さと日暮れの暗がり、が物悲しさを誘っていた。

「…帰るか」

結局考え事のタスクを増やしてしまった俺は、ベンチから腰を上げ、自転車置き場まで足を運んで鍵を外して自転車に乗る。そのままペダルを漕いで家路を急ぐ。

（タスクを減らすどころか増やすだなんて、何て仕事をしているんだ俺は。頭の中が一杯で考えもまとまらないし。…しょうがねえなあ！ガス抜きのためにローアングル探偵団と水着美女の今月号を本屋まで買いに行くか！橘や梅原あたりを誘ったら喜びそうだしな！そうと決まったら本屋にダッシュだ！）

俺は猛スピードで本屋に向かい、お宝本を買いに行った。制服を着ていたことに後で気がつき焦つたものの、馴染みの店員のおっちゃんが見逃してくれた（さらにはおススメのお宝本もこっそりサービスしてくれた）ので俺は満足げに本屋から出て家路に着いた。

.....

翌日、教室に入ると教室は何やら騒然としていた。

「今日ウチのクラスに転入生が入ってくるんだって！しかもメツチヤカワイイらしいぞ！」

「職員室で見かけたけど、彼女すっごく可愛かったぞ！仲良くしてえな！」

（うちに転入生…、ま、まさかな）

チャイムが鳴り、クラスメートはドタバタと席に着席する。少し経って、教室に担任が入り、後ろから転校生が着いてくる。男子は「すっげえカワイイ！」と各々口に出し、釘付けの様子であり、女子も同じく愛らしい様子に視線をそらせないようである。俺は、顔を挙げてその予感が真か疑か確かめた。：言わずもがな、俺の予感
は正解だった。

「本日からクラスの一員となる、森島はるかさんだ。仲良くしてあげてください」

「森島はるかです！みんな、よろしくね〜！」

(やっぱりかぁー!!)

昨日公園で、はるか、という名前を聞いた瞬間。あの美少女が森島はるかだという予感があった、すると俺と同年になり、転校生…、まさかなとは思ったんだが…

「あゝ！昨日のお昼寝くんだ〜っ！へえ〜君ってここの教室だったんだ！」

と、森島はるか嬉しそうに俺を指差す。周りの野郎共が「また遠野の野郎か！」「川田さんや塚原さんだけに飽き足らず、美少女転校生までも既に…」とあちらこちらで騒ぎ出す。飛羽や夕月は「こいつは面白くなってきた」みたいな玩具を見つけた幼児みたいな顔で俺を見てくる。

森島はるかの前席は俺の前席の空いている席になった。彼女は鼻歌混じりにその席に座り、後ろを向いて手を差し出す。…お手？いや、Shake hands（握手）…だろうか。

「よろしくね、お昼寝くんっ」

「ハハハ…、こちらこそよろしく、森島さん」

俺は彼女の小さな手を恐る恐る取り、握る。眩くて直視すると赤面してしまいそうな笑顔、横を向けば野郎共の嫉妬の視線、さらには女子共の好奇の視線。

可視化されないあらゆる方向のベクトルに晒され、俺は再び濁いた笑いを出して、はあ、と小さく溜息をついた。

(次回へ続く)

第十三話：波乱の秋（後書き）

ご一読ありがとうございます。

アマガミヒロインズから誰か出せないか、として考えていたところ、ラプリー先輩を投下したらどうなるか、を思い書いてみました。

今回も楽しんで頂けると幸いです。

それでは！

第十四話：ラブリー強襲

「森島はるかには美少女である」

彼女を見たら、9割以上の同世代の人間がこのような評価を出すだろう。

そして、彼女の内面の美しさ・無邪気さに接したならば、「森島はるかには心も身体も美しい少女である」と神格化された評価にグレードアップされることも想像に難くない。

思春期を迎えた中学生とは、自分に足りない何かを持つ異性に対して憧れや恋心を自覚できないうちに抱えてしまってお年頃なのである。この理論を思春期を迎えた男子に当てはめると、顔も身体付きも性格も絶世の美少女転校生を前にしたら、誰でも彼女とお知り合いになりたい、あわよくば好きになってもらいたい、という願望を多かれ少なかれ持つだろう。

しかし、この美少女が、既に自分以外の男と仲良くなっているのを目の前で見たらどうだろうか。少なくとも、「あの子達は仲睦まじいな」という大人の昔を懐かしむような感情は湧き上がってこないだろう。相手の女の子の気持ちや自分と同じにならず、苦しんだ拳句、嫉妬や羨望と言う黒い感情が浮かび上がってくる自分に嫌悪する。それが「失恋」という若い頃の勲章の味、そして成長の種なのである。

そして、「失恋」を経験した者達の黒い感情を凝縮した視線に晒される、仲睦まじくしている（と判断される）男はどうなるのであるのか。恐らく、動物としての本能が「こいつらに近づくと命を取られる」という直感がアラームとなって警戒するようになるのではないか。

少なくとも俺、遠野拓は森島はるかファンクラブと化した我がクラスの男子から、アラート警報を常に実感していたことをここで報告する。

「遠野、森島さんに校内を案内してあげろ」
「え？」

帰りのホームルームで担任に下された俺への突然の指令。周囲を見渡し、クラスの男子の無表情と空気を察知し、悪寒とアラート警報が身体の中に走る。「また遠野か」「あの野郎：俺達の憧れも全て持っていきやがる…」「粛清してやる…」と俺からすれば身の毛もよだつ話をヒソヒソ聞こえる。それに、この教室内の空気の冷たさ！まるで、教室の中の空気が冷気を帯びて固まったみたいで息苦しさとお腹の芯から冷えてくるみたいだ。身の安全を守るべく、

俺は椅子から腰を上げて猛然と（というより、きつと必死の形相だった）のである。担任に対して抗議を始めた。

「ちょっと待ってください！なんで私なんですか！？」

「お前と森島さんが仲良さそうだと思っただからだ、以上」

「委員長の井上さんもいるでしょう！？同じ女子で話も弾みますよ！」

「井上（学級委員の名前）は今日は文化祭の会議に参加しなければいかん。頼める相手としてお前が適任だ、以上」

「私だつて新人戦のレース調整が……」

「県大会決勝のエースとはいえ、そんな理由で臍履もできん。諦めて案内しろ、以上」

「私以外にも適任者が……」

「お前は、授業の出席率も態度も悪い。定期テストでトップクラスの実力だから相殺されているが、ここで内心稼いでおかないと俺は構わないが他の先生から睨まれる事になるぞ」

それを言われると、ぐうの音もでない。授業も「最低限の出席率で図書館で勉強すりゃあいいや」と言っただけでサボりまくっており、年齢が似たクラスの連中とかとは表面上うまくやれるようにはなかった。しかし、素行の悪さで先生方から睨まれるのは小学校の頃から変わらず、中学でも多くの先生から優秀だが素行に問題のある生徒としてマークされている。

一度、授業中に大恥を掻かせた数学教諭は俺の家に対して電話を掛けてきやがった。父さんによると、「お宅の息子さんが授業に出ないんで困っているんですよ、どのように育てたのですか！」と電話越しで怒鳴られたそう。あのハゲ頭を殴り飛ばしたくなかったが、両親は暴力は駄目だと強く諭し、「自分で責任を持って中学生生活を楽

しんでくれ」とだけ言ってくれた。良い両親であった、精神的には息子ではないことが俺に対して自責の念を生ませる。

「じゃあ、遠野に森島さんの案内をしてもらおうことでけ」

「いや、納得できない！」

正直ロジックもクソも無かったが口だけ出してみた。「ここで折れたら俺の命が終わるかも知れない」と俺の本能が騒いでいて無意識に出た言葉だった。周囲には俺に対する好奇、嫉妬、羨望など色々混じった黒い視線が俺の身体に密に差し込まれる。恐らく、視線で人を殺すことは物理的に無理だが、この事態の悪化が俺を殺す方面に状況が転ぶことは考えられない話ではない。駄目だ、無意識のうちと言ってしまったから何も浮かんでこない。何か起死回生の言葉は無いのか!?!...

クイクイツ…クイクイツ…

(…?何だ?)

ふと考え込んでいた時に右腕に微小な揺れを感じて考えを中断する。揺れを感じる点に視点を移すと、小さな可愛らしい手が自分の制服の右袖を引っ張っていることに気が付く。その可愛らしい手を辿り視線を手から腕へ、腕から肩と移していくと一つ前の席の女の子の顔が見えた。ウルウルした瞳で俺を見て、しょんぼりする子犬のような森島の顔が。

「遠野君、私の案内：嫌なの？それとも私が嫌いなのか」
「うっ…」

私を嫌いにならないで、と訴えるような顔と声で言われて、俺は担任に対する反論を挙げられなくなってしまった。この表情から放たれる森島のカマツテ光線は、直接攻撃を受けたもののみ分かる、男の心の障壁をたやすくマインドクラッシュできるほどの超弩級の破壊力を持つことが。

（案内が嫌でも無いし、お前が嫌いでもない。むしろお前となら友達になりたいくらいだ。そんな子犬が泣きそうな目で俺を見ないでくれ）

森島の目から放たれる「捨てないで」光線に耐え切れず、俺は視線を逸らす。教室を見渡すことにするが、周囲を見て俺は愕然とする。男子生徒から「憧れの美少女を奪った全男子の敵を嫉妬の炎で焼き尽くしてやる」「あまつさえ森島さんの校内案内だと…許せん！」という俺を視線で呪い殺そうとする気迫がビンビン感じられるのだ。それに加えて「森島さんを泣かせたら…後は分かっているだろうな」という脅迫めいた意思も伝わってくる。

女子生徒達も俺に対する同情やら軽蔑、森島に対する羨望や嫉妬の念は無く、俺と森島の間を関係を推測する話をしているらしい。漏れ聞こえる言葉では、何やら少女マンガのような展開が繰り広げられているようだが、そんなことは勿論ない。幼いことの約束を果たすために転校したなんて設定はない。

俺の隣の夕月は「面白そうな事見つけた」というニヤケ顔を隠さずに俺のこの状況を楽しんでいるようだ。

飛羽の方も俺に対して手を合わせて「ご愁傷様」と一言小さく呟く。何か変な呪いが掛けられていないかと心配になる。

「わ…分かりました。案内の任、拝命します」

「よし、今日案内してやれ。顧問には俺から言っておく」

俺は観念とばかりに先生に承諾の意思を伝える。俺みたいな女性に弱いタイプがハニートラップなどに引っ掛かるタイプなのである。担任は俺の承諾に満足したのか一言だけ俺に言っと、「じゃあ今日はこれにて解散」と扉を開けて教室からさっさと出て行く。俺の頭では、扉の閉まる音が闇のゲーム開始のゴングに感じられた。

ガラ…

担任教師が教室から身体を出し、扉を閉め始める。まずい…

ガラガラ…

等加速で閉まっていく扉…

ガララ…トン！

（カーン！）という音が頭の中に鳴り響いた。一斉にクラスの男子達はバオハザードのゾンビみたく、奇声・罵声で叫びながら俺を襲い掛かってきた。

（俺が何をした！確かに女の子の知り合いは人並みにいるけど、腐れ縁だったりして女の子と言うよりも親友や悪友って感じだぞ！そんなん何処にでも一人はいるだろ！）

筆者を含めて「そんな羨ましいシチュエーションねえよ」という叫びが聞こえた気がするが、この状況から逃げ出す事が先決なので無視することにする。この理性のかけらも無くなったコイツ達の動きを予め読んでいた。直線的に俺に対して襲い掛かる魔の手が届く前に、俺は森島の手を掴んで教室からの脱出に成功した。

「え、え、なに？どうしたの？」

「いいから逃げるぞ、案内も兼ねてな」

何がなんだか分からない様子の森島を引き連れ、俺は校舎内であいつらを撒くべく全速力でその場を離れた。途中別学年を受け持つ知らない先生に「廊下は走らない！」と注意されたが、規則より生命の方が大事だと思って無視した。

「全男子の敵め、許さん！」

「隣のクラスの川田さんに塚原さんだけに飽き足らず…!!」

「血祭りじゃ！血祭りに挙げろ！」

「汚い！さすが遠野汚い！」

という声が廊下中で響き渡る。おそらく他のクラスでは何事だと困

惑した事態になっているであろう。鬼ごっことかくれんぼを平行しつつ、校内案内を行うというミッションが開始された。

……

放課後の学校。グラウンドからは部活動に力を注ぐ学生達の声。校舎からは吹奏楽部の奏でるたどたどしいハーモニーや演劇部の発声練習が聞こえてくる。

そして俺の前にある剣道場からは竹刀が防具に当たる音に部員の気合の声が聞こえてくる。俺は剣道場の入り口前の柱にもたれて、全速力で走ったために乱れた呼吸を整えようとしていた。目の前には、全力疾走で俺の息が上がる原因を作り上げた美少女が、満面の笑顔で空に向かって「んっ」と言いながら背中を伸ばしていた。

「鬼ごっこみたいで面白かった！」

森島は先ほどの騒動をクラスの遊戯だと思っていたのだろうか。面白さにたいへん満足しました、との意思を俺に表情と言葉で伝えた。俺は疲れきっていて、「そ、それは良かったな」と息も絶え絶えに回答することしかできなかった。

「ねえねえ。ところで、みんなどうして走り出してきたのかな？」

森島が自分の顎に人差し指を当てて考え始める。俺はそんな森島の考えている様子を見て、あんたの俺に対する言動が原因だよ！、という回答が頭に浮かんだが、絶え絶えの息を整えるのに精いっぱいではない。

森島は考えるのに飽きたのか、「ま、いつか！」と軽い調子で言っつて、剣道場付近の花壇の観察に乗り出したようだ。視線はパンジー、コスモス、薔蘭、…と移って「このお花、とっても可愛い！あ、これも！」と瞳をキラキラさせている。俺は、そんな様子の森島を見て、前世のある作品のキャラクターが浮かび、一つの懸念が生じた。

(花壇の花を、丸ごとお持ち帰りするようなことはしないだろうな…?)

そして一通り花を見渡し、それも飽きたのか、花壇から少し離れたコンクリート製の平坦な床に移動する。そこで右足のつま先を立て、「かいて〜ん！」と言いながらその場で回り始める。スカートも遠心力で浮かび太股が更に露になっっていくのを見て、俺はビツクリして余計に呼吸が乱れる。俺のあわてる気持ちを知らない森島は二回・三回くるくる回って、両手をビシツと体操選手のようなポーズを決める。すごいだろ！、という気持ち伝わってきそうなドヤ顔をしながら俺を見る。感想でも求めているんだろうか。

そのままの状態で少々時間が経過した。俺は、そんなドヤ顔で俺を見ている森島を見続けているうちに思わず笑いがこらえず、吹いてしまった。森島は、「え、なになに？」と言いながら周りをキョロキョロ見渡す。自分の行動のおかしさに気がついていない様子であり、自分のそばに何か面白いものがあったてそれを探しているみたいだった。俺は、その仕草が余計におかしく感じられて、笑いが止まらなくなってしまった。笑いと呼吸の乱れで、口から咳と笑いが入り混じって苦しかった。

（本当にコイツは無邪気なんだな。この無邪気さが、周りの人から好感を持たれて集まってくるんだろうな）

「むむむ、何よ〜」

森島は、俺が笑っている原因が分からない様子で、腰に手を当てて不満そうに言った。頬が膨らんで眉が少しだけしかめている。

（ちょっと笑いすぎたか。怒らせたかな？）

と思った俺は、笑いを抑えようと咳払いをして、平然とした表情を作ろうとした。

「いや、何でもない。」

と平然とした声と表情を作って手を合わせて森島に謝った。ただツボに入ってしまったのか、顔が笑ったままだったので、地面を向いたままであつた。

「若さっていいな、って思ってさ」

「も、自分だって若いじゃない！」

外見の年齢は同じでも、俺は一度社会に出た身で、森島みたいなあんな無邪気な仕草は出来ない。大人に近づいて、社会や世界の汚いものをダイレクトに見続けていたら、無邪気さは残らず枯れて無くなってしまう。森島の明るさや無垢さ、というのは大人の俺からすれば、目も眩むような若々しく美しい宝石みたいなものだ。これから先も、無くしてもらってほしくない。スキBADのような無垢さや明るさを捨ててしまった、あの「森島はるか」にどうかならないでほしい。

「それで遠野君。次はどこに連れて行ってくれるのかな？」

（やべ、逃げるのに精一杯で全然考えてなかった）

俺は、今まで回った（退避した）場所を思い返す。図書室は行った、…森島が動物図鑑を見て和んでいた時を襲われたから良く覚えている。茶道室…、夕月と飛羽が裏切りやがって嵌められそうになった。音楽室…、吹奏楽の演奏を廊下で聞いていたら両側から挟み

込まれそうになった。今まで回った部屋を追いかけっこの苦労ともにげんなりとしながら思い出し、おそらく屋内の全ての部屋を制覇できたのではないのだろうか？残るは屋外と言うことで、

「じゃあ、剣道場で剣道部の練習でも見学するか？」

「わお！剣道、武士、サムライね！なんだか面白そう！楽しみだな
〜！」

「そこまで期待されても困るんだがな」

許可を貰ってくるからちょっと待ってろ、と一言。森島は「待ってるよ〜」と言って手を振る。まだまだ、案内は半分が過ぎたばかりである。

（次回へ続く）

第十四話：ラブリー強襲（後書き）

ご一読ありがとうございます。

実生活が大変で、なかなか時間を取ることができませんでした。

この作品を楽しみにして下さっている方には、

お待たせしてしまい本当に申し訳ございませんでした。

これからも、お付き合いしていただけるお話になっているのかな。
そうだったら、いいな。

第十五話：ラブリー入部

剣道部の練習を見学しようとして許可を求めた俺であったが、残念ながら断念せざるを得なかった。理由は簡単で、俺と共に工口本を読んでいた徹が、俺と森島の間係を勘違いして勝手に暴走したからである。

徹は、現在剣道部に所属している期待の変人、もとい新人である。何故コイツが剣道部に入部してしまったかは、俺が持ってきたお宝本の一つに原因があった。小六の頃、俺が学校に持ち込んだ「月刊和服美人」に道着を着た妙な色気を持つお姉さんにコイツはがつり惹かれてしまい、以来道着を着て歩くお姉さんがマイブームとなってしまうた。剣道部の道着が俺のマイブームに一致する、というインスピレーションが働いて気がついたら入部届けを出してしまつたそうだ。部活動を真剣に決めたお兄さん・お姉さん方に土下座して謝つたほうがいいのでは、と思ってしまうような動機である。そんなちゃらんぼらん徹も、今では引退された三年の先輩方の

影響で、自身の剣道を続けることへの達成感を感じ続けたいという動機を持って自主的に稽古を続けるようになった。結果として、身体も一回り以上大きくなり、精神としても子どもから少し脱却したような感想を持てた。

俺は、そんな変わった徹の様子を見て、

（へえ、人間半年揉まれれば変わるものだな）

と感心したものだ。精神的な成長の著しさを肉体の成長は、この若い時期だからこそ見られる特徴の一つだな。羨ましいものだ。

しかしその後の、待ちわびて道場の中に入ってきた森島の乱入が悪かった。幾分かはこの日も真面目になったが、女の子の話や女の子を目の前になると、橘や梅原もびっくりの紳士振りを見せてくれるのだ。まして美人かつ転校生の森島はるかである。この紳士が逃す訳がない。

だが、徹の執拗な質問攻めで森島が困っていたようで、俺の背中に隠れて助けを求める姿を見せてしまったことがいけなかった。そういうえば、森島は小学生の頃にスキの裏返しで男の子に虐められたって設定があっただけな。どうやら、あまりこういう突っ込みには苦手意識があるのかな。徹よ、お前はまだまだ若い、大人になる修行がまだまだ足らぬわ。

「女にもてる奴は死ねばいい」が口癖であったコイツは、『森島に背中を貸す俺 美人とイチチャイチャする男の敵』とでも解釈したのだろうか、俺に呪怨の声を何度も唱えながら竹刀を持って迫ってきた。こうなると、こいつは聞く耳を持たなくなるので俺は「お邪魔しましたー！」と大きな声で俺は森島の手を牽いて道場を去ることになった。

そういう経緯もあり、俺と森島は輝日南中プールの中の更衣室からプールへ出る渡りに隠れていた。プールの中に入ってこなければ誰にも見つからないはずのこの場所が身を潜めるのに最適ではないか、そう思ったのだ。

徹にも追い掛け回され、そのためクラスの連中にも発見された俺は、ひたすら鬼ごっこを全力で行うことになった。輝日南中の屋外プール付近に到着した俺は、鍵が掛かってないことに気がつき、水泳部という身分を生かしてプールの中に逃げた。鍵が開いていた理由は何故か分からなかった。

全力疾走を繰り返した俺の脚は、既に限界を迎えていた。走ってこられたのは、スイマーズハイのランニング版であるランナーズハイに達していたからであった。やけくそになっていたこともあり、（どうにでもなってしまうえ！あはは、走るの楽しいな！）

という心境で走っていたのである。

「大丈夫か？」

「えっ、うん。腿が少し痛いけど平気」

なんちゅう足だ、俺よりも鍛えられているんじゃないか？と思わせるくらい、森島の顔は汗が浮かんでいるくらいでケロツとしていた。森島って、運動が得意じゃないって言ってなかったか？

「森島さん、って運動得意なの？」

「ううん、男の子に混じって泥だらけになったり山の中に入ったりしてたけどスポーツは得意じゃないの」

ああ、原作にそういった内容があったような気がした。確か服を買ってもらっても、よく汚したっていう話だっけな。うん、毎日走り回っている経験があれば、水の中がメインの俺より足腰が強くて違和感は無いかな。…少し悔しいけど。

「うっ、目に汗が入っていたいよう」

ほらほら、汗が目に入って痛いんじゃないのか？目をこすらない、大人になってから目を悪くするぞ。俺はポケットから可愛らしい子

犬のキャラがプリントされた自分のハンカチを裏返して額の汗を拭く。

「あっ……」

「目を擦るな、痛めるぞ」

「うん」

何か無邪気な娘の仕草をいちいち注意するお父さんみたいな気分になる。こういう気分や気持ちを父性というのだろうか、それとも保護欲とでも言うのだろうか。うん、分からない。

そんなことを考えながら、森島の額や頬の汗をハンカチで拭いていく。

「ほら、出来たから今度は自分でやるんだぞ」

「あ、ありがとう……」

「え？……あ、そうか、すまん」

森島のぽかんとした顔を見て、自分のやっていることが分不相応なことに気がつき、俺は言葉を濁してごまかそうとした。そうだが、俺は彼女にとっては同級生であって、見知ったおじさんではないのだ。ただの同級生がこんな事をするのは、普通は可笑しな話なのだ。自分の行為をフォローする言葉を言おうとする時、俺と森島がいる場所に近い位置から物音がした。俺は開いた口を閉じ、音源が何かを掴もうとする。

ペタツ…ペタツ…

(足音!?)

と俺は緩み始めた緊張の糸が再び張り詰めていくのを感じた。が、どうにも身体に力が入らない。壁に身体を預けて、音のするほうをじっと見るだけで精一杯である。自分が奴らに見つかって、ボロ雑巾になる姿を浮かべてげんなりする。

「拓君?こんなところで何をしているの?」

「たっくん、案内は終わったの?」

足音のする方向には見知った姿を見かけた。俺は味方を見つけ救われた気持ちになり、そこで緊張の糸が切ってしまった。下半身に

力が入らず、壁にもたれかかったまま座り込んでしまった。森島、知子、響が何かを言っている気がしたが、俺にはもはや何も聞こえてこなかった。…もう駄目だ、眠い…

無理な姿勢で眠ったことと全速疾走を何度も繰り返したせいで、俺は翌日筋肉痛に悩まされることとなった。登校では自転車のペダルを踏むたびに脚が軋み、激痛が全身に走って顔が何度も苦痛を主張するように歪んだ。登校の最中に、何度も響と知子に心配されたものだ。

教室に入った時は、昨日の騒ぎが嘘のように穏やかでまったりした空気が出迎えてくれた。俺を見て特に騒ぎ立てる奴もなく、俺に対して軽く挨拶したり筋肉痛を心配してくれているくらいだった。身構えていた自分が馬鹿みたいに思えて拍子抜けしてしまったほど

に空気が昨日と違ったのだ。

昨日のことは良く覚えていないが、知子と響の話を書くことによると、途中で俺は壁にもたれかかったまま気を失い、死んだように眠っていたそうだ。俺が眠っている間に知子は、男子を逆に萎縮させる勢いで追い掛け回し、俺の様子を見せて自分達のした結果が人に迷惑を掛けたことを見せたらしい。後日俺に謝りに来たクラスメイトの一人は、「あの時の川田の威圧感と怒気は半端無かった。殺されるかと思った」という評価を残している。取りあえず、「あいつを怒らせると物凄い恐いから、二度と怒らせないように」とだけ、俺は彼に伝えた。

起きた時には6時を回っていたくらいだ。着ていた服は、汗まみれの制服から部活のジャージとTシャツに替わっていた。誰かが着替えさせてくれたのだろうか、と知子と響に尋ねると二人は揃って顔を真っ赤にしたことから、おそらく二人が着替えさせてくれたことを推測する。俺の裸なんか部活のレースで見慣れているはずなのに恥ずかしいもんかね。……下着まで替えされていたから、その点が非常に気になったが。

クラスに入って自分の席の前に注意を向ける。森島がクラスメイトから質問攻めにされたり、夕月・飛羽ペアに茶道部に来ないか、と時期外れの勧誘活動に巻き込まれたりしていた。

「よう、おはよう」

俺は会話という嵐の中心に近づき、何気なく挨拶をする。森島と周囲の愉快的クラスメイト達は、俺の姿を見ると、「うつつ」「おはよ」とそれぞれ軽く挨拶を返したり、「昨日は悪かったな」など昨日の出来事で迷惑を掛けたことを謝ったりする。森島は、俺の顔を見ると質問攻めで困っていた顔から、不安の色を浮かべた顔へと

変わっていった。何でそんなに顔つきが変わったのか、と疑問に思う。森島から、少し慌てた感じで言葉が発される。

「遠野君、おはよう。え〜っと、その、身体は大丈夫なのかな」

ああ、昨日の騒ぎで迷惑を掛けたことを気にしていたのか。まあ、そんなに気にすることでもないし気負いすぎることはないよ。俺は、森島を気遣い穏やかな様子で声を掛ける。実際は凄いやせ我慢であったが。

「少しだけ脚が張ってるけど大丈夫。特に問題は無いよ」

「そっか、ごめんね。私が迷惑を掛けたばかりに、遠野君に酷い事しちゃったよね」

だが、「脚が張っている」という俺の言葉に森島の顔は更に暗くなり、森島の口から発されていた声のトーンも下がった。その様子から森島がしょぼんとしている様子が、俺にはつきりと伝わってくる。流石に場の雰囲気をぶち壊すのはよくないし、美人が落ち込んでいる姿を見ているのは、ドラマみたいに絵にはなるが長く見ていると気が滅入ってしまう。

「ああ、いや。まあその、なんだ、気にしないでくれよ。脚はこんななっただけ、俺は退屈な日常から抜け出して楽しかったんだ。だから、森島さんが心を痛めなくてもいいんだ」

「本当に？」

「本心からだ」

「そっかそっか、ありがと。…ふふふ」

森島はほっとしたのか、表情が笑顔に戻っていた。そして笑い出したので、疑問に思った俺は「ん、どうした」と森島に笑い出した理由を尋ねる。

「いや、君って優しいなあ、って思ってた。」

「そっか、普通じゃないのか？」

「優しい」とは元主将や響、知子、それに逢、橘、梅原などから言われてきたが、別に森島に対して其処まで気を回した訳でもない。好きな子をついつい虐めるとか、接し方が分からずぶっきら棒になるなどの子どものような振舞い方をせず、歳の割には大人びた行動が見られるから、その点が優しいと評価されているかもしれない。

「ううん、男の子の中じゃ遠野君みたいな子は初めてだよ。私にとっては」

「ふうん、そんなもんかね」

そのようなやり取りをしている時、横の席にいる夕月が俺の肩を叩いて呼んでいる。夕月の方を振り向くと、

「おい遠野、ラブコメしてる暇があったらアンタも茶道部として手

伝ってくれよ！」

「別にラブコメをしているつもりは俺には無い。…茶道部が森島さんと何か関係があるのか？」

「茶道部への勧誘さ！なんたって森島さんは美人で1年生だ。この人材を逃す部活が他にいるとは思えないね。そこで、アタシ等茶道部が勧誘！」

「先物買い」

森島はるかという高スペック新人の奪い合いが、体育会系の部活のみならず文化系のそれらを巻き込んで発生する。まだまだ森島の周囲では色んな事件が絶えないのか、という懸念が次第に強くなっていく。

そんな期待したくない未来を描いている中、森島はじつと俺のほうを見ていた。顎に指を当てて何かを考え事をしているみたいだった。

「ねえ、遠野君」

と、俺は唐突に声を掛けられる。いきなりだったので、生返事を返す。

「あん？」

「水泳部ってどんな活動をしているのかな？」

「…え？」

この発言が元で、俺は更に頭を抱える事態が発生した。

テーパーを失敗した俺は、新人戦を1フリ決勝七位、2フリ決勝8位という散々な結果で終えてしまった。その翌週の始め、我らがクラスの美少女が俺達と同じジャージを着て、顧問の横に立って俺達水泳部の部員の前に現れたのだった。

「え、今日からマネージャーとして入部することになった、1年の森島はるかさんだ。」

(…どうしてこうなった)

「森島はるかです！皆さん、よろしくお願いします！」

(え、っと、色んな部活の見学には連れて行っただけ、何で？)

口々に部員が何か歓喜の声を上げて騒いでいるのが聞こえるが、俺はその内容を耳に入れる精神的な余裕は無かった。俺はこの事態が起こった理由が分からず、頭は混乱し、額に手を当てて悩み続け

ていた。

水泳部に決めた、なんて発言を俺は聞いていなかった。てつきり、「どこも面白そうだけど大変そう」と原作みたく飽きたり面倒だと感じたりして入部しないと思っていた。ああ、山口先輩になんて報告すればいいんだ、クラスの中は何を思っているんだろうか…。悩みの種が多くなる一方であった。

「拓君」「たつくん」

「はい…」

「後で、どういふことか説明してもらえないかしら」「あとでどういふことか説明してくれない？」

俺の左と右に並ぶ響と知子に小声で囁かれた。横を向くと、背筋に悪寒が走り、視線が側頭部を貫いているような気がする。

居た堪れなくなった俺は、逃げるように森島の方に視線を向ける。森島は俺と目が合つと笑顔で手を振っている。さらに側頭部を貫く視線の強度が増したような気がする。ここに更なる悩みの種が増えたことを状況が俺に語っていた。

口からは「あはは……」と乾いた笑いしか出てこなかった。そして身体からは嫌な汗が出ていることを衣服の湿りから感じる。

(もう、どうにでもなれ)

と、俺はやり場の無い視線を部室の天井に向け、じっと眺めていた。

(次回へ続く)

第十五話：ラブリー入部（後書き）

ご一読ありがとうございます。

次第にオリジナルの設定が増えていき、大丈夫かな、と思いながら進めております。

それでも皆様に楽しんで頂けると幸いです。

それでは！

第十六話：ただ自分を超えるために（1）

『よーい……』

ピツ、と電子ピストルの音が会場内に響き渡る。その合図に従ってスタート台に立った選手達は一斉に飛び込み、全力で泳ぎ出す。会場内が声援に包まれ、声援の熱が次第に高まり、冬なのに身体が高揚して熱くなってくるのを感じた。

季節は冬、十二月中旬。俺は腕を胸の前で組み、プールサイドの壁にもたれ掛かりながら、目の前で行われている100m平泳ぎのレースを眺めていた。25mを過ぎたところで、4コースの選手が身体半分集団から前に抜け出し、突き放しに掛かる。5コースの選手はそれに負けないように必死にくらいついている。

電光掲示板で4コースと5コースの名前とタイムを見る。輝日南高校三年と輝日東高校一年の選手であり、俺の知らない選手だった。二人のレースの様子を遠目で見ながら、二人の関係性について要らぬ推測を楽しむ。

「調子はどうかしら、輝日南中のエースさん」

ふと右から俺を呼ぶ声が聞こえたので、呼ばれた方向に顔を向ける。そこには、100mバタフライを終えた知子が立っていた。レース後のクールダウンを終えて、塗れた身体と水着をセームタオルで拭いていた。

「ああ、知子か。いい感じだよ」

「そっか」

知子は、俺のすぐ傍の壁に寄りかかる。そして、顔だけ俺のほうを向くがその口からは何も発されず、視線を合わせても逸らされてしまう。そして互いに会話が続き、他人からは分からない緊張感が広がる。二人になった時に生じる気恥ずかしさは、未だに俺と知子の中に健在であった。女の子と気恥ずかしくて喋れないなんて、中学生かよと自嘲気味に思ったことも何度もあった。その後、自分が中学生であることを思い返すことも御馴染みであったが。

プールに視線を戻すと、どうやらレースが終わったようだ。電光掲示板には、4コースの選手が一着で指しきり、二着は5コースではなく3コースの選手だった。ひょっとして前半から飛ばすタイプだったのかな。

「そっちも調子よさそうだな。さっきベストが出たじゃないか。後半バテずにいい感じに泳げてたし」

俺は先ほどの知子の100mバタフライの泳ぎについて話題に出し

た。

「そうなの？後半どんな感じだった？」

「そうだな、ラップを計算してないから感覚だけど、いつも残り25mで疲れてくるのに、今回はバテてなかったよ」

プールサイドからレースの様子を見ていたが、泳ぎ方やラップも泳者の好調を物語っているような印象を俺は感じた。俺は、自分の覚えているイメージをなるべく言葉を選んで知子に分かりやすく話した。

その後も、頭の中に残っている知子の泳ぎとタイムを思い出しながら、知子にその様子を一つ一つ伝えた。知子も、俺の言葉に相槌を打ちながら耳を傾けていた。

「そうなんだ。嘘つてことは無いよね」

「嘘なんてついてどうする。気になるなら森島にラップ聞いてこいよ」

向かい側のプールサイドで先輩マネージャーと一緒にノートに何かを書いている森島を指差す。二人とも笑顔で、仲良く作業をしているようだった。

「うっん、はるちゃんには後で聞いわ。ありがとう、私の泳ぎを見ていてくれて」

「そうか？ まあ、これくらい誰でも言いそうだけだな」

「それでも！　ありがとう」

知子は、笑顔を向けてこちらを向く。俺は照れくさくなって頭を掻く。本当に精神も中学生に戻ってしまったみたいで、胸の辺りがむず痒かった。

「どういたしまして。それより、早めにスタンドに戻って休んでおきな」

「うん、それじゃあ1フリ頑張ってね」

知子は壁から身体を離し、スタンドへ向かう階段に向かって歩いていった。きつとベストが出たことや欠点を克服できたことから来る嬉しさなのだろう、その足取りはすごくぶる軽やかであった。俺もそんな姿を見て、自分のように心が温かくなるような気持ちになった。そうした姿を見て、俺もレースを頑張ろうとする気になる。それが、個人種目なのにみんなで頑張る競泳の醍醐味なんだ。

知子と離れた後も、俺はその場に留まり周囲をのんびり眺めていた。視線をアツププールの一角に向けると、古巣のスィム輝日南の選手やコーチの面々が見えた。せつかくだし、挨拶しに向かうかと思ひ、俺はその場から離れ集団に近づいた。

「お、拓じゃないか！ 久しぶりだな」

「ご無沙汰してます。コーチもお元気そうで」

俺は、コーチに頭を下げる。「元気そうだな」「はい」と、とりとめのない世間話を興じながら俺は周囲のスクール所属の選手達を見る。二人ほど知っている顔があったが、残りの年少の生徒は既に俺の知らない選手だらけであった。選手の数人かは、俺の知らない新任のコーチに「あのひとだあれ」と尋ねられており、困った様子であった。

「選手もコーチもいろいろ代替わりしてしまいましたね」

「まあな、お前の知っているのは知子と響を除けば、五年の逢、それにそこにいる四年の健太と敦だけじゃねえか？」

「……ですね」

自分のかつて居た場所が、他の知らない誰かで一杯になっていると、居場所が無くなっていくようで寂寥を禁じえなかった。思ひ出というものは代わらないけど、周囲は時間の変化と共に変わっていくもんだ、ということを再確認したような気がした。

ふとアッププールから少し離れた飛込み台付近で騒ぎ声が耳に入ったので、コーチと共に一緒に声のした方を向く。すると、俺の知らないスクールの選手が騒いでいるのが見えた。横ではレースを終えた響が慌てている様子が見える。

（相変わらず、響は子どものお守りは苦手なんだな）

と苦笑して、その様子を眺めていた。その子どもは相当なお調子者なのだろうか、聞き取れないが何かを叫んでいて、響は手を付けられず困っているようだった。

「響は、やはり子どももの面倒がまだ得意じゃないそうですね」

「小五の頃、逢の面倒を見終えた後に任せた一年生の子どもが相当な悪ガキだったからな。それ以来、ああいう理が通じないタイプが苦手意識を持ってしまったみたいでな。何とか克服しようとして頑張っているんだが、中々順調にはいかないようだ」

苦笑いをしながらコーチが言う。確かに逢はとても良い子だったが、その一年後に担当した男の子は暴れん坊で、見る方は堪ったものではなかった。両親も我が子のやる事にケチをつけるな、と仰る相当変わった方々だった。三ヶ月ほど辛抱強くコーチと俺と響が一緒に面倒を見ていたがどうにも態度は変わらず、残念ながら退会してもらった子がいた。あの子の言動は親の育て方に問題があったんだ、気にするなよ、と俺は響には言ったんだが、相当あれで苦手意

識を持ってしまったんだよな。あれは当時、本当に腹に立ったもんだ。

助け舟を出すか、という事で俺は動き出し騒ぎ出す彼をなだめに掛かる。これが初試合で緊張と興奮のしすぎでつい大声を出したくなったことは、判別できた言葉と雰囲気から伝わってきた。

少し強めの言葉を出して、興奮した様子を抑えた上でなるべく穏やかな声で喋り、その少年選手を宥める。少年が落ち着きを持ったところで、響に謝るように諭し、コーチの元に戻させた。

「ありがとう拓君。助かったわ」

ほっとした様子の響の顔が見えた。

「いいさ。それより響、おまえ相変わらず子どもが苦手なんだな」「う……ごめんなさい」

俺はほっとした響を、からかうような口調で言う。そんな俺の言葉に、痛い所を突かれたのか、響は頬を染めて言葉に詰まり俺に謝る。それとも自分の失態を見られたことが恥ずかしくなったのか、再び沈黙。まったく、急展開や合理的でないことに弱いのは相変わらずだな、と数年前の響の様子と較べながら思った。

響の顔をもう一度見る。響の顔が、沈んだまま浮き上がってこなかった。俺の言葉を冗談だと受け取ってなかったように感じられ、俺はやりすぎたかなと思ってフォローを入れる。こいつが真面目過ぎることを、俺はすっかり忘れていた。

「すまん、冗談だ。だから別に謝らなくてもいいさ。それにな、ゆっくり慣れれば何とかなる。大丈夫だ」

響の頭に手を置く。落ち込んだ仲間を励ますときには頭に手をそっと置いて少し撫でる、昔から俺の癖だ。響の沈んだ感情がやっと浮き上がってきたのか、徐々に顔に赤みを帯び始め、口元が綻び始める。

「そうね……いつまでも逢に頼りっぱなしというのも悪いし」
「逢？」

「そう、今は逢が主に小さい子の引率をしているのよ。中学生の私は忙しいから、そうそう役割を振るわけにはいかないし。ほら、そこにいるわよ」

響の指の先には、ジャージを着た逢が小さい子達の泳ぎ方の一生懸命指導している姿があった。アッププールの1つのコースを往復している子達の泳ぎを見て、口を動かして何かを伝えているようだ。あんなに小さかったのにきちんとお姉さんが出来るようになったのだなあ、時間というものは凄いな、と何か感慨深くなった。

逢の姿とまだ表情に元気の無い響を見て何かピンときて、

「なあ、ちょっと逢のところに行ってみようぜ」

「え……ちよ、ちよっと」

と、響の手を牽いて逢の方に向かった。こんなところで世間話を細々やるよりも、場所を変えて違う人と話したほうが気分転換しやすいしな。

響は少し批難の声を挙げたが、別に抵抗は無く、大人しく俺に手を引っ張られながら逢のところへ向かう。

「よう、レースでは久々だな」

と、俺は後ろから逢に声を掛ける。ビックリしてこちらを見た逢は、俺達の顔を見てはあつと顔を輝かせる。子ども達に、ちよつと待っててね、と断ってから俺達の方へと早足で掛けてくる。

「私に会いに来てくれたの！」

「そいつもあるな、あとこいつがしょぼくれちまったから少し気分転換させにちょっと、な」

しょぼくれていた本人に目線を向けると、罰の悪そうに視線を逸らして頬を染める。逢も先ほどの光景を見ていたのか、少し苦笑していた。

「あー……あの子。元気な良い子なんだけど、ちょっと腕白で周りに合わせられないところがあるから……コーチも大変そうだったし」
「そうか」

と、俺達は先ほどの子とコーチが話をしている様子を遠めで見る。コーチが口を動かして、子どもの方は何も動かない。

(軽いお説教かな。まあ少し叱られたほうがあの子の将来のためにもなるし、いいことだな)

と俺はおっさんのような事を考えた。

「まあ、あの子は例外として……それでも、お前はしっかりお姉ちゃんをできるようになったんだな」

「本当？ 本当にそう思ってる!？」

「お前に嘘ついてどうするんだよ」

「やったあ！」

と、元気良く飛び上がる。たまに思うが、原作のクールさがことうすると微塵も感じられない。本来はクールと言うよりかは、感情に正直な性格なのかな、とさえ思ってしまう。俺にとっては、これは嬉しいことなのかどうかは分からないけど。

子ども達の方に目を向けると、そのうちの白いゴムキャップを被った一人が俺達のほうに口を開いて何かを訴えているようだった。子ども達が何か俺達と逢を呼んでいる気がしたので、その方に足を運ぶ。

「ケイクン、どうしたの？」

と、俺達を呼んでいたケイクンに優しい口調で尋ねる。周囲の子どもがニヤニヤした表情で、お前聞けよ、あんたが聞きなさいよと質問を投げる責任者を押し付けあっているようだ。

「もう、ケイクン、どうしたの？」

そのケイクンは口をもごもごさせた後、次の質問を投げかけた。

「あのね、あいちゃん。ひよっとして、この前言ってた好きな人ってこのお兄ちゃんのこと？」

「ば、ばか！何を言ってるの！」

「あゝ赤くなってる！やっぱりこの兄ちゃんなんだ！」

周囲の子ども達のボルテージが高くなる。どんな世代でも、こういう話題で盛り上がるのは変わらないようだ。

「でもこのお兄ちゃん、ひびきお姉さんと手を繋いでるよ」

「きつと、フタマタなんだぜ！ フタマタ！」

「しゅらば、しゅらば」

その子ども達の言葉に自分の左手を見る。堅く握られた手と手、そして俺のものじゃない手の持ち主の顔を見ると顔を赤くした響がいた。さつきから、どうにも喋らないなと思ったら、ひよっとしてこれで気恥ずかしかったのか。

「あ、いや、すまない」

「あ……」

と、さつと手を開いて響の手を離す。響は小さく声を出して、繋がれていた方の手の平を見る。もしかして、手汗でも掻いていたのかなと思ひ、俺も自分の手を見るがプールの水のせいでよく分からなかった。それでも、雰囲気が何かいつもと違う感じがするぞ。

「むう……」

「あれ？ あいちゃんがちょっと怖い顔になったよ？」

「知ってるか？ あれって『しつと』って言うらしいぜ！」

「やきもち、やきもち」

「もう、貴方達は自分のレースに向けてちゃんと泳いでおきなさい！」

と、逢は何かちゃちゃを入れていた子ども達を叱り付ける。子ども達は「うわー！ 逃げろー！」と言って、全員一列で向かいのコーチたちがいる方に泳いでいく。

逢は顔を真っ赤にして、肩で息をしている。やれやれ、逢も響も年下から慕われるのはいいが、からかわれやすいのは同じなんだな。俺達は、プールの中で泳いでいる子ども達の姿に気持ちが向いていて、後ろから迫る捕獲者の気配を感じることは出来なかった。

「げっちゅー！」

「わわっ！」

隣に立つ逢が驚いた声を挙げる。何事かと思つて横を見ると、大きな何かが後ろから逢を抱きしめていた。視線を逢の顔から少し上に上げると、眩しいくらいに輝いている森島の顔があつた。

「遠野君！ この子、すつごくカワイイ！」

「い、いきなり、なんですか！」

いきなり後ろから森島に抱きしめられた逢は、手をバタバタさせて逃げだそうとする。逢に頬擦りする森島の目は、可愛いらしいものや面白そうなものを見つけた時に見せる光り輝く星みたいなものが見えた気がした。こうなつた森島は、抵抗したところで並の力では引き離せないだろう。

「もっ……こら、はるか。いたいけな小学生をいじめないの！」

スクールの後輩の面倒から解放された響が、逢に抱きつく森島に注意を入れる。どうやら気持ちを立て直したらしい。響の声を聞いた森島は、それでも離したくはないと不満そうな顔を浮かべる。

「え、でもスツゴクかわいいのよ？ ひびき、この子飼っちゃダメ？」

「飼っちゃダメ。あと1年間弱で水泳部に入るんだから、それまで

待ちなさい」

「むく、ひびきちゃんの意地悪……」

まるで、駄々っ子が近くで見つけたカワイイ子猫を拾って、母親が飼ってはダメと言っているような光景であった。

森島と響は、原作では大の仲良しであり、この世界でもそれは引き継いでいるようであった。正直俺の存在がどれだけ影響するのかと内心焦っていたのだが、あまり変化が無くて本心からほっとしたものだ。水泳部の活動でも、森島、響、知子の三人は水泳部に関する話を始め、学校生活、最近見た恐竜映画、ビーイングブームなど色々な話の花を咲かせていた。

俺も森島の強引な誘いでその姦しい輪に混じり、彼女らのガールズトークを聞くことが頻繁にあつた。年頃の女の子三人のパワーに、俺はたじろがない時が無く、たまに話を振られたら返すくらいであった。

ただ、森島が「みんなの初恋っていつなの？」という話題を振られた時は一気にその場の姦しさが嘘のように静かになったことがあつた。知子は、頬を赤くして何にも応えようとせず、響も頬を赤に染めた微笑を称えたまま黙っていた。異様な緊張感で俺は口を開けず、森島だけが「おりよ？みんなどうかしたの？」と小鳥が首をか

しげるように不思議そうな態度を取っていた。

それはともかく、知子は「はるちゃん」、響は「はるか」と森島を呼ぶようになり、森島も「ともちゃん」「ひびきちゃん」とお互い愛称で呼び合うようになった。

森島は俺についても愛称で呼んでほしいと言ったが、また要らぬ誤解を巻き起こしたくないと思って「森島」と呼ばせてほしいと頼んだ。残念そうな顔をしていたが、必死に頼み込んで何とか納得させた。

「何でもいいですから、離してください!」

「そうね、はるか。逢を離してあげて」

抱きしめていた腕を逢から離すと、逢はすぐさま俺の背後に隠れる。

「あゝあ、逃げられちゃった」

「逃がしてあげなさい」

「むづ……逢ちゃん。お姉さん、一年待ってるからね……」

一年待ったら飼われるのか、と俺は心の中で突っ込む。

「まったく……逢。そろそろ1フリの召集が始まるでしょ、行ったほうがいいわ」

響の言葉を聞いて、天井の電光掲示板で今行われているレースの種目と組を確認する。10歳以下の男子1000m自由形の第6組が行われていた。10歳以下の男子1000m自由形の最終組の召集を行っている役員の声が聞こえる。

「そうだな。逢、行ってこい」

「行ってらっしゃい」

「頑張つてね！」

「はい！」

皆が逢に声援を送り、俺が逢の頭をポンと撫でた後、逢は召集場所へと向かって早足で歩いていった。

逢の姿を見送った後、俺も自分のレースが近いことを思い出した。

「俺もレースに向けて少し身体を動かしてくるわ」

「うん！ 応援してるからね、遠野君！」

「ええ。がんばってきてね、拓君」

「まかされよ」

と二人は俺から離れて、それぞれの持ち場に戻っていく。お祭り騒ぎが終わり、全力を出せるよう集中し始める。

電光掲示板を見ると、100m平泳ぎの順位と結果から100m自由形のスタートリストへと切り替わる。ここからが本番だと言い聞かせて、俺はストレッチを始めた。

(次回へ続く)

第十六話：ただ自分を超えるために（1）（後書き）

ご一読ありがとうございます。

少々、更新速度が次第に遅れておりますが、何とかゆっくりとでも更新していききたいと思っています。

中学一年生編も終盤です。

そろそろ、二年生。薫さんや梨穂子さんの介入が起こる時期です。しっかり練っていこうと思います。

それでは、失礼します。

第十七話：ただ自分を超えるために（2）（前書き）

長い間、投稿が出来ず申し訳ございませんでした。

第十七話：ただ自分を超えるために（2）

俺には、この世界に転生して以来、どうしても克服できないものがあった。

それは、鏡などに映った自分の像を長時間見続けることだ。

べつに自分のルックスや顔があまりに酷くて、見るに堪えないからという理由では無い。鏡に映る自分をじっと見続けていると何故か吐き気や頭痛が起こるのだ。俺が転生してから今までの13年間、ずっとだ。何て言えばいいのか、鏡に映った姿が自分の前世からのイメージとして持っていた「自分」と大きく乖離しているようで、感じる違和感が尋常ではないのだ。そして、吐き気や違和感を堪えた後に必ず考えてしまうことがあるのだ。

目の前のこいつは、一体誰だ？、と。

俺の姿を映した招集所近くのガラスを一瞥した俺は、壁に寄りかかって足を組み、競技中のメインプールに顔を向けた。目の前では小学校高学年の女子選手が残り25mの距離をクロールによる激しいデッドヒートが繰り広げられていた。4コースと3コースの選手がトップ争いをして、それを残りの選手がトップ層の身体一つ分の距離の差を詰めようと迫っていた。やがて15mラインを越えると、3コースの選手のスピードが緩々と落ち、4コースの選手との差が広がり始めた。

(こりゃあ勝負が決まったかな)

と、レースの先行きに対しての興味が急に冷めていった。

結局4コースの選手が身体一つ分抜けた状態でゴールし、そのレースは終わった。電光掲示板を見ても選手の名前や所属は知らないし、タイムに関しても興味を誘うものでもなかった。

次の試合に興味を持たなかった俺は、ふと視線を招集所に向けるとそこに輝日東高校のラベルが入ったジャージを着た女子に目を向けた。特に美人だというわけでも、好みのタイプだから意識が向いたわけではなく、彼女の髪が黒のロングヘアが印象的だった。おそらく綺麗に手入れが施されているのだろう、その黒髪は美しかった。

その黒髪と笑顔を見て、絢辻先輩を思い出した。

「……………ちよつと遠野君。あなた、あたしの話をちゃんと聞いているの？」

腰かけているベンチの背もたれの部分をバンと左手で叩く。その音にびっくりした俺は肩をすくめて目を瞑った。はつきり言って、人形のように美しい女性からは想像も出来ないような人を射抜くような視線と荒げた言動の迫力は冗談抜きに怖いと思ったし、今思い返してもやっぱり怖い。

「は、はい！ 聞いておりますです、はい！」

「本当？ ……はあ、まあいいわ。でね、その輝日東高の新人教師が……………」

背筋を伸ばして返事をする俺をジト目で見ると、ため息を吐いて再び海を見ながら話を続けた。俺は再び苦笑を浮かべて、先輩の話を聞くことに専念した。心境は、ビールを飲んでベロベロになった同僚の愚痴を聞いているのと同じようなもの、簡単にいえばげんなりしている。それでげんなりした気持ちのため息となったり顔に浮かんだりすると、先程のようなやり取りが始まる。何とも心の温まる話ではないだろうか。

先程から続いている話とは、輝日東高の女性の新人教師の仕事ぶりの事だ。まだまだ配属されたばかりで仕事に慣れていないのは分かるが、授業内容が準備不足丸分かりであることや自分に仕事を振りすぎて辛いということに俺に愚痴っていた訳である。もちろん俺は陰口が嫌いだ、こういう話を聞くようになったのも元は絢辻先輩にとつての心の地雷を踏んでしまった俺の行動に原因がある。

「……という話なの！ もうあの無能教師、私の気も知らないで！」
先輩が硬く握られた両手で自分の太股に叩きつけながら、強い口調で言い放った。どうやら先輩のボルテージは最高潮に達しているようであった。「ようだった」というのは、先輩の話を俺は半分以上は聞き流したために、根幹となる部分以外は頭に入っていないからである。その時の俺の思考回路は、本当になんたら寸前の状態だったのだ。

「……………でね、遠野君。君はどう思うー！」
「……………は？」

呆けていた中にいきなりのキラークラスを振られ、俺は戸惑った。話の根幹に関係ないよね、無茶ぶりもいいところだ、と心の底から思ったものだ。

「え……そうですね。新人にいきなり即戦力を求める風潮は今の日本では無くてですね、その……どちらかと言えば新人にとつて今の期間は人材育成に当たるのではないのでしょうか。ですから、無能だと思うお気持ちは理解できますが、断言して貶めるのは酷と言えないでしょうか」

「でも、教師なのよ！ 人の人生を左右するのよ」

「神様や天才でない限り、教師にだって新米の期間があります。配属されて最初から全部出来るなんてことは無いと思いますが……」
「むっ……」

むっとした表情の先輩の口から唸り声が漏れて、俺に鋭い視線を浴びせる。これまでに幾らか浴びせられたが、やはり怖いからその射殺するような視線は止めてほしいと心から思う。

「遠野君って、大人みたいな口を聞くのね。まるで、教師みたい」
「き、教師ですか？」

「そうよ。常識人ぶって、自分の言っていることが正しい、と自論を一般論のように話す口調が特にね」

絢辻先輩は、拗ねた口調でそう言い、海の方に顔を向けてぶっつき黙ってしまった。何と話しかけても、彼女は眉間に皺を寄せて拗ねたような表情をする以外に一切俺の言葉に反応しなかった。

(別に意地悪したつもりは無いんだけどな、何でだろ)

俺も海の方に顔を向け、隣の拗ねた年上の子どもの気分を害さないように小さく溜め息をついた。

気分を変えようと、練習上がりを買った缶ジュースを学生鞆から取り出して、栓を開けた。あんなに冷えていた中身は少し温くなっていて、美味しいとも不味いともいえない味と喉越しに俺はしかめ

面をした。横目で先輩の横顔をちらつと見たが、彼女は相変わらず海の方を見ていた。

（そういえば、こんな事が昔どこかであった気がする。あれはいつの事だっけ）

その温い炭酸飲料を口にしながら、俺は前世で似たような事があったことをぼんやり思い出した。そうだ、あれは前世の高校時代の時で、当時好きだった女子のクラスメートと少しいい感じになっていた頃だ。その彼女は進路や勉強について愚痴を良く漏らしていたので、何でも理解してやる、助けてやると意気込んでいた俺はこんな感じに口を挟んだっけな。そういうと、そのクラスメートには

「おせっかい！ そんな意見、私は聞いてないわよ！」

「もういいわよ、馬鹿！」

と涙を浮かべて罵倒されたものだ。

（何だよ、あの態度は。人が親切心起こして、動いてやったのに）

と、あの時は彼女の言動が分からず、恨みつらみを聞かされた俺は怒るよりも先に呆けたもんだ。今思い返せば、彼女はただ自分の話を聞いてほしかったのかもしれない。そんな中の上から教えてやっています、みたいな態度を取られたら堪ったもんじゃない。いかに自分が人に配慮しきれない幼い人種だったか、と今ではとても反省

している。

この目の前で拗ねている先輩も、俺に自分の溜め込んだ何かを聞いてもらいたかっただけなのではなかるうか。普段から自分を抑え続けて苦しんでいた彼女の事だ、きつと相当ストレスや鬱屈した言葉を溜め込んでいたのだろう。

（身体だけデカくなっても、社会に出て働くようになっても女心を理解するスキルというものは前の中学生の頃から相変わらず変わってないな）

俺は再び溜め息をついた。今度は彼女の様子に対してではなく、自分の成長の無さに対して。それは情けなさを代弁するかのように、深く低い音がした。

先輩が拗ねて会話が途切れてからどのくらい経ったのだろうか。すでに空は、オレンジからネイビーブルーへとほとんど移り終えていた。その空の様子を見た俺は、ベンチに座ってから相当な時間が立っていたことを知った。夕食の時間など、いま何時か気になったので腕時計の針を見るべく腕まくりをしようとした。すると突然、口のチャックを締めていた先輩が口を開いた。

「ねえ」

「はい？」

呼ばれた気がしたので、俺はその動作を止めて先輩の方を振り向

く。その時の先輩は、頬杖を着いて夕日の沈む海を見ていた。きつと何気ない話題なんだろうな、と俺はすっかり気を緩めていた。

「あなたは、自分が何者かって悩んだことはある？」

「え……いきなり何ですか」

「いいから答えて」

せがむような口調で先輩が言ったので、俺は仕方なく思い当たる節を探し始めた。

正直なところ、このような自分探しのような話題は考えたくなかった。考え出すと、自分がこの世界であんな行動をして本当によかったのか、鏡に映る姿を見れない自分はおかしいんじゃないか、などとウジウジ悩んで、そんな自分が情けなくなるからだ。

「そうですね。『自分なら何でも出来る』という信念が現実を知って崩れたときに一度考えたことがあります」

「ふふ……それは、いかにも中学生の男の子が『真剣に哲学しています』って気合いが伝わってくる気がするわ」

まるで目の前の子どもをからかうような口調で先輩は言った。

俺も、全くその通りだと思った。

「いや、当時は真剣に考えたんですよ。何で俺はアイツに勝てないのか、俺は何で選ばれた人間じゃないのか……など、今からすれば馬鹿みたいな議題に夢中になったり」

「あら、そういうものなの？」

「何と言いますか、人生悩んだら足元を一度振り返ってみるってあるじゃないですか。そこで、今の自分の立ち位置を把握したり、足りないものを再確認したり」

「分からないわ、そんなことを考えたりしたことは、あたしの中で

今まで一度もなかったもの」

先輩はびしゃりと言い切った。

「いくらかは、遠野君のおかげね。あたしは、遠野君に自分の事を吐き捨てていくうちにだんだん整理できるようになった。あなたと出会う前には怒りや憎しみで見えていなかったものが、次第に見えるようになってきたの」

「例えば？」俺は訊いてしまった。

「あたし自身。やれ『絢辻家の誇り』だとか『家を守るための奴隷』だとか随分な事を言ってたけど、それは全部立ち上がれない自分への言い訳。本当に今の境遇が嫌で改善する気があるなら、その信念に則って行動できるはず。でも、あたしは出来ずにその境遇に甘んじる以外に何もできなかった。そこに至って、やっと気が付いたの。ああ、あたしの中身は恨みやあの人たちの価値観以外に何も無いんだって」

その言葉を聞いた時、僕は何だか酷く寂しい気持ちになった。

なんだか、自分の事を代弁されているような気がしたのだ。俺も過去の人生から無関係ではいられないこと、自分の顔をじっくり見ることが出来ないこと、自分が自分でない感覚をたまに感じる事など、俺も過去の価値観を取り除いたら何も残らないんじゃないかと。

境遇は違えでも、俺たちはどこか似ている。そんな気がしたんだ。

「それだけ自分が無いとすっかり分析できていれば、あとは時間を掛けて中身を詰めていけばいいのではないだろうか」

「中身？」

「図書館を回って自分が本当に好きな本を見つけたり、好きな音楽を探したり、大好きな親友を作ったり、そのようにして自分を作る

ものを身体に集めて積み立てればいいんですよ。あせらずじっくり、改善していきましょうよ」

「なんだかあたし、カレーになったみたい」

「おいしく出来上がるといいですね」

「何言ってるのよ」

ふふ、と声が絢辻先輩の方から漏れた。おそらく、絢辻先輩は笑っていたのだろう。

それは無理のある笑顔でもなく、俺に意地悪をして楽しむ顔でもなく、無垢で綺麗な笑顔のような気がした。単純に俺は思ったかつただけかもしれないけど。

笑い声が聞こえなくなり、

「そうね、いまの自分が嫌なら

」

「いまの自分を越えるしかないんですよ、先輩」

と、俺はぼそりと呟いた。その呟きは、プールの中の様々な音の中でかき消され、誰の耳にも届かなかった。

相当長い間考えていたのか、既に招集員は男子1000m自由形の招集を始めていた。少し急ぎ足で、俺は一緒の種目を泳ぐ先輩や同期と合流した。先輩の一人が俺の姿を見つけたのか、近づいてきて俺の方に近づいてきた。

「よう遠野、やっとこっちに来たか」

「すみません、遅かったですか」

「いや、来たのはいい時間だな。それよりもお前さ、その、大丈夫か？」

俺を気遣うような歯切れの悪い調子で先輩は言った。

その先輩の言葉の意味が何なのかよく分からなかったので、俺は先輩に訊き返した。

「大丈夫か、って何がですか？」

「いや、思いつめた顔をしていたからさ。少し心配していたんだよ。声掛けても反応しなかったし、集中しているのかもしれないからさ」

辺りに視線を移すと、チームの仲間が気遣わしげに俺を見ていることが分かった。どうやら先程の姿を見られていたようだった。先輩や同期からは、少し思いつめているように見られたらしく、心配させてしまっていたようだ。

「何にもないですよ。今日の泳ぎの確認と集中をしていただけです。」

大丈夫です、問題ありません」

「……なら、お前の言う事を信じるわ」

それ以降、仲間たちは自分の試合に集中するため、それ以上の追及は無かった。俺も腫れものを触るような事をされるのは望んでいなかったなので、その対応はありがたかった。

やがて仲間たちは、招集され競技を行い、俺の組のレースが始まるうとしていた。

『続きまして男子100m自由形、最終組の競技を行います』

スタート台に昇るよう笛が短く4回、そして長く1回吹かれた。俺は、天井を仰ぎ見て大きく深呼吸を一回した。瞼を下ろし集中を始めると、やがて周囲の歓声が耳に入ってこなくなつた。

いまの自分が嫌なら……

自分を越えるしかない

目を開いて前を向き、スタート台に両足を乗せた。その感触と心地よい緊張感に気分が少しずつ高揚していくのを胸の高鳴りで感じた。

そのまま、右足の指をスタート台に掛けて、いつものクラウチングスタイルのスタートのポーズを取った。胸のドキドキが消えない、いつでも行けるぞ、という気持ちに切り替わっていく。

『用意……』

水の音と静寂。姿勢を屈める

ピッ！！

電子ピストルの音が耳に入るや否や、俺は100mの一瞬に身を投じた。ただ、自分に打ち克ちたいという想いを胸に、何かを変えたいと思って後は一心不乱に泳いだ。背中の筋肉や腹筋が千切れそう、乳酸が蓄積や二酸化炭素の蓄積で身体に走る鈍い痛みや息苦しさに必死に耐えた。

ここでベストを出せたら、なんだか変われるような気がした。あくまで気がしたただけだったが。

1994年春。

再び桜が表舞台に立つ時代がやってきた。そして、その時代は出会いと別れが一度に来る時期でもあった。

まず、3月に水泳部や茶道部の所属していた先輩方が本校を卒業していった。輝日南高校へ進学した水泳部の元主将、輝日東高校へと進学した山口先輩を始め、俺が敬愛と畏怖した人々は人生の次のステージへと歩を進めていった。別れのシーズンはいつでも寂寥を禁じえないものだ。

もちろん別れの3月を過ぎれば、4月の出会いもあった。

2年生に進級して、クラブ代表として入学式に花飾りを配る作業をしている時だった。校門近くで花飾りを渡していた時に、俺はご両親と思われる大人の傍に見知った三人組を発見したので近づき、声を掛けた。

「梅原！ 橘！」

「師匠！ 久し振りッス！」

「遠野先輩、お久しぶりです」

梅原と橘は、俺の方へ駆け足で近付いてきた。俺は近づいてきた二人の肩の上にぼんと手を置いて、その後にカゴに入れてあった花飾りを2つ取り出し、それぞれの胸元に着けた。

まずは見知った二人、橘純一と梅原正吉の入学だった。橘も梅原も、大きめの学生服を買ったせいで、制服に着られているような感じで微笑ましかった。1年、2年経ったら、制服が身の丈にあつてくる事を楽しみにしている両親の姿が目に見えかぶようだった。

そんな良く分からない感慨に耽っていた時に、ふと二人のさきほど居た場所に目を向けると、茶色がかつた女子生徒が取り残されておろおろしていたのが目に入った。

「橘、あの子は？」

「あの子？ ああ、梨穂子のことですか？」

「お〜い、桜井さんも来いよ！」

（ああ、やっぱり桜井梨穂子だったか。確か何度か、橘との組み合わせで見たことがあったな）

俺は、橘と梅原に誘われおぼろげと近づいてくる女の子と、2年前に橘とよく一緒にいた女の子の姿を照らし合わせていた。目の前に桜井が来ると、俺は自己紹介を正式にはしていなかったことに気が付き、自分から切り出した。

「俺は、この学校の2年生の遠野拓です。ひよっとしたら何度か見かけているかもしれないけど」

「は、はい、遠野先輩。えと、その、桜井梨穂子です。よろしくお

願います」

「うん、よろしく桜井」

ただたどしい口調でぺこりとお辞儀をする桜井の様子に、俺は優しい気持ちになって穏やかに答えた。桜井の持つ癒し効果が半端ないことを、身を持って知った瞬間だった。

挨拶を済ませて、カゴの中の花飾りを手に取り、胸元に着けようとした。が、その手は胸元まで10cmまで手が迫った時にぴたりと動きを止まった。

（あれ？ 俺ってもしかして、いま不味いことしようとしてるんじゃないか？）

「ふえ？ と、遠野先輩、どうしたんですか？」

自分のしようとしていることを冷静に分析したら、セクハラ行為じゃないかと思いついて俺は動作を止めた。一通り考え終えて、目の前のことに意識を向けると、困惑した桜井の顔があった。どうやらその手を止めた俺の様子に、桜井は戸惑っているようだ。

「ゴホン、桜井。すまないが自分でつけてくれないか？」

「ふえ？ 何ですか？」

（中学生に似つかわしくない胸に、やすやすと触れられるわけないだろ！）

そう、桜井の胸はこの時点でそれなりに大きかったのだ。そうすると、着ける側としても何だかいけないことをしているような気がするのだ。

「勿体ないぜ、師匠！ そんなおいしい場面を見過ごすなんて！俺なら絶対……！」

「全くですよ、僕ならそこで……」
「お前ら、頼むから少し黙ってる」

各々の下心と妄想を包み隠さず、俺は曝露する後輩二人を柔道の締め技で黙らせた。「ギブギブ！」と言って、そのまま肩で息をきるような変態二人を一瞥した後、俺は桜井に向き合った。

「お前も女の子なんだから、もう少し、その、なんだ……」
「あゝ、すみませ〜ん」

後ろから不意に声を掛けられたような気がして、俺は後ろを振り向いた。

ふわふわした髪を持ったスレンダーな少女が、にこにこしながらそこに立っていた。

「花飾りくれませんか？ さっき貰ったんだけど落っこしちゃって」

「そうか、じゃあ予備の分があるから渡すよ。桜井、これ持つって」
「は、はい」

手に持っていた花飾りを桜井の手渡し、カゴから新しい花飾りを取り出して手渡した。

「へへん！ てーんきゅでーす！ じゃ、失礼しまーす！」

花飾り片手にその少女は、俺の前から去って行った。

昨年度を越える波乱とトラブルの種が降りかかる今年度の生活が、今始まったのだ。

(次回へ続く)

第十七話：ただ自分を超えるために（2）（後書き）

ご一読ありがとうございました。

更新ペースが3週間程度空いてしまいまして、本当に申し訳ございません。

どうしてもうまい具合に文章が書けなくて、悩んで更に書けなくなるという負の連鎖に陥ってしまいました。

だったら、下手でも無理でもいいから書きたいことを書くというスタンスで、楽しく書いてそれを投稿しました。

これからもご迷惑をおかけしますが、最後まで執筆しますので、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6950u/>

アマガミという現実を楽しもう！

2011年9月21日22時28分発行